

第十章

渾身の日本海海戦 無線電信の勝利

——明治三十八年——

十・一

千島列島から台湾南端まで
東奔西走の木村駿吉

◎東郷平八郎の帰京と「三笠」の修理

聯合艦隊司令長官の東郷平八郎は、海軍要人とともに東京に一時帰京した。

明治三十七年十二月三十日午前九時三十分、一同が新橋駅に到着すると、数万の観衆が集まって歓呼の声をあげた。

しかしこれからの戦闘の大変さを知っている一同の表情は硬かったと言われている。

同日十一時三十分、東郷平八郎は皇居に参内して明治天皇に拝謁奏上した。その時、

天皇陛下からは、

萬難ヲ排シ今日ノ成功ヲ収メタルヲ憚フ尚前途
遼遠ナリ將來ニ對シ益々奮勵セヨ

との勅語を賜った。

東郷司令長官は謹んで左のごとく奉答した。

優渥ナル勅語ヲ賜リ感激ニ堪ヘス今後敵艦隊ニ
對シテハ誓テ成功ヲ期ス謹ンテ奉答ス

そしてバルチック艦隊迎撃の方策についてご下問があった。

それに対して東郷平八郎は、

誓って敵増遣艦隊を撃滅して宸襟を安んじ
奉ります

——とお答えしたと伝えられている。

陪席していた山本権兵衛海軍大臣以下政府要人たちが

は、普段から慎重な東郷が「撃滅」という強い表現をしたので、驚いたと言われている。

その翌日東郷は青山墓地に詣で、乃木夫人を訪ねて二児の戦死を慰勞した。

旗艦「三笠」は十二月二十八日に呉軍港に着いて、徹夜連続の修理を始めた。

その時に同時に、無電機やアンテナの二重装備など無電関係の大幅な改良もなしたし、また黄海海戦の教訓を活かしたマストの改良などもおこなった。

修理を終えたのは明治三十八年二月十日であり、江田島を経て佐世保軍港に移動したのは二月十五日であった。

そして二月二十日午後佐世保を出て鎮海湾に向かい、翌二十一日午前鎮海湾に到着し、五月の大海戦までの間、砲撃の猛訓練をなすことになる。

「三笠」以外の各艦船も、大車輪で修理をおこない、また要員や艦隊の編成替えもなして、「三笠」に随航した。

(聯合艦隊の再編については後に記す)

◎バルチック艦隊迎撃のための

無電関係者の奮闘 一月

以下に、一月から数ヶ月間の無電関係事項を、日録風に概説する。

◇明治三十八年一月三日（一九〇五年）

台湾南端の鵝鸞鼻の無電が不調という連絡が有って木村駿吉は遠距離出張して調査していたが、その改善策を報告した。

そして八日には、駿吉自ら労力を提供して三六式を装備し、通信を開始した。

部品の品質に問題が有ったらしい。

この鵝鸞鼻出張中に旅順陥落の報を聞いたことは、前述したとおりである。

(図10・1a参照)

◇明治三十八年一月九日（一九〇五年）

鵝鸞鼻出張のついでだと考えられるが、駿吉が台湾

第八號 明治三十八年一月三日海軍技術師木村駿吉ノ提出セル鷗鼻無線電信所ニ關スル報告

帝國南端ノ哨衛タル鷗鼻無線電信所ハ臺灣總督府通信局ノ建築物ヲ轉入シテ之ニ海軍式無線電信機ヲ裝備シタルモノナリ然ルニ該建築物タル同局カ臺東ト通信スルノモヲ目的トシタル假造試驗室タルニ過キス之ヲ以テ萬般ノ設備一時的ニシテ通信室ハ兵員ノ宿舍ヨリ約五町ヲ隔テ同一ノ小屋ニ發電機二次電池アルカ爲メ充電中ハ受信ヲ防害シ然モ送信中ハ充電スヘカラサルニ依リ早晚之カ改造ヲ要ス且又無線電信機ヲ裝備スル臺ハ容易ニ振動スル木札ニシテ電柱ハ百五十

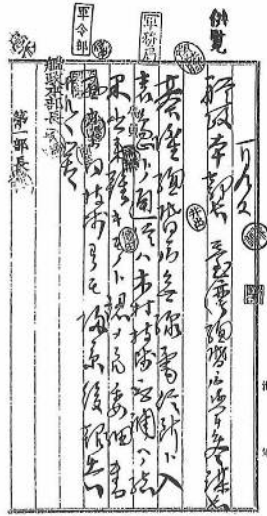


図10・1 (b左) 台湾~西表島の件

から西表島までの無電を実験したが不十分であり改良を必要としたことが、台湾総督から艦政本部への連絡書類に記されている。

晩年の駿吉の思出談を読むと、これら無電機の不具合の原因の多くは国産継電器にあつたらしい。

したがってイギリスから輸入された継電器の効用は大きかつたとわかる。

(図10・1 b 参照)

◇明治三十八年一月十日(一九〇五年)

このころ、聯合艦隊のそれぞれの艦船で大規模な人事異動があつた。

旗艦「三笠」の無電担当士官だった白根熊三大尉が七日付で「淺間」の分隊長となつて異動した。

図10・1 (a右) 台湾鷗鼻の件

◇明治三十八年一月十一日（一九〇五年）

白根にかわる「三笠」の無電担当士官として海軍大尉森初次が、「高千穂」から着任した。

白根も森も第一回将校無電訓練の卒業生である。

◇明治三十八年一月十二日（一九〇五年）

外波内藏吉が中佐から大佐に昇進した。

◇明治三十八年一月十三日（一九〇五年）

潜水艇隊が新設された。アメリカからの輸入艇は前年十一月に到着し、組み立て工事がなされていたが、竣工は七月から十月にかけてであり、実働はもつと後のことであった。

重要艦を失った対策として山本権兵衛が機敏に動いたものの、日露戦役には間に合わなかった。

◇明治三十八年一月十五日（一九〇五年）

諜報活動をしていた外波内藏吉から、ロシア艦隊がスエズ運河を通過したという報告が届いた。

その報告の中には無電用アンテナの形状もあった。

図10・2にその一例を示す。

Cruisers and Converted Cruisers

Torpedo-boat Destroyers

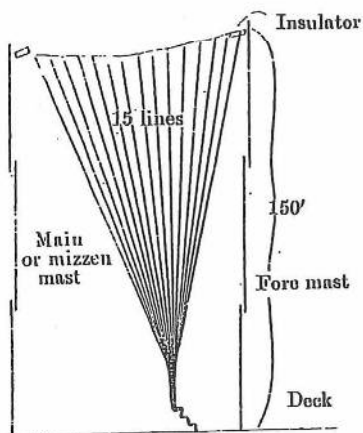
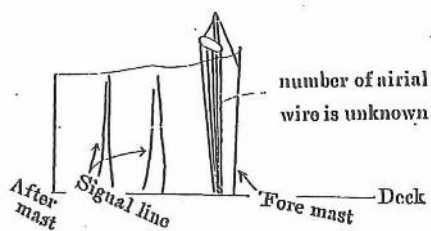


図10・2 外波内藏吉のトサイト情報(明治38年1月10日見聞)

◇明治三十八年一月十九日（一九〇五年）

無電望楼の蓄電池充電のための「石油發動機直結発電機」一〇台が米国から入荷した。これは望楼の無電に卓効が有ったらしい。

また米国に蓄電池を大量に発注した。これは前記してある。

◇明治三十八年一月二十日（一九〇五年）

この日、海軍大臣から次の訓令が出された。

仮装巡洋艦「臺中丸」を旗艦「三笠」が東京の軍令部に連絡する基地艦にするための艦装

この艦装の後、「臺中丸」は鎮海湾奥の有線電信所の近くに停泊して、「三笠」と軍令部が海底ケーブルで連絡するための起点の役割を果たした。

図10・3に艦影を示すが、三井大阪商船所属の三トン強の商船を補強して有線電信局や無電施設や小型の大砲を臨時に積載した仮装巡洋艦である。

停泊海域は後の地図で示す。

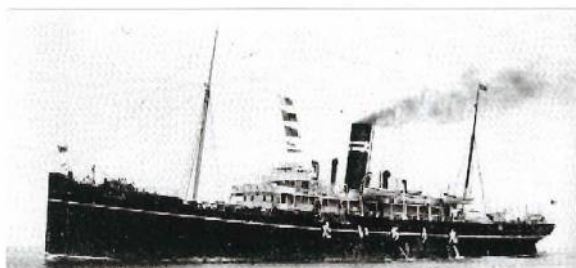


図10・3 通信連絡用仮装巡洋艦「臺中丸」

◇明治三十八年一月二十六日（一九〇五年）

前にも一部記したが、第二艦隊幕僚の山本英輔が、無電の到達距離について詳細な実験的研究をなし、「遠距離ニ於ル無線電信感應ノ状況」なる大部な報告書を提出し配布した。内容はきわめて優れていて、もし英輔が大学教授だったら、博士学位が得られたであろう。

(報告書にある図の一部を図10・4に示す)

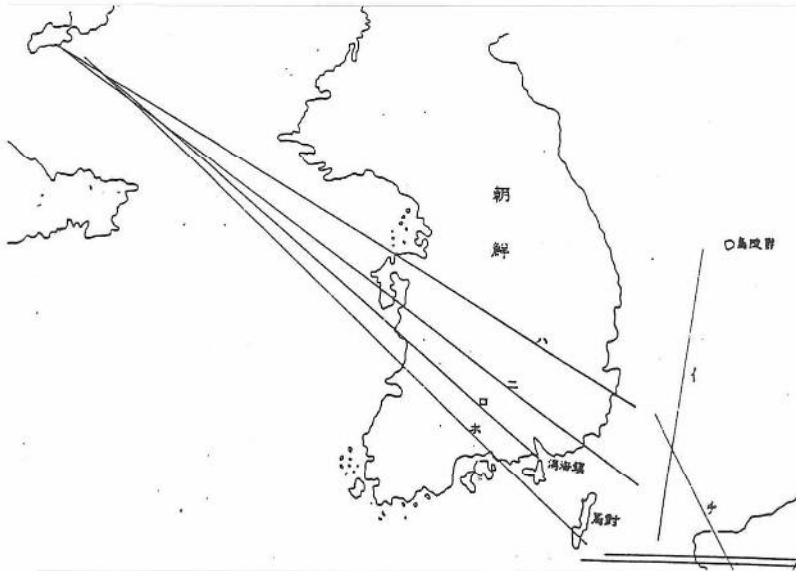


図10・4 山本英輔の電波伝搬実験(明治38年1月26日報告)

夜間に遠方まで届く現象を定量的に見出したのだが、戦後になって海軍ではこれを「山本現象」と命名して多くの実験をおこなった。

山本英輔も木村駿吉らも電離層反射の知識は持っていなかったが、これは電離層反射による電波の遠距離到達の、日本における最初の実験データであった。

同じこの日、海軍大臣は、「日本の無電の有効到達距離を厳秘にせよ」と訓令した。

火炮と同様に無電の性能を軍の機密とする発想がまだ行き渡っていなかったのであろう。とくに木村駿吉らは研究者として海外に宣伝したかったようので、軍としてはそれを強く諫めていたらしい。

◇明治三十八年一月(一九〇五年)

バルチック艦隊に備えるための無電望楼の建設が聯合艦隊から強く要望され、そのための望楼用無電機一二組の緊急製造が指令された。

聯合艦隊所属の駆逐艦は多数有ったが、この頃から日本海海戦の直前にかけて、ほとんどの駆逐艦に無電機が積載された。

また戦艦や巡洋艦や通報艦のような重要艦には、送

受二台ずつの無電機複装がなされて、フォールトトレラントが強化された。

フォールトトレラントという用語は最近になって強調されることが多いが、木村駿吉は明治時代から用いていた。

この頃になると、無電の効用はかなり知られるようになり、戦中はずっと出されていた「日露戦争実記」にも無電の解説が掲載されるようになった。
掲載号を図10・5に示した。



図10・5 日露戦争実記
(仙湖山人『無線電信概説』掲載)

◎バルチック艦隊迎撃のための 無電関係者の奮闘 二月

◇明治三十八年二月二日（一九〇五年）

列強各国が大陸沿岸に大規模無電局を建設しようとしていると知った木村駿吉は、「放置すれば日本が多大な悪影響を被る」と軍令部に上申した。

軍令部では駿吉を招いて協議し、清国・韓国と折衝して、とりあえず韓国に日本無電局を設置する権利を得た。後には清国にも同様の権利を得た。

何年も前に秋山眞之が将来を予想して提言した大陸や半島への日本無電局設置が、こうしてようやく実現した。

大陸（清国）への設置については、戦後に木村駿吉が活躍している。

◇明治三十八年二月三日（一九〇五年）

朝鮮海峡において二等巡洋艦「千歳」と三等巡洋艦「秋津洲」が交わした無電が、四八五海里も離れた大連に停泊中の二等巡洋艦「嚴島」で傍受された。

これは例の山本現象の一種だが、珍しい遠距離通信として第二艦隊司令長官が麾下に告示した。

同じこの日、一等戦艦「敷島」の発電機に異常音が出て修理した。「敷島」の発電機は前年から再三にわたって異常が生じていた。

図10・6 参照。

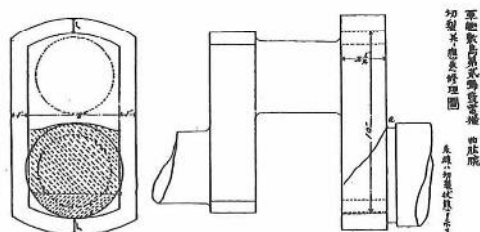


図10・6 「敷島」発電機故障図

(明治37年9月18日、11月27日、
38年2月3日、3月15日、7月30日に故障)

◇明治三十八年二月六日（一九〇五年）

木村浩吉が艦長を務めた水雷母艦「日光丸」の無電機がやっと実用化した。装備が決定してから相当な時間がかかったことになる。

◇明治三十八年二月十日（一九〇五年）

二等巡洋艦「橋立」、国産三等巡洋艦「音羽」などが横須賀で無電機整備を終えた。この時期、多くの軍艦で無電機が増設され整備された。

この日、木村駿吉が「無線電信ニ關スル諸研究及意見」「軍用同調無線電信機ノ進歩」を海軍教育本部より刊行し関係方面に配布した。

◇明治三十八年二月十五日（一九〇五年）

前述したが、十日に呉軍港での修理や増設を終えた旗艦「三笠」は、この日江田島を経て聯合艦隊本拠地の佐世保軍港（佐世保鎮守府）に移動した。

「三笠」は大きな損傷を受けていたので、その工事は修理が中心だったが、無電設備については複装・二重化など大幅な増強がなされた。

アンテナもメインマストから艦尾だけでなく、前後

のマスト間にも張られた。そのための新たな斜桁が前部マストの頂上に設けられた。

発電機の整備もなされた。

外観の最大の変化は、前後両マストの下部に設置されていた小型砲台が撤去されたことだった。

黄海海戦は多くの教訓を聯合艦隊に与えたが、マストに取り付けられた砲台が不要との体験もその一つであった。

このマスト下部の砲台の有無およびアンテナ形状によって、「三笠」の艦影が明治三十七年までのものかそれ以後のものが判明する。

◇明治三十八年二月十七日（一九〇五年）

三等巡洋艦「千代田」艦長の依仁親王殿下は、来航したイタリア軍艦「マルコポーロ」のアンテナを観察した結果を第三艦隊司令長官に報告した。

山本英輔が考えたのと同様、一種の逆L型だったらしい。

（図10・7参照）



図10・7「千代田」水雷長の逆L型アンテナ報告

◇明治三十八年二月十八日（一九〇五年）

海防艦「金剛」の無電機に使用する発電機が不調で交換が決定した。

このような発電機の不調は多くの艦で起こっており、困ったらしい。そのために蓄電池は大量に必要であった。

◇明治三十八年二月二十日（一九〇五年）

旗艦「三笠」が佐世保を出港し、朝鮮半島南端の「鎮海湾仮根拠地」に向かい、翌日午前に到着した。

ここはバルチック艦隊を迎え撃つまでの聯合艦隊主力の基地であった。

(この日の記録は図10・8にある)

二月廿五日 月曜 晴 北西風 一三
 日課 支那業 自作 藩 至 鎮海灣
 二時 八分 合 欽 准 海 九 分 同 並 備
 二時 五十分 英 隊 船 引 込 込 号 前 捕 頭 我 軍 艦 隊
 二時 五十分 揚 揚 右 輪 交 航 交 通
 二時 五十分 自 五 測 是 作 約 二 時 同 終 了
 三時 五十分 日 光 拿 捕 英 船 復 平 長 艦 又 航 入
 四時 五十分 火 災 標 練
 五時 四十分 溺 者 救 助 標 練
 七時 八直 哨 兵 ヲ 配 備 入

図10・8「三笠」鎮海灣へ
 (三笠戦時日誌明治38年2月)

◇明治三十八年二月二十五日(一九〇五年)
 外波内藏吉がポートサイドから、ロシア艦隊の仮装巡洋艦がT型にアンテナを張っていると報告してきた。これも一種の逆L型で、山本英輔の発案に近いものである。山本英輔の先見性が光る。

(図10・9)

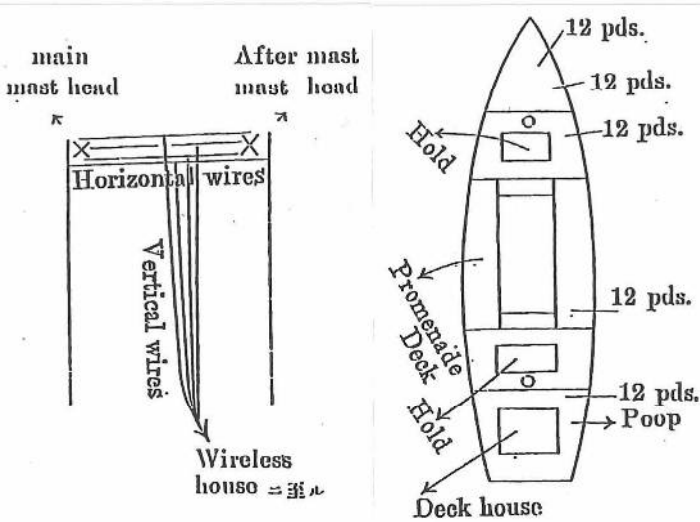


図10・9 外波内藏吉の「T」型情報(明治38年1月27日見聞)

日本海軍 万全の迎撃態勢

◎ 聯合艦隊の再編成

東郷平八郎率いる聯合艦隊は、それぞれの役目を担って臨戦態勢につくとともに、主力は鎮海湾の仮根拠地に集結してバルチック艦隊の来航を待ちつつ、二月以後、猛訓練を開始した。

その陣容は第九章に記した編成からかなり変化している。その艦船表を以下に記す。

(詳しくは付録18 19 20参照)。

聯合艦隊 (司令長官は「三笠」の東郷平八郎大将)

◎ 第一艦隊 (司令官は「日進」の三須宗太郎中将)

△ 第一戦隊

「三笠」 (一等戦艦)

「敷島」 (一等戦艦)

「富士」 (二等戦艦)

「朝日」 (一等戦艦)

「春日」 (一等巡洋艦)

「日進」 (一等巡洋艦)

△ 通報艦

「龍田」

△ 第三戦隊 (司令官は「笠置」の出羽重遠中将)

「笠置」 (二等巡洋艦)

「千歳」 (二等巡洋艦)

「音羽」 (三等巡洋艦)

「新高」 (三等巡洋艦)

△ 第一駆逐隊 (司令は「春雨」の藤本秀四郎大佐)

駆逐艦五隻

△ 第二駆逐隊 (司令は「隴」の矢島純吉大佐)

駆逐艦四隻

△ 第三駆逐隊 (司令は「東雲」の古島重太郎中佐)

駆逐艦四隻

△ 第一四艇隊 (司令は「千鳥」の關重孝中佐)

水雷艇四隻

◎第二艦隊（司令長官は「出雲」の上村彦之丞中将）

△第二戰隊（司令官は「磐手」の島村速雄少将）

「出雲」一等巡洋艦

「吾妻」一等巡洋艦

「常磐」一等巡洋艦

「八雲」一等巡洋艦

「浅間」一等巡洋艦

「磐手」一等巡洋艦

△通報艦

「千早」

△第四戰隊（司令官は「浪速」の瓜生外吉中将）

「浪速」二等巡洋艦

「高千穂」二等巡洋艦

「明石」三等巡洋艦

「對馬」三等巡洋艦

△第四驅逐隊（司令は「朝霧」の鈴木貫太郎中佐）

驅逐艦四隻

△第五驅逐隊（司令は「不知火」の廣瀬順太郎

中佐）

驅逐艦四隻

△第九艇隊（司令は「蒼鷹」の河瀬早治中佐）

水雷艇四隻

△第一九艇隊（司令は「鷗」の松岡修藏中佐）

水雷艇三隻

◎第三艦隊（司令長官は「嚴島」の片岡七郎中将）

△第五戰隊（司令官は「橋立」の武富邦鼎少将）

「嚴島」二等巡洋艦

「鎮遠」二等戰艦

「松島」二等巡洋艦

「橋立」二等巡洋艦

「八重山」通報艦

△第六戰隊（司令官は「須磨」の東郷正路少将）

「須磨」三等巡洋艦

「千代田」三等巡洋艦

「秋津洲」三等巡洋艦

「和泉」三等巡洋艦

△第七戰隊（司令官は「扶桑」の山田彦八少将）

「扶桑」二等戰艦

「高雄」三等海防艦

「筑紫」一等砲艦

「鳥海」二等砲艦

「摩耶」二等砲艦

「宇治」二等砲艦

△第一五艇隊（司令は「雲雀」の近藤常松中佐）

水雷艇四隻

△第一〇艇隊（司令は「第四三号」の大瀧道助

少佐）

水雷艇四隻

△第一一艇隊（司令は「第七三号」

の富士本梅次郎少佐）

水雷艇四隻

△第二〇艇隊（司令は「第六五号」の久保来復

少佐）

水雷艇四隻

△第一艇隊（司令は「第六九号」の福田昌輝少佐）

水雷艇四隻

◎附属特務艦隊

（司令官は「臺中丸」の小倉鋺一郎少将）

「亜米利加丸」仮装巡洋艦

「佐渡丸」仮装巡洋艦

「信濃丸」仮装巡洋艦

「満洲丸」仮装巡洋艦

「八幡丸」仮装巡洋艦

「臺南丸」仮装巡洋艦

「熊野丸」水雷母艦

「日光丸」水雷母艦／仮装巡洋艦

「臺中丸」仮装巡洋艦（特務艦隊旗艦）

「春日丸」水雷母艦／仮装巡洋艦

「大仁丸」仮装砲艦／通信艦

「平壤丸」仮装砲艦

「京城丸」仮装砲艦

「愛媛丸」仮装砲艦

「蛟龍丸」仮装砲艦

「高阪丸」仮装砲艦

「武庫川丸」仮装砲艦

「第五宇和島丸」仮装砲艦

「海城丸」仮装砲艦

「扶桑丸」仮装砲艦

「關東丸」工作船

「三池丸」工作船

「神戸丸」病院船
「西京丸」病院船

◎備考

△津軽海峡方面

「香港丸」仮装巡洋艦

「日本丸」仮装巡洋艦

△澎湖島方面

「備後丸」仮装巡洋艦

△韓国南西岸方面

「第六宇和島丸」仮装砲艦

△元山方面（ウラジオに近い現北朝鮮東岸）

「磐城」測量艦

「神祐丸」仮装砲艦

「佐波川丸」仮装砲艦

◎竹敷要港部・呉鎮守府所属

△第一七艇隊（司令は「第三四号」の青山芳得

少佐）

水雷艇四隻

△第一六艇隊（司令は「白鷹」の若林欽少佐）

水雷艇二隻

△第一八艇隊（司令は「第三六号」の河田勝治

少佐）

水雷艇四隻

△第五艇隊（司令は「福龍」の小川水路少佐）

水雷艇四隻

◎太平洋第二艦隊（バルチック艦隊）の動向

無電の話から少し離れるが、ここに簡単にバルチック艦隊の動きを記しておく。

○明治三十七年四月三十日

ロシア政府は太平洋第二艦隊を編成した。

○明治三十七年五月二十日

ロシア政府は第二艦隊を東洋に派遣すると公表、世

界中で話題となった。

○明治三十七年十月十五日

戦艦以下二八隻（途中合同三隻）がロシア西部のり

バウ軍港を出港した。これが第二艦隊で、バルト海にあった軍艦を主体にしたのでバルチック艦隊とも呼ばれた。

○明治三十七年十月二十一日

北海を航行中のバルチック艦隊がイギリス漁船群を射撃したのでイギリスが猛憤慨して抗議し、以後ロシア側を監視妨害した。

○明治三十七年十一月三日

アフリカ北部モロッコ・タンジールで本隊と支隊に分かれ、本隊はアフリカ大陸を迂回し、支隊は地中海からスエズ運河を通った。そして支隊は十二月二十八日にマダガスカルに着き、本隊は明治三十八年一月九日にマダガスカルに着き、合流した。

○明治三十八年二月十五日

旅順陥落の報を聞いたロシアは、第二艦隊だけでは不足とみて旧式戦艦など一隻からなる第三艦隊を編成し、この日出港してスエズ運河経由でインド洋を東航した。

○明治三十八年三月十六日

マダガスカルの第二艦隊は、第三艦隊を待つよう指示されたが、ロジエストウエンスキー司令長官は一刻

も早く日本に着くのが得策と考えて具申し、この日に第二艦隊だけで出発した。戦力は後発部隊を合わせて四三隻（うち運送船等が一九隻）であった。

○明治三十八年四月四日～八日

第二艦隊は洋上でドイツ船から石炭を補充しつつこの期間にマラッカ海峡を通過した。

○明治三十八年四月十三日

現ベトナム（当時フランス領）のカムラン湾のあたりに到着し、このあたりで第三艦隊の到着を待った。

○明治三十八年五月十四日

第三艦隊は五月九日に合流し、ロ司令長官は朝鮮海峡を突破して一路ウラジオを直指す作戦を定め、この日ベトナムを出発した。

台湾南端に近いバシー海峡で補給後に五隻の運送船を分離し、また台湾沖と宮古島のあたりで仮装巡洋艦二隻を分離して、日本を惑わすために日本列島太平洋側への航海を命じた。

また日本側の注意を上海に向けようとした。

○明治三十八年五月二十二日

バルチック艦隊主体はこの日に宮古島の東側を通って沖縄列島線を横切り、翌日東シナ海で最後の石炭の

洋上補給をなし、二十五日に不要となった運送船九隻を分離して上海に向かわせ、残りの主体三八隻が一路對馬方面へと向かった。

○明治三十八年五月二十七日早曉

この日、五島列島の北西四〇海里ほどの二〇三地点で東水道（對馬の東側）を指していたバルチック艦隊が、仮装巡洋艦「信濃丸」に発見された。

このあたりの事は、無電の活躍とともにのちに詳しく記す。

◎修理・整備後の聯合艦隊の動向

明治三十七年二月の聯合艦隊の佐世保出撃は、開戦のためなのでほぼ一斉であった。

しかしバルチック艦隊迎撃のための準備期間は、旅順は明治三十八年一月までは開城していなかったし、ウラジオには残存ロシア艦がいたし、いっどこから敵艦が日本周辺に来るかわからない状態であり、一斉行動は無理であった。

また多くの島嶼や半島に設けられた望楼の類や海底ケーブルや仮根拠地の警護も必須であった。

そのため、全艦船が一斉に日本に戻って整備し一斉に出撃するという情勢ではなく、艦隊・戦隊によって行動が異なっていた。

ここに（一部重複するが）バルチック艦隊を迎撃するための聯合艦隊の動きを記しておく。

○明治三十七年十一月初旬

バルチック艦隊の来襲に備えて、黄海海戦や蔚山沖海戦で痛んだ艦船の一刻も早い修復が必要とされた。しかしまだ旅順やウラジオへの対策も必要で全艦船を一度に修理するのは不可能だったため、伊東軍令部長と東郷司令長官は、数隻ずつ交互に帰国させることとし、各鎮守府に迅速な修理を要望した。

○明治三十七年十一月二十九日

バルチック艦隊はじめロシア側の様子を探ることが喫緊の重大事だったため、伊東軍令部長は、東郷司令長官に対して、仮装巡洋艦の「香港丸」と「日本丸」を至急整備して偵察に出発させよと要望した。

この要望を受けて、この二隻は同年十二月二日に日

本を發つて、翌年一月十八日に佐世保に戻るまで、マレー・ジャワ方面のロシア勢力を探索した。

○明治三十七年十二月十日

この日、各鎮守府司令長官および各要港部司令官が大本營に集められ、艦船の全力での迅速修理が要望された。

軍令部でも聯合艦隊でも、バルチック艦隊の行動の予測が出来ず、いつ日本を襲うか不明だったので、修理は真剣勝負だったのである。

この頃の日本側の推理は、次の三種であった。

① 一直線にウラジオに向かう。

② 東海・黄海沿岸に達して、その方面の戦力を回復する。

③ 台湾または南清沿岸またはさらに南方で一地方を占領し、時期を見て①か②を実行する。

時期としては、早ければ三十八年一月には台湾に近づくと考えられた。

○明治三十七年十二月十五日

ロシア側の動向を探るため、第三戦隊の三等巡洋艦「新高」を南清・台湾南方・フィリピン方面に派遣した。翌年一月十一日に佐世保に帰着した。

○明治三十七年十二月二十四日

軍令部長の意向を受けた東郷司令長官はこの日、第三艦隊片岡司令長官に旅順方面の作戦を次のように命じた。

軍艦七隻・仮装巡洋艦三隻・駆逐艦五隻・仮装砲艦九隻・水雷艇隊を指揮下に置いて、旅順方面を警備せよ。それ以外の艦艇は整備のため内地に回航させよ。

○明治三十七年十二月二十五日

幕僚を引き連れた東郷平八郎の「三笠」は、この日裏長山列島の仮基地を出て、二十八日に呉軍港に着き、そこで上村第二艦隊司令長官と会し、前述のように三十日に入京した。

そして山本海軍大臣や伊東軍令部長と協議し、日本側の全勢力を朝鮮海峡付近に置き、敵第二艦隊の動向を監視して機に応じて行動することに決定した。

また、幕僚の意見を入れて集合地点や警戒線を定めた（これらの地図的資料は後述する）。

○明治三十八年一月一日

ウラジオ艦隊の残留艦艇が津軽海峡や宗谷海峡に出没する怖れがあったため、東郷平八郎は第二艦隊司令官三須宗太郎に命じて、数隻を率いて北方を警備させ

た。

三須はこの日、呉軍港を出発した。なお三須は一月二十二日に島村速雄少将と交代した。

○明治三十八年一月十二日

東郷平八郎は、上命に基づき、聯合艦隊の編成替えを麾下に示した。上命ではあるが、下案は幕僚が作り軍令部も了承していたと考えられる。

○明治三十八年一月十八日

特急でなされていた諸艦の整備もかなり進み、かつバルチック艦隊の来襲も迫ってきたと予想されたので、この頃からいろいろな警備命令が出されるようになる。この日は次の命令が出された。

「横須賀軍港にいた第一艦隊司令官出羽中将は、對馬竹敷に到つて、第二艦隊司令官瓜生中将に換わつて朝鮮海峡にある諸艦船を指揮し、ウラジオ艦隊警備・ウラジオへの密輸船拿捕・兵士の教育訓練をせよ」

(明治三十八年の一月から三月までの間に朝鮮海峡付近で拿捕した船舶は八隻だった)

○明治三十八年一月二十一日

東郷平八郎はこの日、麾下一般に次の訓令を發した。「特命なき艦船は修理終了次第直ちに朝鮮海峡方面に

集合せよ」

○明治三十八年二月一日

大本營の命令により東郷平八郎は、上村第二艦隊司令長官に対して、艦隊の一部で陸兵を朝鮮海峡から元山方面に護送せよと命じた。元山は朝鮮半島東沿岸の大陸に近い個所である。

○明治三十八年二月六日

東京における拝謁や様々な会議を終えた東郷は、この日東京を發ち呉軍港に戻つて、修理を終えた「三笠」に座乗した。

「三笠」は十四日に呉を出港し江田島・佐世保を経て二十一日に聯合艦隊仮根拠地の鎮海湾に到着し、以後は鎮海湾で東京軍令部と連絡を取りながら麾下の猛訓練を監督し、バルチック艦隊を待った。

○明治三十八年二月八日

片岡第三艦隊司令長官はこの日「嚴島」で青泥窪(旅順)を發し、十二日に呉軍港に着き、命を受けて十五日陸路で上京した。

○明治三十八年二月十六日

伊東軍令部長から東郷司令長官に対して、「シナ海南部からインドネシア方面に偵察の一支隊を派遣せよ」

との訓令が出された。

これを受けた東郷は、出羽重遠第三艦隊司令官に、二等巡洋艦「笠置」「千歳」、仮装巡洋艦「亜米利加丸」「八幡丸」、運送船「彦山丸」を率いて出発せよと命じた。この間の朝鮮海峡哨戒任務の指揮は三須中将が代行した。

この出羽率いる支隊は、二月二十七日に鎮海湾を出て任務を果たし四月二日に帰着した。

○明治三十八年二月十七日

朝鮮海峡に集合した陸軍を城津（今の金策）に上陸させるための護送を、上村第二艦隊司令長官に命じた。

上村麾下の艦隊は二十八日に出発して三月六日に帰着した。

○明治三十八年三月七日

侍従武官長が聖旨を奉じて「日光丸」で釜山を経て鎮海湾に着き、同時に東宮武官長も令旨を奉じて同行した。

この御心によって兵卒たちの士気は益々振るった。帰途は一等巡洋艦「春日」を下関まで同航させて護衛した。

○明治三十八年三月上旬

東郷平八郎は次のような訓令を發した。

瓜生第四戦隊司令官に、三須中将に換わって朝鮮海峡哨戒任務につくよう命じた。

片岡第三艦隊司令長官および他の修理中の各艦長に、早急に修理を完了して指定地に回航するよう命じた。測量艦「磐城」に、元山方面の永興湾の補測を命じた。

○明治三十八年三月十六日

第二艦隊の第一九艇隊に、警備のため鬱陵島を経て松田湾に回航するよう命じた。四月十二日に對馬の尾崎湾に帰着した。

○明治三十八年四月五日

尾崎湾に回航していた片岡第三艦隊司令長官に、瓜生第二艦隊司令官に代わって海峡警備任務につくよう命じた。

島村第二艦隊司令官に、仮装巡洋艦一隻を択捉水道に留め、他の艦船を集めてウラジオ艦隊の南下を警戒せよ——と命じた。

○明治三十八年四月八日

バルチック艦隊がマラッカ海峡を通過したとの情報が入った。

○明治三十八年四月九日

バルチック艦隊がこの前日にシンガポール沖を通過したとの情報が入った。そこで東郷平八郎は、上村第二艦隊司令長官に、ウラジオの前面海域に機械水雷を沈置し、十二日までに鎮海湾に帰るよう命じた。

いよいよ風雲迫ることが感じられた。

東郷は北海方面を警備していた島村第二艦隊司令官に、麾下を率いて鎮海湾に帰港せよと命じた。また各方面の勢力を朝鮮海峡周辺に集中させた。

○明治三十八年四月十三日

上村第二艦隊司令長官は先の命令によって朝鮮海峡を出てウラジオ港外に到り、計七一五個の機械水雷を沈置し、十八日に帰着した。予定より遅れたらしい。

○明治三十八年四月十九日

バルチック艦隊（第二太平洋艦隊）の行動を研究すると、この日の朝には朝鮮海峡に近づくのではないかと予測されたが、実際にはずっとゆっくりしており、この頃はまだ現ベトナムのカムラン湾にいるらしいと分かった。

○明治三十八年五月五日

ウラジオの残留艦隊の中の二艦と水雷艇四隻がこの

日から数日間、北海に出現した。

水雷艇は奥尻から敦賀へと向かったが、その途中日本帆船「第三八幡丸」を包囲して船長を抑留し船体を焼いて北へ向かった。

東郷平八郎はこの行動を、バルチック艦隊がいよいよ北上してくる前兆だと考えた。

○明治三十八年五月九日

帆船「榮徳丸」が津軽深浦から二〇海里ほど沖でウラジオ艦隊二隻と遭遇したとの報告が入った。

日本側は、これは幻惑作戦だろうと考えて動かなかったが、それは正解だった。

○明治三十八年五月十四日

バルチック艦隊では第二艦隊と第三艦隊が合流し、この日の朝にカムラン湾の北方のヴァン・フォン湾を出発し北へ向かったとの情報が日本側に入った。

○明治三十八年五月二十日

彼等が台湾南端部とルソン島との間のバシー海峡を通過したのは五月二十日だったが、これを確認して日本に知らせたのは森恪だと言われている。

森は大阪市議会議長を務めた森作太郎の息子だが、いささか乱暴者で、学校はうまくゆかず、父親の友人

で後に満鉄総裁となる山本条太郎が三井物産上海支店長をしていたので、その伝手で同支店で働いていた。

十四日に北へ向かったバルチック艦隊のその後が不明だという話を聞いた山本は森に、命がけで探索してみないかと勧め、森は承知して二人の部下を連れて小さな船で考えられる各海域を捜した。

そして五月十九日、ついにバシー海峡に向かうバルチック艦隊を望見し、尾行し、二十日に海峡通過を確認した。

森格はその様子から、バシー海峡を経て東シナ海に向かうだろうと推測し、山本支店長に知らせ、山本は上海から日本にその旨を打電した。

この打電を最初に知ったのは第四戦隊を指揮していた瓜生外吉中将だったと言われている。

この森格の決死の探索によって、日本の聯合艦隊は万全の索敵態勢を敷くことが出来た。

以上はノンフィクションノベルに書かれている森の活躍なので脚色も有るだろうが、森がバシー海峡でバルチック艦隊を遠望して通報したのは事実らしい。

(森格は後に政治家となり、政務次官として事実上外務大臣の仕事をしたと言われている)

○明治三十八年五月二十四日

この頃と考えられるが、沖縄でよく用いられていた山原船「宮城丸」の奥濱船長が、那覇から宮古島に行く途中でバルチック艦隊らしき艦影を発見した。必死に逃げて宮古島に着くと、島庁へ急報した。

島司の小野朔次郎は、島には電信局が無いので、九〇海里離れた石垣島まで命がけで行って知らせる勇士を募った。

漁師の垣花善と清の兄弟が名乗りをあげた。

さらに與那覇蒲と松の兄弟も進み出た。

與那覇蒲戸もこれに続いた。

小野は剣船二艘を用意し、一艘に垣花兄弟と與那覇蒲戸が、もう一艘に與那覇兄弟を乗せた。

五名の決死隊は必死に漕いだが、海は激浪で、二艘は離ればなれになり、垣花兄弟ら三人の乗る舟が一五時間後の二十六日の早朝にようやく石垣島に着き、八重山電信局に急を告げると、緊張がとれて気絶してしまった。

もう一艘の二人も、少し後で着いたが、やはり気を失ってしまった。

八重山電信局からの通報は二十七日に軍令部に届い

たが、それは「信濃丸」からの緊急信号の一時間後であつた。

この五名の決死の行動はしばらくは忘れられていたが、やがて人々の知るところとなり、海軍もそれを確認して後に表彰した。

以上の話も森恪の件と同じく小説化され脚色されているようだが、刳船での通報自体は事実であり、だからこそ海軍でも表彰したのであろう。

○明治三十八年五月二十五日

この日の午後、ロシア義勇艦隊五隻と運送船三隻が呉淞（上海）に入港との報が入り、日本側はいよいよ警戒を嚴重にした。

○明治三十八年五月二十七日早暁

この日、索敵にあつていた仮装巡洋艦「信濃丸」が五島列島の北西四〇海里ほどの二〇三地点で東水道（對馬と壱岐の間）を目指して北上するらしいバルチック艦隊を発見した。

このあたりの事は、無電の活躍とともにのちに詳しく記す。

日本海海戦直前の
無電機の状況

◎バルチック艦隊迎撃のための
無電関係者の奮闘 三月

月別の日録に戻る。

◇明治三十八年三月六日（一九〇五年）

軍令部が艦船用無電機二五組の製造を提議し、海軍大臣がこれを了承した。仮装巡洋艦などが予定より増加しつつあったためや、予備を考えてであろう。

さらにこの翌日、望楼用無電機一二組の製造が決ま

った。

木村駿吉は懸命に製造を続けていた。

またこの数日、望楼無電機蓄電池充電用の石油発動機直結発電機一五台を購入。さらに無電機用蓄電池を大量発注した。

◇明治三十八年三月十四日（一九〇五年）

東郷司令長官が、「三笠」と「臺中丸」の間の通信連絡に小型蒸気艇の使用を可と定めた。その前は艦載水雷艇を使っていたようである。

仮装巡洋艦「臺中丸」は艦上に電信局が設けられ、これが多くの中継局を経て東京にまで有線で連絡しており、鎮海湾の「三笠」と軍令部との電信連絡の鎮海湾側の端末であった。

この件について少し詳しく記しておく。

▽鎮海湾と東京との電信連絡について

東京と朝鮮半島南端部との電信連絡は、次のような経路によってなされていた。

東京から下関までの電信路は明治初年に日本人の手によって二条作られたが、日露戦争を迎えて増設され、途中でほとんど中継せずに直通する線が張られた。

(電信だけではなく電話も試みられたがこれは技術が未開発で実用は困難だったらしい)

下関から佐世保へのルートも有ったが、朝鮮半島南端部へは、山口県西端の特牛海岸の陸揚室を経由して海に入り、く角島く沖ノ島く對馬く(鴻島く) 巨濟島加徳水道側(宮農里陸揚)く巨濟島北側(鎮海湾の中の松眞湾近くの松眞浦里局から廣池末陸揚)く鎮海湾北岸(巨濟島寄りの海岸に陸揚)く陸線で馬山く釜山く半島北上というルートが確保されていた。

なお聯合艦隊根拠地の佐世保から對馬への直通ルートも有った。

(輻輳を避けるために陸軍と海軍では別ケーブルを準備していた)

戦争前から使われていた商用線は長崎を起点として呼子で海に入って各地に伸びていたが、これはロシアの息のかかった大北電信が抑えていたので戦中は無用であり、すべて日本側が新設した新ルートを用いていた。

これに使用した海底ケーブルは、兒玉源太郎が戦前から秘匿しておいて「兒玉ケーブル」と呼ばれたものが用いられ、さらに開戦と同時にイギリスに発注したり大北回線を回収して用いたりしていた。

バルチック艦隊を迎撃するために聯合艦隊が待機していたのは鎮海湾なので、日本海海戦の前の「三笠」が東京軍令部と連絡するには、巨濟島北端部にある松眞浦里局を利用して、いた。

はじめは「三笠」から小型の水雷艇などで連絡していたが、それだと時間がかかるので、近くに仮装巡洋艦で特務艦隊の旗艦である「臺中丸」を停泊させ、その艦上に無線電信局を設け、そこから海底ケーブルで(たぶん)廣池末に陸揚して松眞浦里局につないでいた。

これだと「三笠」と「臺中丸」が連絡すれば良いので、「三笠」が至近距離にいる時は信号でも連絡可能だし、小型艇で連絡しても、陸の局まで行くよりはずつと迅速に連絡出来る。

このような事から、通信連絡用の小型艇は、「三笠」から松眞浦里局まで連絡するのではなく、「臺中丸」と

聯合艦隊司令第一號

三笠 聯合艦隊司令第一號

東郷聯合艦隊司令長官

一、當地長官海軍少將、外島直轄各部隊、用シテ
一隻、不特限所、先任順序、但本規程、明
十日午前八時、地行ノ準備ヲ初メ
二、艦載水雷艇有る艦、指定、挑リ、甚覺、電氣
局、文通用トシテ、艦載、甚覺、但本通信艇、
午前八時、以テ、交代期トシ、新日正午、於テ、艦載
三、笠、指シテ、示ラ、例トス

(後)

聯合艦隊司令第一號

東郷聯合艦隊司令長官

一、當地長官海軍少將、外島直轄各部隊、用シテ
一隻、不特限所、先任順序、但本規程、明
十日午前八時、地行ノ準備ヲ初メ
二、艦載水雷艇有る艦、指定、挑リ、甚覺、電氣
局、文通用トシテ、艦載、甚覺、但本通信艇、
午前八時、以テ、交代期トシ、新日正午、於テ、艦載
三、笠、指シテ、示ラ、例トス

但本通信艇、三笠ト電氣、電氣局、通シテ、
同、往復、便用、シテ、從前、如シ、真、位、
後、ヒ、シ、テ、例、トス

(終)

図10・10 三笠と臺中丸との通信連絡命令(三笠戦時日記より)

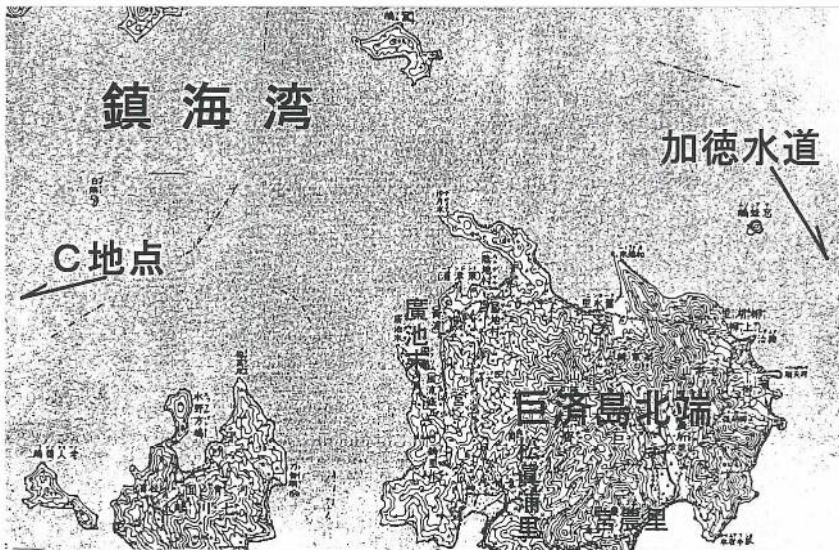


図10・11 鎮海灣仮根拠地における通信の中樞巨濟島北端
(対馬→宮農里陸揚→松眞浦里局→廣池末陸揚→対岸→陸線で馬山)

連絡するのみ——という訓令が出されたのである。

これらに関連する数通の文書を図10・10に、地図を
図10・11に示した。

鎮海湾の中のC地点と言われた海域は七つに区分さ
れて、聯合艦隊が砲撃の猛訓練をした場所であり、そ
の区分地図を参考までに図10・12に示した。C地点は、
図10・11の西方の海域である。

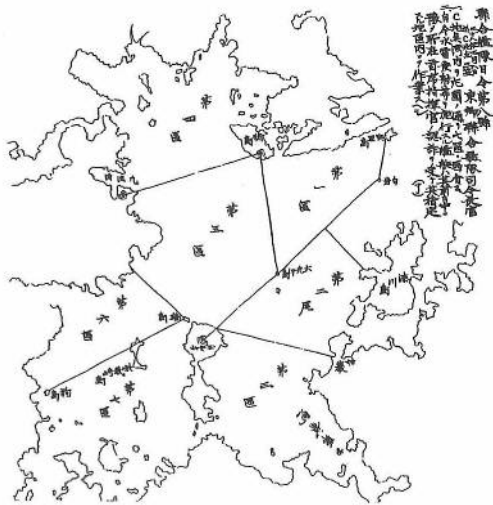


図10・12 鎮海湾奥のC地点の七区分
(ハルツク艦隊撃滅のため猛訓練の場所)

特務艦隊の旗艦となった「臺中丸」は、三井大阪商
船所属の商船で三〇〇〇トン強であり、大ききでは二
等または三等巡洋艦程度で、仮装巡洋艦の中では小型
だった。

数字は後に記すが、日本海海戦前後には大量の電信
を送受して通信の役目を果たした。また特務艦隊の元
締めでもあった。

◇明治三十八年三月十五日（一九〇五年）

日本郵船から徴用された「備後丸」の工事が三月六
日に開始されこの日に終了して、仮装巡洋艦となった。
無電機は後部甲板上に設けられた。

「信濃丸」の姉妹船で、六〇〇〇トン以上の大形客船
であり、索敵に活躍した。

（外波内蔵吉と木村駿吉が海外視察に行つて明治三十
五年末にイギリスから帰国する際に乗船したのがこの
「備後丸」だった）

◇明治三十八年三月二十三日（一九〇五年）

同じく日本郵船から徴用された「佐渡丸」の工事が
三月十日に開始されてこの日に終了し、仮装巡洋艦と

なった。無電機はやはり後部甲板上に設けられた。

「備後丸」とともに「信濃丸」の姉妹船で、やはり索敵に活躍したが、バルチック艦隊来襲の数日前に味方を敵と間違える無電を打つという失敗をしたことで知られる。

◇明治三十八年三月二十四日（一九〇五年）

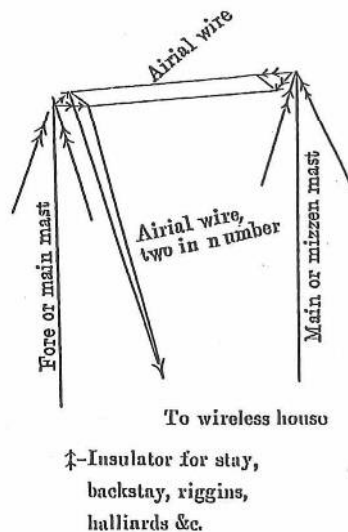
このころ、ポートサイドの外波内蔵吉からの左記のごとき情報が軍令部に届いた。

ロシア病院船は無電機を備えており病院以外の目的を持つ恐れがある、第三艦隊のアンテナは逆L型に近い形状（図10・13）である、運送船にも無電機が搭載されている・・・など。

◇明治三十八年三月三十一日（一九〇五年）

三月十九日に仮装工事を開始した「信濃丸」は、この日に終了して仮装巡洋艦となった。

この「信濃丸」は索敵に奮闘して、ついにバルチック艦隊を発見し、「タタタ・・・」という緊急信号の打電で有名なので、どのような船でどのように仮装されたかを、図解を含めて説明しておく。



▽仮装巡洋艦としての「信濃丸」

聯合艦隊の特務艦隊の中でも大形の三隻「備後丸」「佐渡丸」「信濃丸」は、ともに日本郵船所屬の豪華客船で、大きさ・性能ともに似通った姉妹船だった。

排水量は一等巡洋艦に近い六四〇〇トンほどで、速度は最大で一五ノット有った。

図10・13 外波内蔵吉ポートサイド情報
(明治38年3月23日見聞)

日露戦役中は民間企業を持つ大形船のほとんどは軍に徴用されたのだが、この三隻もそうで、どれも呉軍港で明治三十八年三月に臨時工事がなされて仮装巡洋艦となり、索敵に貢献した。

「信濃丸」は明治三十七年の間は陸軍に属して、運送業務に当たっていたが、陸軍の役目が一段落したので三月から海軍に移籍し、工事したのである。

この客船はイギリスで明治三十三年に建造され、外国航路で活動しており、日本海海戦に貢献した後は日本郵船に復帰したが、しばらくすると旧式になったので、遠洋漁業の加工船として使われた。

このころ、記念艦三笠と同様に史跡として保存展示すべきだという運動があったが、それは実現せず、大東亜戦争中は輸送に使われ、終戦時には引き揚げ船にもなり、生涯を終えた。昭和二十六年に解体された。

仮装巡洋艦にするための工事の記録が残されているので、簡単に記しておく。

○火器――

前部に一五センチ速射砲一門。

後部に一二斤砲一門。

前部両舷に一二斤速射砲各一門。

(据付小型大砲合計四門)

○艦載艇――

右舷に小蒸気船一隻。

左舷に伝馬船一隻。

後部両側にカッター各一隻。

○弾薬庫――

前部第一船倉を材木で区劃して弾薬庫に。

その外側に亜鉛板で庫を作り、一五センチ砲一門、一二斤砲二門、および小銃・拳銃の弾薬を格納。

後部の倉庫に一二斤砲一門の弾薬を格納し、揚弾架

を取り付け。

○照明と測距離――

パイロットブリッジ上に探海電燈を取付。

左舷前端に距離測定儀を取付。

○無電機――

後部甲板上の病室を改造して無電室とし電話その他を装備。

アンテナはマスト頂上の斜桁から艦尾に向けて四条線を張って作られた。

○信号旗――

前部マストに信号用ヤードを新設し、パイロットブリッジ上後端に信号旗箱を設置。

○淡水――

バラストタンクに淡水を積み外舷に給水口を設置。

○乗組員室――

将校下士室には一、二等室をあて、兵員室には三等船室をあてた。

○傳話管――

汽機室とブリッジ間に設置。

○速力信号――

艦尾に速力信号燈架を設置。

○事務室など――

ブリッジデッキ上の喫煙室を二分して主計官事務室と衛兵伍長室に改造。

○糧食――

前部両舷に木材で区劃をつくって糧食を貯蔵。

○遮光――

舷窓や士官室窓などは全て遮光遮蔽装置を設置。

○兵員食卓――

新設。

○搭載弾薬数――

一五センチ砲弾薬 二〇〇発。

一二斤砲弾薬 一門二〇〇、計六〇〇発。

小銃弾薬 一四〇〇〇発。

拳銃弾薬 二八八〇〇発。

以上のような臨時工事によって「信濃丸」は仮装巡洋艦となった。

兵装艤装図の後ろ半分を図10・14に示した。

病室を改造した無電室の位置を矢印で示している。

またアンテナの上部も示した。

最後部の甲板上に一二斤砲が描かれている。

図10・15に代表的な船影／艦影を示した。

(a) は戦前、北米航路時代の「信濃丸」、(b) は旗艦「三笠」がイギリスで完成に近づいた時、回航のための乗員をイギリスまで運んで「三笠」に移乗させている「信濃丸」。

(c) は戦勝後に呉軍港で満艦飾の仮装巡洋艦「信濃丸」、(d) は戦後に東郷平八郎の揮毫を受けた「信濃丸」の船影。

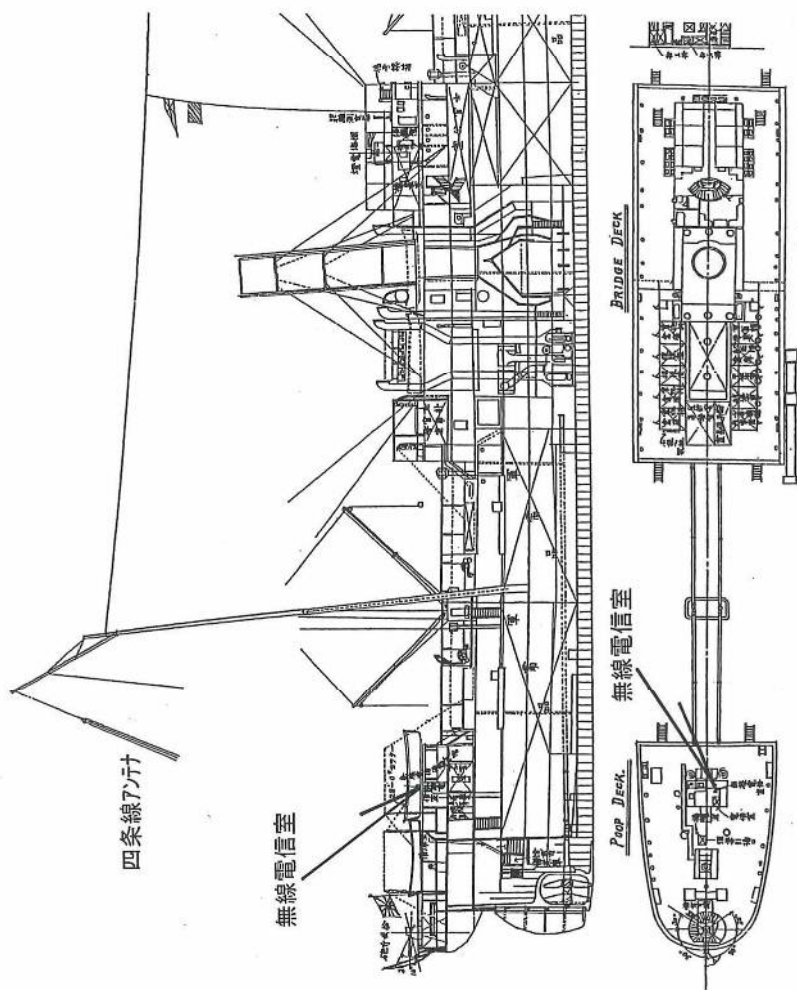
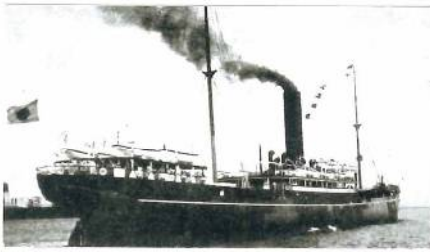


図10・14 仮装巡洋艦「信濃丸」兵装艦装図の後部
 (明治38年3月19~31日兵庫港にて艦装/最後尾甲板上病室を無電室に改造)



(a) 北米航路時代の信濃丸



(b) 明治34年?三笠に乗員を運ぶ



(c) 明治38年呉軍港側宇品港にて満艦飾の信濃丸



(d) 三笠保存会のため後の信濃丸船影に東郷元帥が揮毫(昭和8年初夏)

図10・15 パルチック艦隊を発見した仮装巡洋艦「信濃丸」四態

◇明治三十八年三月三十一日（一九〇五年）

この日、横須賀工廠造兵部の無電機裝備が竣工した。これで駿吉のいる無電機工場にも通信所が出来た。

◇明治三十八年三月（一九〇五年）

このころ木村駿吉は「バルチック艦隊に設備されているドイツ製無線電信機の性能と日本側の対策案」を提出した。

駿吉は外波内蔵吉からの情報などを参考にして、逆L型や山本英輔が使用していたT型アンテナの性能が良い事を確認し、四月に改善案を出した。

またロシアの無電機がテレフケン製であることも推理し報告した。

◎バルチック艦隊迎撃のための

無電関係者の奮闘 四月

◇明治三十八年四月一日（一九〇五年）

第二艦隊幕僚の山本英輔は、無電機開発の経験を活

かして実際の軍艦を用いた多くの実験をなしていたが、この日、同年一月以降の実験結果をまとめて「第二艦隊ニ於ル無線電信ニ關スル研究」として関係筋に配布した。

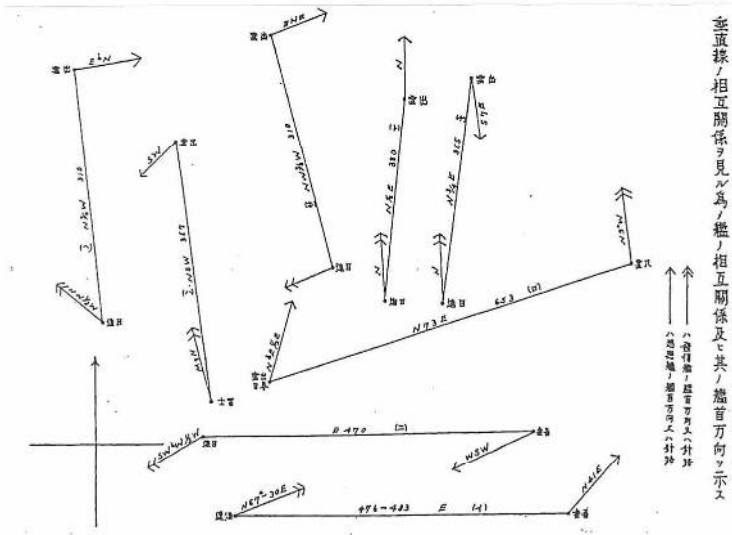
その内容の一部を図10・16に示した。いずれも木村駿吉があまり手がけていなかった実用面での実験で、有用なデータだったし、また電離層反射の発見にあと一步というところまで近づいていた。

何十年か後に山本は「軍人でなければ博士が取れていたかもしれぬ」と語っているが、内容の鋭さは博士論文以上のものがある。

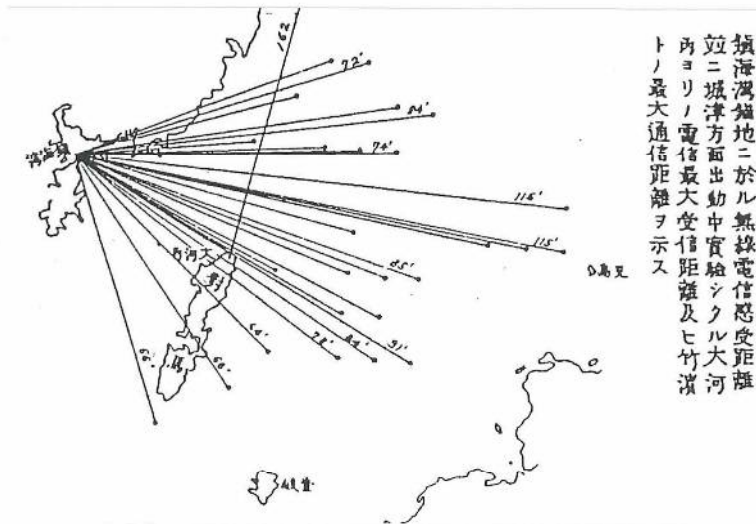
◇明治三十八年四月二日（一九〇五年）

一等巡洋艦「日進」の無電室において、蓄電池の爆発事故が発生し、翌日軍令部に報告された。おそらくは水素洩れによる爆発だったのであろう。

この報告で、同艦の無電室には二五個の蓄電池が積まれていたと分かる。十分に充電した状態で六〇ボルトである。



(a) 送受アンテナの向きと伝搬距離の関係



(b) 鎮海湾から対馬・山陰方面への伝搬状況

図10・16 山本英輔が中心となった第二艦隊における電波伝搬の研究 (明治38年4月1日報告)

◇明治三十八年四月四日（一九〇五年）

木村駿吉らが大島波浮港を調査して、無電望楼の設計案を作って報告した。この時期になっても必死で望楼を増設していた事が分かる。

◇明治三十八年四月七日（一九〇五年）

北方の警備に当たっていた仮装巡洋艦「香港丸」が北海道国後水道で、ほぼ一〇九〇海里も離れた對馬竹敷の二等巡洋艦「橋立」の無電を傍受した。

直達無電の一〇倍以上の距離なので話題になったが、電離層反射の知識の無かった当時としては、理解の出来ない現象だった。

◇明治三十八年四月八日（一九〇五年）

有名な仮装巡洋艦「信濃丸」はこの日、無電機を装備して呉軍港を出発し、直ちに玄界灘方面の哨戒任務に着任した。

艦長・成川揆（大佐）、副長・丸橋彦三郎（中佐）、航海長・八戸三輪次郎（少佐）、分隊長中の無電係・前川義一（大尉）、打電担当・小森吉助（少尉）であった。

括弧内は当時の階級。

バルチック艦隊発見時の詳細は後述する。

◇明治三十八年四月九日（一九〇五年）

木村駿吉、艦載の電源減少に反対する意見を提出した。蓄電池の不足から量を減らす意見が有ったのであろう。

◇明治三十八年四月十日（一九〇五年）

開戦時にウラジオ港外に水雷を敷設するための水雷沈置船にも無電機を装備することになり、あれこれ苦労して設置した。

沈置船は小型なのでアンテナが大変だったであろう。

◇明治三十八年四月十一日（一九〇五年）

東郷平八郎、日本海方面で使用する一字連送警急信号「無線電信略符号」を更改した。日本海方面用の第六版で、実際に日本海海戦で使用されたのがこれである。

（付録33のM参照）

◇明治三十八年四月十三日（一九〇五年）

東郷司令長官が、バルチック艦隊を迎え撃つにあつた。その内容は激しい激励が基調であるが、第九項に無電に関する次の注意がある。

此ノ作戦中通信連絡ハ最肝要ナル力故ニ無線電
信ヲ有スル各艦ハ不急不要ノ送信ヲ爲ササルコ
トニ注意シ損傷ノ爲メ已ムヲ得ヌ根拠地ニ還ル
艦モ通信輻輳ノ場合ニハ別ニ之ヲ報告スルニ及
ハス

多くの艦船が無電を装備したため、混信が増えて悩んでいたのであろう。この注意はどの艦もよく護っており、打電はかなり慎重であった。

図10・17にこの命令の一部を示したが、そこにC地点の「三笠」とある。

C地点は前述したが、この頃の第一第二艦隊は、C地点の周辺で砲撃の猛訓練に明け暮れていた。

◇明治三十八年四月十七日（一九〇五年）

第三艦隊司令長官が、對馬海峡哨戒任務についていた麾下艦に対して、緊急の場合以外は無電の使用を禁

聯隊檢密 第六六號	三月廿九年四月十日
聯合艦隊命令	第三艦隊三笠
一、三月廿九年四月十日、在りし敵艦三隻隊其後、敵艦三隻、 其の確實な情報も、雖使未だ諸情報、編成も、敵艦三隻、 速に之を以て追討、未だ之を以て、疑、	
二、聯合艦隊、尚敵艦三隻、其北より待て、其速に之を 破り、皆一掃、之を撃滅せしむ。	
中略	
九、此作戦中通信連絡ハ最肝要ナル力故ニ無線電信ヲ有スル各艦 ハ不急不要ノ送信ヲ爲ササルコトニ注意シ損傷ノ爲メ已ムヲ得ヌ 根拠地ニ還ル艦モ通信輻輳ノ場合ニハ別ニ之ヲ報告スルニ及 ハス	
十、今後一海戦ノ爲メ、大高ノ決戦ニシテ、以テ、敵艦三隻隊 ノ上下、各領、右翼、左翼、應ニ果テ、必カク、破リ、必勝ノ期 ヲ有シ、敵艦ヲ破リ、以テ、帝國陸軍ノ大國ヲ置キ、以テ、	
聯合艦隊司令長官 東郷平八郎	

図10・17 無電の乱用を戒める命令
(明治38年4月13日C地点にて命令)

ずと訓令した。

右の聯隊命令に対応したものであろう。

◇明治三十八年四月十九日（一九〇五年）

木村駿吉は外波内藏吉からの諜報や海外文献によつて、バルチック艦隊の無電機はドイツのテレフンケン

製で極めて強力であることを知り、これに対抗する緊急に実現可能は策は、アンテナを二重にしアンテナ電流を増やすことであると考え、提言した。

この提言に基づいて東郷司令長官は次の如き訓令を發した。

垂直線一個を増設し竜骨線に対し兩舷に対称に張る。電流はアークの出ない範囲で一五〜二〇アンペアとする。略符号の利用に習熟せよ。

木村駿吉がこの提言をなした時のアンテナ電流の実験グラフを図10・18に示した。

また訓令の説明を『極秘明治三十七八年海戦史』から引用し、図10・19に示した。

海軍省も軍令部もただちに動いたようで、主要艦では必死で二重化をなした。

この形式のアンテナの写真が残されており、それは図6・40や43に示してある。

現在のアンテナの知識から判断すると、果たして効果が有ったのかどうか、疑問もある二重化だが、木村駿吉らの必死の思いが伝わってくる増設であった。

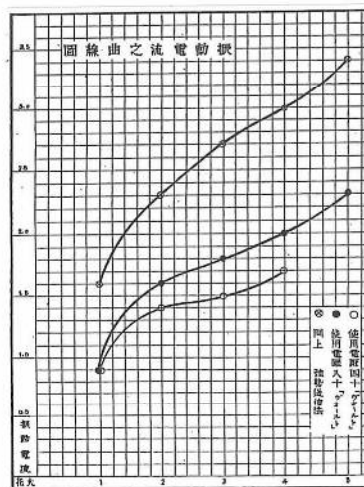


図10・18 アンテナ二重化によるアンテナ電流の増大図

◇明治三十八年四月二十日（一九〇五年）

第三艦隊司令長官が麾下に次の訓令を出した。

哨艦帰着スルトキハ其ノ出動中ニ於ル無線電
ノ發受信紙（傍感紙アレハ之ヲ含ム）ヲ提出ス
ヘシ

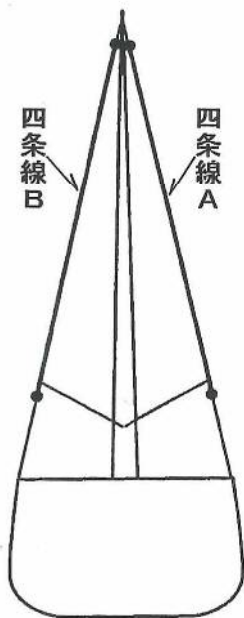
◇明治三十八年四月二十一日（一九〇五年）

この日東郷司令長官は、特務艦隊に対して、

会戦の爲に海峡に出動したときは母艦「日光丸」

木村技師ヨリノ通報ニ依レハ敵第二艦隊諸艦ノ無線電信機ハ彌逸、テレフレンケン式ニシテ其ノ送信勢力頗ル大ナリ即チ二橋艦ニ在リテハ二橋ノ間ニ垂直線十五本三橋艦ニ在リテハ三橋ノ頂上ニ四條線ヲ渡シ大橋後橋ノ間ヨリ之ヲ四條線ニテ低下シ通信室ニ入ル又驅逐艦ノモノハ數十條ノ多數線ヲ以テ圓筒形ヲナスト云フ而テ其ノ送信勢力大ナルモノハ我カ海軍ノ無線電信ヲ壓倒シ我カ妨害中ニモ自「」ノ通信ヲ全ウスルト同時ニ敵ノ妨害ハ頗ル有效ナルヘシ之ニ對シ我カ艦船ハ強勢送信法ヲ用ヒサル可カラス即チ今日用フル所ノ垂直線一個ヲ増シ(四條線ヲ四長) (稱者日ノ當時我カ艦隊各艦ノ垂直線ハ四條線下部) (一條線ヲ一條線ニ集メ) (一條線ニテ電燈ニ繋グヲ例トセ)龍骨線ニ對シ兩舷ニシレモトリカルニ張り引入口ニ導ク而テ電流ハ「アー」クニ出テサル限リ十五、アンペヤ」乃至二十「アンペヤ」ヲ用フルヲ可トス

(附言) 果シテ前記ノ如シトセハ我カ艦船ハ略符ノ利用ニ習熟スルコト最必要ナリ



四月二十五日 山本海軍大臣ハ、東郷聯合艦隊司令長官ヨリ、無線電信機送電力増加ノ手段トシテ、各艦垂直線ノ條數ヲ増加相成度旨ノ上申ニ接シタルヲ以テ、齋藤艦政本部長ヲシテ陰謀セシメタル後、第一第二艦隊ヲ通シテ艦船用垂直線六捕、第三艦隊ヲ通シテ三捕ヲ限リ、増備方ヲ認許ス、

図10・19 明治38年4月19日 東郷司令長官のアンテナ二重化と略符習熟の命令及び海軍大臣による認許

及び給炭船一隻を蔚山港に送り「日光丸」は無電連絡に任せよ。

と訓令した。

水雷母艦「日光丸」の艦長は木村浩吉だったが、この任務についていた五月六日に釜山南湾で座洲してしまったため、五月二十日に「春日丸」を代わりに配備した。浩吉は無電作業には適任だったが、日本海海戦では不運が多かったようである。

◇明治三十八年四月二十一日（一九〇五年）

水雷母艦「豊橋」の無電機用発電機は不安定で扱い困難なため、蓄電池をぜひ備えてほしい旨の要望書が、横須賀工廠から海軍大臣宛に出された。

「豊橋」から横須賀工廠宛の要望書は十八日に送されたが、責任者は、木村駿吉と外波内蔵吉が海外出張中の無電委員会の留守番役だった土屋光金大佐で、この時は「豊橋」の先任機装委員だった。

(図10・20参照)

艦載発電機は不具合が多くて困ったという話は、後に木村駿吉が思出談の中で記している。

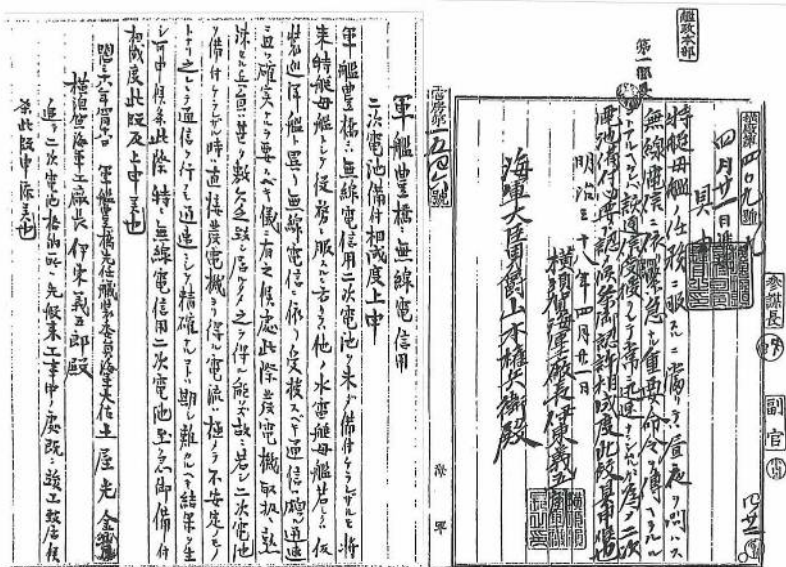


図10・20 水雷母艦「豊橋」の二次電池要望書

海軍としては開戦直前に蓄電池が不可欠だと分かって必死で輸入を図っており、日本海海戦の前にはかなり到着していたようだが、それでもまだ不足だったらしい。

この同じ二十一日に、第三艦隊司令長官は、海軍大臣宛に「ロシア艦隊に対抗するためにアンテナ用の四条線を一本ずつ至急増備してほしい」と要望した。

◇明治三十八年四月二十五日（一九〇五年）

東郷司令長官が海軍大臣宛に、「各艦への垂直線（アンテナ）の増備」を要請した。

木村駿吉の意見によって各艦隊がアンテナの二重化に懸命になったことが分かる。

これらの要請に応じて海軍大臣は、二十五日に第三艦隊宛に「垂直線三揃増備」を認許し、また二十七日に第一第二艦隊宛に「垂直線六揃増備」を認許した。

アンテナ線の配備に海軍大臣の書類が必要なのは大げさに思えるが、当時としては最新兵器の一種であり、製造もそう簡単ではなかったと考えられる。

◇明治三十八年四月二十八日（一九〇五年）

第三艦隊司令長官が麾下に対し「無線電信の送受信傍受を記録する書式」を定め、提出を命じた。

◇明治三十八年四月二十九日（一九〇五年）

木村駿吉は先に八丈島に派遣されたが、この日「八丈北望楼」に無電機を設置したことを報告。バルチック艦隊が太平洋側を通過する可能性も有ったための設置で、設置場所は図10・21に見られる。

この頃の木村駿吉は横須賀における無電機製造だけでなく現場への無電機設置にも従事して東奔西走していた。

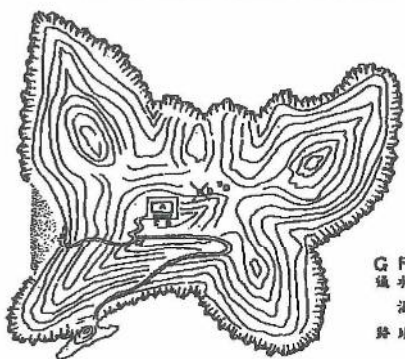
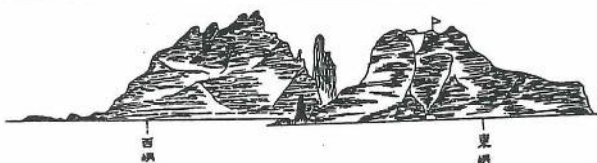
なお望楼は竹島にも設けられており、その図面が残されている。図10・22に見取り図を示した。当然ながら海底ケーブル接続の図面も残されている。

当時から日本の領土として利用されていたことが分かる。

この頃になると、バルチック艦隊はすでに日本近海に到着している筈だと考えられていたが、いったいどこにいるのか不明で、聯合艦隊幕僚たちは焦燥していたと言われる。



図10・21 駿吉が自ら調査設計した八丈島無電望楼



竹島假設望楼建設設備配置圖

A 望楼
B 水壩
C 蒸溜水壱
D 備蓄池
E 見張所
F 水塔
G 陸路

図10・22 竹島望楼見取り図(上図は旗の位置)

十・四

タタタ・敵艦隊見ユ!

索敵作戦と「信濃丸」の快挙

◎バルチック艦隊迎撃のための
無電関係者の奮闘 五月中旬まで

○明治三十八年五月九日

叙従五位
叙従五位
叙従五位
叙従五位

◇明治三十八年五月七日（一九〇五年）

八丈北望楼で駿吉が準備した無電通信を開始した。
同日、海軍大臣は第一第二艦隊に垂直線六揃を認許。

◇明治三十八年五月九日（一九〇五年）

木村駿吉、叙任辞令。官報に、
「叙従五位 正六位勲五等木村駿吉」
とある。図10・23参照。

◇明治三十八年五月十三日（一九〇五年）

木村駿吉、『東航敵艦隊ニ装備セル無線電信ノ効力ニ
關スル報告』を海軍教育本部より刊行し関係方面に配
布した。

正六位勲五等 木村 駿吉
正六位勲六等 市川 俊雄
正六位勲六等 宇都宮 鼎
正六位勲四等工學博士 下瀬 雅允

図10・23
木村駿吉
叙任辞令

廿三日 晴 西風 二一三	午前五時の分 哨兵ヲ撤ス今時オ四警式線ニシテ針路ヲ九転シテオ六警式線ニシテ針路ヲ九轉シテオ六警式線ニ向テ	七時一分 南西ノ方ニ向テ北東ノ方ニ向テ航シ汽船ノ橋ヲ認メ次ニ其隻數四隻ニテ且ツ其先頭艦ノ煙突二本ナリ認ノ其時日並ヒニ塔竹ヨリ考フルニ如何ニモ不審ニ堪ハザル以テ何レノ軍艦ナレヤヲ確メン為メ前橋橋ニ折衷ヲ配シテ其舉動ヲ如何ニ向ヒニ見張將校ヨリ他ニ一艦ノ其前方ニ航行スルモノアルヲ報シ来リ且其艦型ノ致關航ニ類似スルヲ以テ敵ノ亦ニ艦隊ノ一部ノ偵察察若リ、前衛ナルヲ想ヒ不取敢シテ各艦ニ折電セリ	九時五分 警式線ニオ一艦隊ヲ出動シアルヲ報シ来リシテ以テ針路ヲ報シテ前記ノ艦隊ニ向ヒニ近ツクニ促ヒ我オニ我隊ノ四隻ノ艦隊ヲ供フモノナルヲ確ノ直ニ緊急信号ヲ取消シヨリオ六警式線ニ向テ定針航行ス
--------------	--	--	---

(a 上) 佐渡丸戦時日誌

<p>午前八時 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>敵艦隊見ニ</p> <p>午前八時 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>敵艦隊見ニ</p> <p>午後八時 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>敵艦隊見ニ</p> <p>午後九時 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>敵艦隊見ニ</p> <p>午後十時 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>敵艦隊見ニ</p> <p>午後十一時 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>敵艦隊見ニ</p> <p>午後十二時 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>敵艦隊見ニ</p>	<p>五月二十日 火曜 晴 西風カ多ク一知後水雷艇一艘 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>五月二十一日 火曜 晴 西風カ多ク一知後水雷艇一艘 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>五月二十二日 水曜 晴 西風カ多ク一知後水雷艇一艘 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>五月二十三日 木曜 晴 西風カ多ク一知後水雷艇一艘 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>五月二十四日 金曜 晴 西風カ多ク一知後水雷艇一艘 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>五月二十五日 土曜 晴 西風カ多ク一知後水雷艇一艘 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>五月二十六日 日曜 晴 西風カ多ク一知後水雷艇一艘 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>五月二十七日 月曜 晴 西風カ多ク一知後水雷艇一艘 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>五月二十八日 火曜 晴 西風カ多ク一知後水雷艇一艘 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>五月二十九日 水曜 晴 西風カ多ク一知後水雷艇一艘 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p> <p>五月三十日 木曜 晴 西風カ多ク一知後水雷艇一艘 哨兵ヲ撤シテ煙突ヲ見ニ</p>
--	--

(c 左) 三笠戦時日誌

(b 右) 千歳戦時日誌

図10・24 明治38年5月23日 佐渡丸誤報の経緯

▽仮装巡洋艦「佐渡丸」からの緊急信号

明治三十八年五月二十三日——日本海海戦の四日前——日本海軍に重要な教訓を残した緊急信号が発信された。

まず概略を記す。

午前八時五十分、哨戒中の特務艦隊仮装巡洋艦「佐渡丸」から旗艦「三笠」に「タタタ・敵ノ第二艦隊見ユ」との緊急信号が到達し、聯合艦隊は至急出撃準備に入り、第一第二艦隊は鎮海湾出入り口の加徳水道に集結した。

しかし午前十時五十分、この警報は誤りと判明し、艦隊は加徳水道に仮泊した。

その後「三笠」は東京との連絡を密にするため鎮海湾奥の巨済島松貞浦里局に繋がる「臺中丸」の近くまで戻った。

他の諸艦のほとんどは加徳水道に停泊して臨戦態勢を続けた。

これが誤報事件の概要だが、幸い関係深い艦の戦時

日誌にこの事件が記されているので、それを引用しておく。

(図 10・24)

(佐渡丸の戦時日誌より)

廿三日 晴 西風 二—三

午前五時〇分 哨兵ヲ撤ス 全時第四警戒線ニ達シ針路ヲ左転シテ第六警戒線ニ向フ

七時一五分 南西ノ西ノ方向ニ当リ北東方向ニ航スル汽船ノ櫓ヲ認メ次テ其隻数四隻ニシテ且ツ其先頭艦ハ烟突二本ナルヲ認メ其時日並ヒ二場所ヨリ考フルニ如何ニモ不審ニ堪ヘサルヲ以テ何レノ軍艦ナルヤヲ確メン爲メ前橋樓ニ將校ヲ配シテ其舉動ノ如何ヲ向ヒシニ見張將校ヨリ他ニ一小艦ノ其前方ニ航行スルモノアルヲ報シ来リ且其艦型ノ戦闘艦ニ類似スルヲ以テ敵ノ第二艦隊ノ一部

ノ偵察若クハ前衛ナルヲ想ヒ不
取敢之レヲ各艦ニ打電セリ

九時二〇分

笠置ヨリ無線電信ニテ我第三戰
隊並ニ第一驅逐隊ノ出動シアル
ヲ報ジ来リシヲ以テ針路ヲ転シ
テ前記ノ艦隊ニ向ヒシニ近ツク
ニ從ヒ我第三戰隊ノ四隻ノ驅逐
艦ヲ供フモノナルヲ確メ直ニ緊
急信号ノ取消ヲナシ第六警戒線
ニ向テ定針航行ス

一〇時四五分

南東一ノ二東方向ニ煤煙ヲ認め
針路ヲ転シテ之レニ向ヒ

午後〇時〇分

停船ヲ命ジ海軍中尉木村豊樹ヲ
派シ臨檢セシニ該艦ハ英船 S A
I N T B E D E (Q W C T)
ニシテ門司ヨリ大沽ニ向フモノ
ニシテ船舶書類完備シ一モ怪ム
ヘキ点ナキヲ以テ之レヲ解放ス

(以下略)

「佐渡丸」は「信濃丸」や「備後丸」と同じく日本郵

船所屬の商船で、排水量や速度もほぼ同じ姉妹船であり、同じ時期に仮装されて特務艦隊所屬として哨戒任務についていた。

文中の用語を略説する。

第四警戒線や第六警戒線は、図 10・25 や図 10・26 に示してある。この二つの海域図は哨戒活動を理解する上で重要なので、よく見ておいて頂きたい。

敵第二艦隊と誤認した地点は、図 10・26 の▼として図示してあるが、地点数字では一八三地点附近であった。

敵と誤認した第三戰隊とは第一艦隊所屬の戰隊で出羽重遠中将指揮する「笠置」「千歳」「首羽」「新高」の二・三等巡洋艦からなっており、哨戒や敵艦追跡誘導などを任務としていた。

伴った四隻の驅逐艦とは鈴木貫太郎指揮する第二艦隊第四驅逐隊だったらしい。

これらは「佐渡丸」に近い一八三地点近くを遊弋していたため、誤認されたのであろう。

引用文の最後の部分は英国船を臨檢した報告だが、どの哨戒船も頻繁に商船を臨檢していたらしい。

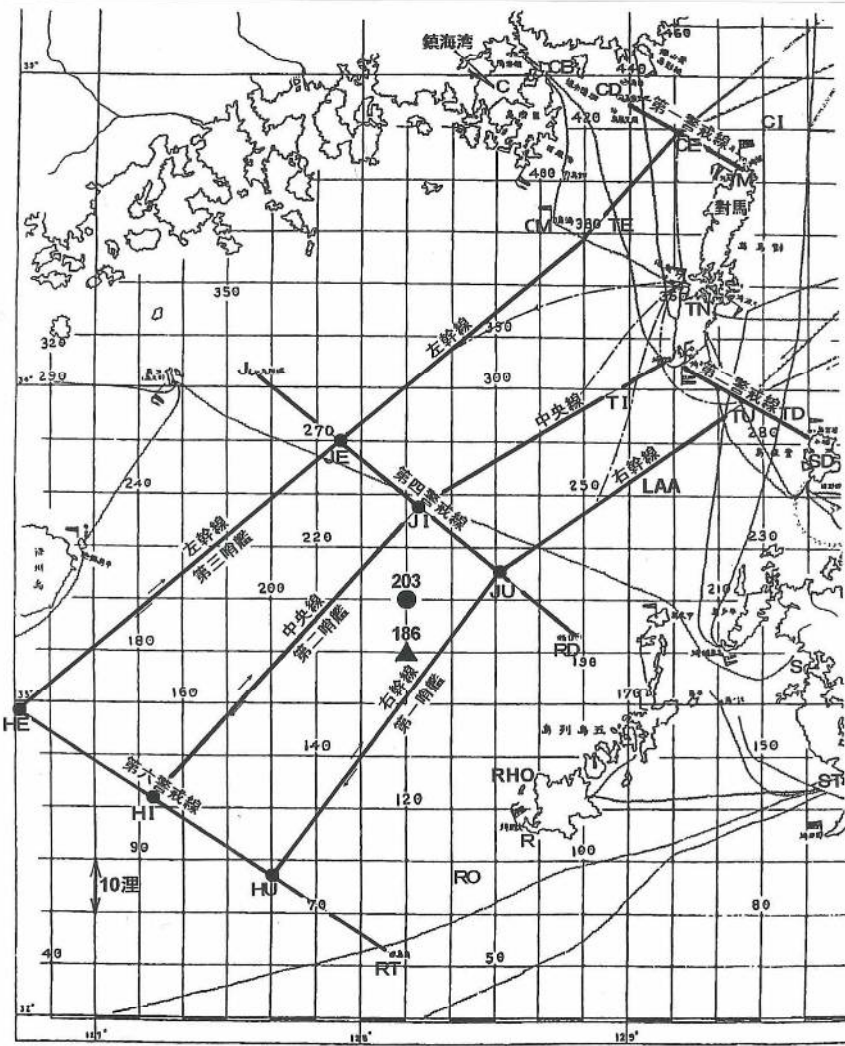


図10・25 バルチック艦隊哨戒用警戒線と海域記号図

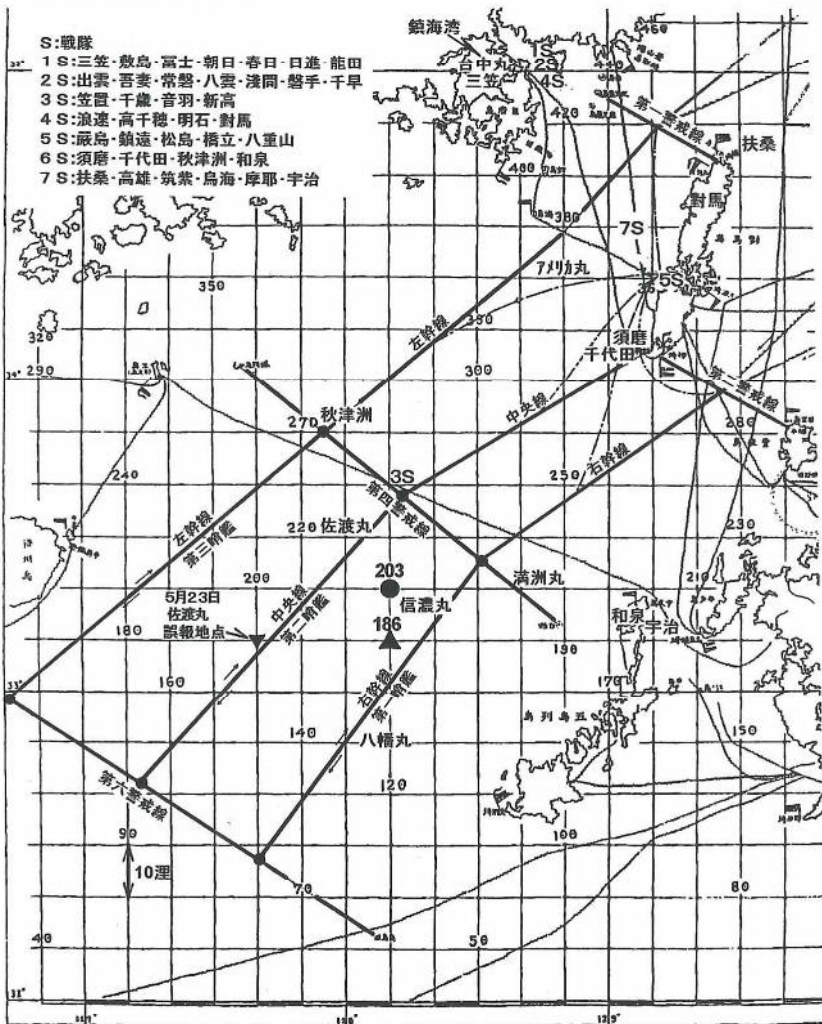


図10・26 信濃丸バルチック艦隊発見時の哨艦配置
 及び主要艦隊待機位置

この「佐渡丸」の戦時日誌では、打電の正確な時間や誤認が明確になった経緯がはっきりしないので、近くにいた第三戦隊の二等巡洋艦「千歳」の無電記録を引用しておく。

(千歳の戦時日誌より)

午前八時二十二分 哨艦佐渡丸発電

敵艦隊ラシキ煤烟見ユ

午前八時四十分 佐渡丸発電

敵艦隊見ユ

中継艦橋立ハ直チニ對州鎮海湾方面ニ傳電セリ
八時五十七分笠置ハ佐渡丸に傳フルニ第三戦隊
及第四驅逐隊ノ地点(一八三)ニアルヲ以テシ
且ツ尋ヌルニ本戦隊及第四驅逐ノ外ニ何物力見
ルヤヲ以テス全九時二十一分佐渡丸ヨリ答〔見
エス〕ト蓋シ南下シツ、アリシ佐渡丸ハ前方ニ
本戦隊及第四驅逐隊ヲ見テ敵艦隊ト誤認セルニ
依ルナルベシ全九時三十五分本艦ハ笠置ノ右方
ニ第二小隊ハ左方ニ出テ漂泊ス
午前十時佐渡丸ヨリ橋立ヘノ電
今爲セル信號ヲ取消ス 嚴島ニ頼ム

「千歳」は第三戦隊の旗艦「笠置」の麾下にいて遊弋活動していたが、記録担当士官が綿密な人物だったらしく、無電の時間と内容が精密に記されており、また誤報と判明した理由なども正確に書かれているので参考になる。

午前八時二十二分に「佐渡丸」が最初に打電したのは、

「ネネネ・・・敵艦隊ラシキ煤烟見ユ」*

——であり、次いで午前八時四十分打電したのが、

「タタタ・・・敵ノ第二艦隊見ユ」*

——であったと分かる。

第四警戒線以南の無電は直接は鎮海湾の「三笠」に届かないので、中継の役目を負っていたのが、第三艦隊第五戦隊所属の二等巡洋艦「橋立」で、ただちに「三笠」のいる鎮海湾や第三艦隊の對馬根拠地(竹敷要港部/浅茅湾近辺)に中継転送した。

この頃の「橋立」はたぶん對馬の南西のさして遠くない海域にいたと考えられる。

「千歳」はたいへん冷静で、「佐渡丸」が遊弋している一八三地点の近くに自分たち第三戦隊と第四驅逐隊も

いるので、それを誤認ではないかと推定し、

「それ以外に何か見えるか」

——と質問し、「見えず」との返答から、誤認だと確信したようである。

誤認が明確になつてからの行動の中の第二小隊とは、同じ戦隊の三等巡洋艦「音羽」「新高」であろう。

最後に、午前十時に「佐渡丸」が中継役の「橋立」に対して緊急信號の取り消しを對馬にいる第三艦隊の旗艦「嚴島」に伝えてほしいと打電していることが分かるが、当然「嚴島」から鎮海湾の「三笠」には転電されたであろうし、「橋立」から直接届いてもいたであろう。

「千歳」の戦時日誌は簡潔でありながら重要な点は漏らさず正確に記されていて、参考になる。

日本海海戦の当日の記録においても、第六戦隊の「和泉」とともに第三戦隊の「笠置」や「千歳」の戦時日誌は参考になる。

* 「千歳」が、傍受した無電が「佐渡丸」発電であることや海域が一八三地点であることを認識していたのは、「佐渡丸」の緊急信號 ネネネ・や

タタタ・・ にそのような符丁が加えられていたからである。

推定するそれは、

・ ・ ・ ・ ・ (一八三)「YT」セ

——である。

また「橋立」の中継は、これの末尾に、「BA」「BA」「BA」を加えたものだったであろう。

さて最後に、この誤報を受電した聯合艦隊旗艦「三笠」の動きを記した二十三日午前の同艦戦時日誌を引用する。

午前八、五五、

哨艦佐渡丸ヨリ「敵艦隊見ユ」

ノ無電到着次テ至急出港準備

ノ命アリ

全 九、四八、

揚錨出港第一、第二、第四、

戦隊續行ス 航行序列左ノ如

シ(図略)

全 九、五五、

原速回轉六十三、合戦準備

全 一〇、四〇、

右整備開散

全 一〇、五〇、

佐渡丸ノ緊急略符誤リト認ム

艦隊ハ豫定ノ序列ヲ以テ航行
シタ刻坂港スノ旗信アリ

「三笠」の同じ時間帯の日誌は艦隊出撃の準備に重点が置かれているので無電関連は簡素化されているが、「千歳」の受信より十五分程度遅れてタタタ・・が届いたと分かる。また警報解除は「千歳」の受信より五分遅れているが、時間をかけて慎重に判断したのであろう。

その後二十七日朝までの艦隊と「三笠」の行動は本項目の冒頭のとおりである。

この事件は聯合艦隊にとって大きな教訓であり、哨戒艦は慎重に判断するように求められたと考えられる。二十七日払暁の「信濃丸」が打電までに相当な時間をかけたのは、この教訓が有ったからであらう。

当時の日本海軍がどのような警戒線を海上に定め、各海域の略符号をどのように定めていたかを分かりやすく図にしたのが図10・25である。

海域は一〇分（一〇海里）ごとに数字が付せられ、

要所要所にはアルファベットでの記号が付せられている。

警戒線は北の第一から南の第六までであり、哨艦の動きを定める三本の幹線が警戒線と直角に決められている。

「佐渡丸」は中央線を第四から第六に向かつて哨戒中に、第四と第六の中間で誤認したのである。

この図にある一〇分おきの地点数字やアルファベットによる重要海域の指定は、海戦時の電信連絡に頻繁に用いられている。

◇明治三十八年五月二十五日（一九〇五年）

木村駿吉が「無線電信ニ關スル報告」を海軍教育本部より刊行配布した。

これは戦後に刊行された「世界ノ無線電信」の元ではないかと考えられる。

この同じ日、島村速雄（後の元帥）が、木村駿吉から依頼を受けた「世界ノ無線電信」稿本への丁重長文

の礼状を認めた。

これが駿吉の元に届いたのは日本海海戦が終わった後だった。

この礼状の写真は島村の許可の元に、秋山眞之の礼状とともに「世界ノ無線電信」の巻頭に掲載された。

島村速雄と秋山眞之の駿吉への礼状は大変有名で、昭和に入って原宿の東郷神社横に出来た海軍館にも無電機模型とともに展示された。

また島村の礼状は後に教科書の副読本にも採用された。

現在の横須賀の記念艦三笠に秋山眞之からの礼状が掛け軸の形に表装されて収蔵されているが、これは現物ではなく、現物と同じ文章を展示用に秋山が新たに書いたものである。

◇明治三十八年五月二十六日（一九〇五年）

気象学者の岡田武松が、翌二十七日の日本海の気象予報を「天気晴朗ナルモ波高カルヘシ」として出した。

◇明治三十八年五月二十七日（一九〇五年）

いよいよ日本海海戦だが、この時点での日本側の無

電機の在庫は二〇組だったとされている。

木村駿吉らが横須賀工廠で必死に作り続けた結果、多少の予備が出来ていたと判明する。

◎綿密な索敵作戦の概要

▽バルチック艦隊哨戒用警戒線と海域記号

日本海海戦時における旗艦「三笠」艦上の聯合艦隊

司令長官・東郷平八郎麾下の参謀は、

加藤友三郎海軍少将（参謀長）

秋山眞之海軍中佐（先任参謀）

飯田久恒海軍少佐（参謀）

清河純一海軍大尉（参謀）

——であったが、この中の清河純一（後海軍中将）

が参謀の列に加わったのは、信号に特別詳しい軍人だったからであろう。

第九章に記したが、バルチック艦隊が北上するであ

ろうと推測された全海域には、東経北緯ともに一〇分おきに縦横の線をひき、その交点に西から東へ南から北へと番号をつけて、東経北緯の角度をいちいち記述しなくとも、三桁の番号のみで海域の地点が表示できるように番号が定められていた（付録31）。

また重要地点には、アルファベット一文字か二文字程度の呼び名がつけられていた（付録31）。

この信号体系は『第五改正海軍信号書』にあるもので、明治三十六年に軍令部において財部彪（後の海軍大臣）指揮のもとに清河純一が実行部隊となつて作り上げたと言われている。

これは命令や報告を簡単化し間違いを減らす上で卓効があり、後にこれを知った各国海軍が賞讃したとされる。

さらにバルチック艦隊を迎えるに当たつて、索敵哨戒をなす艦船への指示を有効にするために、いくつかの警戒線がひかれた海図が作成された。

『極秘明治三十七八年海戦史』にあるその海図を、分かり易く書き直したのが図10・25と図10・26である。

この二図は「佐渡丸」誤報事件の個所に掲示したが、

改めて解説する。

図10・25は、一〇分おきに経緯線を引き、その交点に地点番号をつけた海図で、それに太線で警戒線を描き、さらに重要地点のアルファベット記号を加えたものである。

交点の番号は一〇置きに記されており、図の左下がもっとも小さく、右上がもっとも大きな数字になっている。

左下（南西端）に四〇、右上（北東端）に四六〇という数字が見える。

右下にある列島が五島列島で、その右上に平戸島・松浦・佐世保などが見える。右端の中間にあるのが壱岐である。右上には対馬が見える。

中央上部は朝鮮半島南端の鎮海湾やその西側の群島で、左中央には濟州島の一部が見えている。

これで大体の地図はお分かりと思う。

次に太線で描かれた警戒線であるが、これは北西から南東に向けて伸びている警戒線と、これに直交して北東から南西にかけて伸びている哨戒用の線に分けられる。

警戒線は、第一から第六まで描かれているが、第三と第五はこの地図の外なのであろう。

第一警戒線は鎮海湾入口の加徳水道から対馬の北端までで、ここを突破されるとウラジオまで逃げられる恐れがあるので、きわめて重要な警戒線だった。

第二警戒線は対馬南端から老岐までの線で、いわゆる東水道の通過を防いだり見張ったりする警戒線である。実際のバルチック艦隊はここを通過した。

第四警戒線は、二九五地点と一九〇地点とを結ぶ線で、両地点ともに近くに小島がある。

第六警戒線は一五六地点と四八地点を結ぶ線で、四八地点の近くには小島がある。日本近海への入口である。

このいくつかの警戒線と直交する線だが、左右幹線・中央線と呼ばれていた。

この太線の交点やその周辺に、重要地点を示すいくつかのアルファベット記号がある。

南から順に記すと、第六警戒線に沿っては、H E・H I・H U・R Tがある。線から少し離れてR O・R

・R H Oがある。

第四警戒線に沿っては、J・J E・J I・J U・R Dがある。

第二警戒線の周辺にはT I・T U・T D・T N・T Eなどがある。

図の最上部で、鎮海湾奥から第一警戒線にかけて、C・C B・C D・C E・C Iがあり、対馬の北端にはT Mがある。

全体として系統性をもって記号がつけられていることが分かる。

最後に警戒線と直交する太線を見てみる。

右幹線は、H UとJ Uの間に引かれ、そこに第一哨艦と記されている。多くの特務艦（仮装巡洋艦）や小型艦がこの線に並行して哨戒活動をしていたようである。

この右幹線はJ Uからさらに第二警戒線のT Uにまで延びている。

中央線は第二哨艦と記されて、H IからJ Iに至り、そこからさらにT Iを経て対馬南端部に至っている。これに沿っても多くの艦船が哨戒していた。

左幹線の南端H EからJ Eまでは第三哨艦と記されていて、そこからT Eを経てC Eまで左幹線が続いている。同様に多くの艦船が往復していたらしい。

続いて図10・26を略説する。

この図は25からアルファベットの記号を除き、かわりに、「信濃丸」がバルチック艦隊を確認して警急信号を打電した時点における他の艦船や戦隊の位置を記している。

艦船名としては、「信濃丸」「佐渡丸」「八幡丸」「満洲丸」「アメリカ丸」(以上特務艦隊の仮装巡洋艦)、「須磨」「千代田」「秋津洲」「和泉」(以上第六戦隊)、「扶桑」「宇治」(以上第七戦隊)が見られる。

また、第三戦隊・第五戦隊・第七戦隊の主力がどのあたりにいたかも分かる。

バルチック艦隊と真正面から激突すべき主力は鎮海湾の入口近くに待機しており、それは第一戦隊・第二戦隊・第四戦隊および駆逐艦隊・水雷艇隊であった。

以上の図によって、バルチック艦隊発見時の聯合艦隊の配置が一目瞭然である。

▽バルチック艦隊発見直前の哨戒行動

バルチック艦隊を発見するという偉功の有った「信濃丸」は、「臺中丸」を旗艦とする附属特務艦隊における計六隻の索敵用仮装巡洋艦の一隻であり、この時期には昼夜をおかず哨戒を続けていた。

有名な五月二十七日の前日からの航路を、図10・27に示した。

「信濃丸」が担当していたのは右幹線における第四警戒線と第六警戒線に挟まれた部分で、図10・25の記号ではJ UとH Uの間だった。

五月二十六日の早朝に①(J U)を発して②(H U)に向かい、二十六日の午後一時二十分には②に達した。

そこで反転してゆっくりと北上し、二十七日午前二時四十五分に③の海域に達した。

この間の船の速度は人間のマラソン程度であり、夜間の視界不良の中で必死に見張りながら航行していたことが分かる。

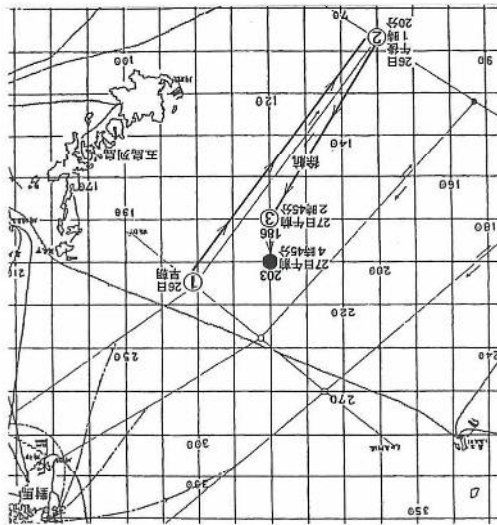


図10・27 信濃丸の5月26日～27日早朝の航跡
(各警戒線の名称、地点記号については前図参照)

◎タタタ・・で知られる 「信濃丸」の活躍

▽「信濃丸」戦時日誌における発見時の様子

バルチック艦隊発見前後の様子の詳細は後に航跡図でも示すが、取り敢えず図10・27における③の一八六地点から二〇三地点までの様子を「信濃丸」戦時日誌を元に簡単に記しておこう。

(戦時日誌の詳細は附録36にある)

五月二十七日午前二時四十五分、一八六地点付近に達したとき、左舷方向にほぼ同航する一隻の汽船の燈火を発見した。

三時五十五分になったとき、汽船のマストに白・赤・白の三燈が連携されるのを認めた。

「信濃丸」はこの汽船の東側に位置しており、月が東の空に有って、汽船を確認することが困難で、かつ汽船からこちらを見るのは容易だと考えられたため、汽船の西側に出て船種を確認しようと速度を増した。

四時三十分になって汽船の左舷に出てようやく船形が見えるようになり、三つのマストと二つの煙突が認められてロシアの仮装巡洋艦「ドニエープル」と同型と思われた（後に病院船「アリヨール」だと分かった）。

そこで甲板にある筈の備砲を確認しようとしてさらに接近し、四時四十分になって三〇〇メートルにまで近づいたが砲台は見えず、病院船だろうと想像したとき、彼等は「信濃丸」を味方と見間違つて電気手旗信号で両手に白灯を持って吾々の受信符と同じ符号で起信してきた。

これは赤白を用いる日本式の電気手旗とは異なるので疑念が深まり、病院船が一隻だけで航行する筈は無いので、濛氣濃厚で遠望不能の中、周囲を凝視したが、異常は認められなかったので、臨検に着手しようとした。

まさにそのとき、「信濃丸」の艦首から左舷に至る一五〇メートル（〇・八海里）のあたりに十数隻の艦隊を見つけ、さらに数条の煤煙を見つけた。

これは「信濃丸」が敵艦隊の列の間に突入してしまつてゐることを意味していたので、直ちに列を離れるよう転舵し、同時に無線電信で「敵艦隊の東航しつつあること」を報告した。

さらに彼等の針路が東北東で対馬東水道に向かつていると思われたので、その旨を無電で報告した。

この間しばしば敵の無電によつて電波妨害を受けた。このときの地点が有名な二〇三で、図10・27に示してある。

最初の打電まで実に慎重だったが、先の「佐渡丸」の教訓があるので、危険を冒して接近し、敵艦隊であることを一〇〇パーセント確認するまでは電波を出さなかつたのである。

五時二十分濛氣によつて煤煙を見失つたが、六時五分に再度敵艦隊が視界に入り、同様な進路で東航するのが分かつた。

このとき敵艦隊から二隻の駆逐艦が列を離れて右舷艦首から「信濃丸」に向かつてきたので、西方に避けたところ、二隻は追撃は中止した。

（当日の視界はせいぜい五海里程度だったらしい。こ

の後の「信濃丸」は敵艦隊を完全に見失い、敵と見たのはアメリカ汽船だったりして、バルチック艦隊とは離れた行動を取らざるをえなくなった。

▽「信濃丸」の無電（緊急信号）内容

前に記したように、「信濃丸」の戦時日誌は、無電の電文や打電時間については、かなり散文的な記述で、正確なところが分かりにくい。

以下に、他の資料と合わせた推定を記す。

推定においても、資料の信憑性が問題になるが、図10・28に、バルチック艦隊発見時点における「信濃丸」と周辺の艦との距離を示した。

この図を見ると、「笠置」を旗艦とする数隻の第三戦隊は北へ二〇海里、第六戦隊所属の「和泉」が東へ四六海里で、ともに無電が充分に届く距離に遊弋していたと判明する。また同じ仮装巡洋艦の「八幡丸」も三〇〜四〇海里で、比較的近傍にいた。

第三戦隊と「和泉」は、記録のしかたも精密であり、大いに参考になる。

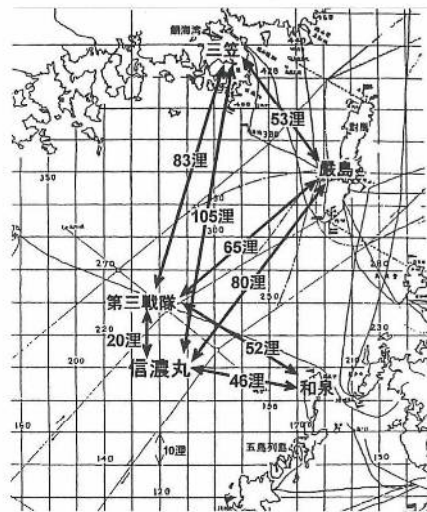


図10・28 バルチック艦隊発見時の信濃丸から三笠と各艦への距離

(他の多くの資料については、附録37および38にある。附録38には閲覧可能な資料にある無電記録のほぼ総てを記してあるので、この日払暁の無電送受に関心のある方はぜひ御覧頂きたい)

無電送受の記録紙には、電文終了時の時間を記入することになっていたらしいが、正確な時計がどこにもある時代ではなかったし、また一分単位で行動する

時代でもなかったので、命令や報告の数分の違いは違いには入っていなかったようである。

甲：〇四四五〇四四七

「敵艦隊ラシキ煤煙見ユ」

(ネネネネ)

乙：〇四五〇〇四五四

「敵の第二艦隊見ユ 地点二〇三」

(タタタタ (モ二〇三)「YR」セ)

丙：〇五二四〇五二七

「敵ハ對州東水道ヲ通過セントスルモノノ如シ」

(ヒヒヒヒ)

丁：〇六一〇

「敵艦隊十五隻以上目撃ス」

この時点での一字連送の暗号は附録33のMに示してあり、「信濃丸」はこれを忠実に打電していた。

無電には総て発信艦名を添えることになっていたし、甲乙のような緊急無電の場合には地点記号を付すことになっていた。

二〇三地点は(モ二〇三)、「信濃丸」発信は「YR」

セ・・・と暗号で打つ筈なので、甲・・・にはこの両方が電文に入っていた筈である。

このうち「YR」セは多くの受信艦が判別していたようだが、電波妨害や雑音や技術の未熟によって(モ二〇三)は届いたとは限らなかったらしい。

もう一つ困ったのは、中継に時間がかかり内容も不十分だったため、二〇三地点でバルチック艦隊を発見したのが何時だったのが「三笠」になかなか伝わらなかったことであった。

電波は瞬時に届くので、届いた時刻が発信した時刻なのだが、中継に手間取ると、何時に二〇三地点を通過したのが判断出来なくなるのである。

丙は必死で追跡したが濛気のため見失ったのでそれまでの判断を打電したものらしい。

また丁はいったん見失った敵艦隊を再発見した際の——敵駆逐艦に追われたときの——報告打電である。

▽「信濃丸」戦時日誌と艦長以下の陣容

以上、「信濃丸」の奮闘を同艦戦時日誌に基づいて記したが、その戦時日誌の当該個所の写真を図10・29に示した。

散文的という批判のある理由がご理解いただけるであらう。

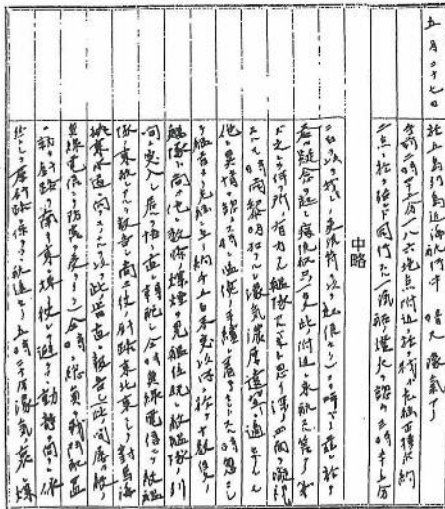


図10・29 信濃丸戦時日誌 (バルチック艦隊発見時の記録)

次に図10・30に、「信濃丸」艦長の成川揆大佐の肖像写真を示した。



図10・30 信濃丸艦長 成川揆大佐

成川艦長は安政六年に生まれ、海兵六期で明治十二年に卒業した。後の総理大臣・齋藤實と同期である。海兵の後海軍大学校に入学（甲種二期）し、明治二十三年に卒業した。

「扶桑」など多くの軍艦の艦長を歴任し、日露戦争では「金剛」の艦長として出征した。

明治三十八年三月十五日、「信濃丸」が海軍所属の仮装巡洋艦となるに及んで艦長となり、索敵哨戒に奮闘した。

日本海海戦後は六月十四日に「日本丸」艦長となった。後少将。大正八年没。

この成川大佐率いる「信濃丸」の主要メンバー丸橋・八戸三輪・前川・小森については前述した。

打電を担当した小森吉助は後少将だが、少将になった頃にバルチック艦隊発見時の思い出を詳しく書き残しており、戦後の昭和三十年にも、追憶を語っている。

▽聯合艦隊旗艦「三笠」の警報受信の様子

図10・28を見ていただければ分かるが、「信濃丸」から「三笠」までの距離は一〇五海里もあり、また「三笠」の停泊場所は島影であって、条件は悪かった。

「信濃丸」の無電機の場合は前に図示したが、大形客船なのでアンテナに困ることはなく、整備さえ良ければかなりの性能を持っていたであろう。

しかし、船の向きや無電機調整にもよるが、かろうじて八〇海里が当時の実力であり、一〇〇海里以上先の島影では、とうてい届かなかった。

對馬に待機していた「嚴島」までも八〇海里あり、簡単には届かなかつたらしい。

一方二〇海里ほど北の第三戦隊からは、「三笠」まで

は八〇海里を超えていたが「嚴島」までは六五海里ほどで、なんとか届いたらしい。

以上の距離的条件を頭に入れて「三笠」の無電記録を読むと理解しやすい。

「三笠」の戦時日誌には次のように記録されている。

◇〇五〇五 嚴島↓三笠

「敵ノ第二艦隊見ユ」

◇〇五〇五

（嚴島ヨリ敵第二艦隊見ユノ無線電信ニ接シ直ニ至急点火、出動準備ヲ為ス）

◇〇五五五 秋津洲↓三笠

「敵ハ對州東水道ヲ通過セントスルモノノ如シ」

◇〇六〇五

（抜錨 出艦 加徳水道ヲ経テ湾外ニ向フ）

◇〇六〇七 嚴島↓三笠

「敵艦隊午前五時、北緯三十三度二十分、

東経百二十八度十分」

◇〇六四五 信濃丸↓三笠

「敵艦隊十五隻以上目撃ス」

「敵ノ第二艦隊見ユ(乙)」の発信は〇四五〇くなので、それが「嚴島」經由で「三笠」に届いたのは一分五秒後であり、かなり迅速だった。

ただし最初の「敵艦隊ラシキ煤煙見ユ(甲)」は中継されなかつたらしい。

また「・・・東水道・・・(丙)」という重要情報は、

発信が〇五二四くなので、三〇分後にJ E地点附近にいた「秋津洲」が中継して届いたことがわかる。

三〇分もしてからだが、届いていない事が推理されたので改めて「秋津洲」が打電したのであろう。

「敵艦隊十五隻・・・(丁)」は「信濃丸」から直接「三笠」に届いたらしいが、このときはすでに「三笠」は配下を従えて加徳水道を出ていたし「信濃丸」も北上していたので、電波が届き易かつたのであろう。

実は、対馬にいた「嚴島」から「三笠」への〇五〇五の中継の前に、「笠置」率いる第三戦隊が即刻次のように「三笠」へ中継したが、それはどうやら届かなかつたらしい。

◇〇四五〇の直後 第三戦隊↓三笠

「敵ノ第二艦隊見ユ 二〇三地点」

これを「三笠」が受信した記録は無いのだが、注目されるのは、この電文には二〇三地点が明示されていることである。

これは、「信濃丸」の最初の無電に二〇三地点が示されていたことを意味しており、かつこの中継無電が「三笠」にも「嚴島」にも届いていなかったらしいことも意味している。

多くの資料から推察すると、「信濃丸」の警急信号をもっとも正確に受信していたのは、J I地点を哨戒していた第三戦隊の各艦と、宇久島付近にいた「和泉」だったようである。

なお警急信号の発信艦が「信濃丸」であることは、どの受信艦も把握していたらしい。

右の電文列は「三笠」の受信だけで、「三笠」から他艦への無電が不明なので、「三笠」の発信とそれへの応答を、いくつかの資料から抜き出してみる。

ここには第三戦隊による正確な受信の効果が、「三笠」

の質問への回答として現れている。

A ○五二〇 三笠↓厳島（山本英輔の記録）

「敵艦隊ノ位置ヲ示セ」

B ○五四三 厳島↓信濃丸&笠置（新高音羽戦時日誌）

「敵艦隊ノ位置ヲ示セ」

C ○六〇二 笠置↓厳島（音羽戦時日誌）

「敵艦隊二〇三地点午前五時」

D ○六〇六 厳島↓三笠（山本英輔の記録）

「敵艦隊二〇三地点午前五時」

E ○六〇八 信濃丸↓厳島（新高戦時日誌）

「敵艦隊二〇三地点午前五時」

対馬に待機中の第五戦隊旗艦の「厳島」から「敵艦隊見ユ」の第一報が「三笠」に入ったのは、○五〇五であった。

その一五分後に「三笠」が前記Aの無電を発したのは、発見地点が二〇三であるという情報が「厳島」から届いていなかったことを示している。

それから二〇分以上も経って、「厳島」は特務艦隊の「信濃丸」と第三艦隊旗艦の「笠置」にBの質問をし

たが、これは「厳島」が受信電文を再検討したが地点が不明確だったため、問い合わせの必要が生じたことを意味している。

このとき「信濃丸」と「笠置」の両方を呼び出しているのは注目に値する。

つまり、入った警急信号の発信元が、「信濃丸（YR）」とそれを中継した「笠置（AT）」である——とは認識できていたのである。

タタタタは判明し、それを打った艦名「YR」や「AT」は識別出来ていたが、電文中に必ず有る笠の（モ二〇三）は、受信紙を検討しても識別出来なかったであろう。

この「厳島」の問い合わせに対して「笠置」は二〇分後にCのような地点と時間を明示した返事を打電した。念のために検討して答えたのであろう。

これは明瞭だったらしく「厳島」は直ちに同じ内容を「三笠」に打電した（D）。

「厳島」の問い合わせは「信濃丸」にも届いていたよううで、直後に「信濃丸」からも同様の返信があった。

以上の記録から、聯合艦隊の主力が正確な「敵艦隊発見」の情報——午前五時に二〇三地点——を知ったのは、Dの〇六〇六で、「信濃丸」のタタタ・・から一時間以上経った後であったと判明する。

興味深いのは、二〇三地点という情報が「三笠」に届くよりも早く、「信濃丸」が発した「東水道通過」の情報「秋津洲」の中継（〇五五五）によつて届いていたことである。

おそらく「三笠」の幕僚たちは焦つたであろう。何時に何処で見つけたのが不明なうちに、對馬の東を通過しつつある——との報告が有つたのであるから・・・。

（なお「秋津洲」は第六戦隊の所属だが、この戦隊は特務艦隊と同様に分散して遊弋していたらしい。この日の早朝は旗艦の「須磨」と「千代田」は對馬の南端部におり、「秋津洲」は第四警戒線左部のJE地点におり、「和泉」はその反対側の宇久島近辺にいた）

* * *

以上を理解しやすくするために、図をいくつか示した。

図10・31は「信濃丸」の当日の航跡図で、同艦が戦後軍令部に提出した図を元にして分かりやすく描き直してある。

図10・32は無電中継に活躍した「笠置」と「嚴島」の艦影である。

図10・33～37は当日の無電記録の一部である。

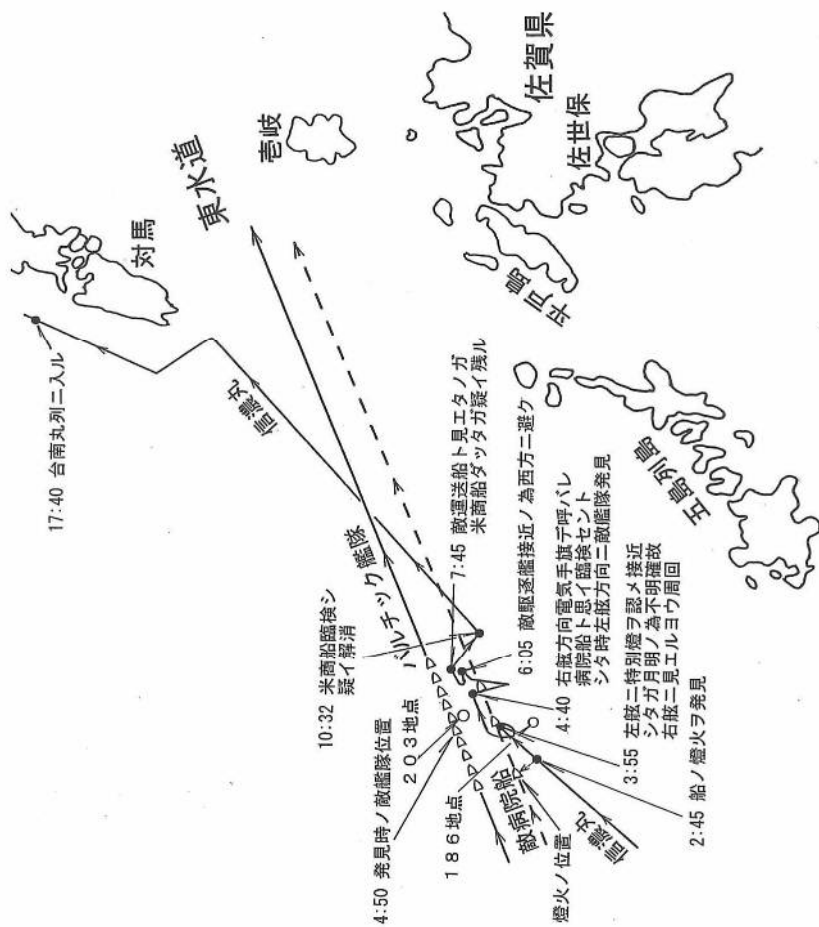


図10・31 哨艦「信濃丸」バルチック艦隊発見時の航跡図(原図に忠実に製図)

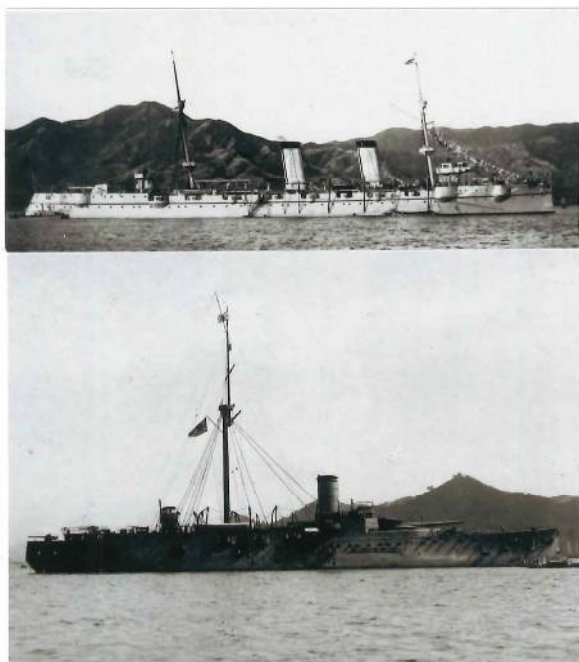


図10・32 無電中継に活躍した
笠置(上)と嚴島(下)
(嚴島の艦尾に四條線がかすかに見える)

五月二十日 土曜 西南西風 行五至
 正午 艦隊見
 海濱系了原集約の位置高ノ艦ノ動
 搖稍大ナリ
 厳密ノ敵才ニ艦隊見テ無線電信接
 直ニ至急命令ノ動揺傳ヘ高ノ
 全五ノ
 前後甲帆ノ積載ノ隊員石炭ノ中
 甲帆ノ積載ノ隊員石炭ノ中ノ
 依仗ス
 全六ノ五
 枝術生艦加徳水道ニ急行シ向テ素
 加徳水道ノ反約モナリ甲二才四戦隊五隊編
 聖徳隊水雷機隊 全新ノ兵出動ス
 全六一五
 厚達十三哩

明治三十八年五月廿七日戰鬥詳報
 一天候 天候晴ニモ蒙氣海面ニ薄帯ノ展望約五六海里風向ノ終始西南
 西ニテ風力四乃至五波浪ノ方向亦西南西ニシテ其高ノ四乃至
 至五艘体ノ動搖稍多シテ是ニ反航スルハ激浪ノ飛沫常
 ニ前甲板ヲ洗ヒタリテ刻前蒙氣漸ク減退シ風勢亦少シク最
 ハ却テ増大セリ
 二運動 午前五時五分嚴島無線電信ヲ以テ敵ノ第二艦隊見テテ報ス
 即チ直ニ總ニ至急命令ヲ出シ準備ヲナス 全非分十二
 尹砲復射ノ障害ヲクラフコトヲ恐レテ前甲板ニ積載セし石炭
 (積)ノ北上スルヲ用意ニ石炭ヲ消滅シテアリ 又前甲板及一甲
 板(積)ニシテ積載ノ水雷艇及小汽汽艇ハ台中丸ニ移シテ(總)全四
 ノ戰隊ニシテ汽艇ヲ残シテコト予定シテアリタリ 全五十五分分出港用
 針路不定ニテ加徳水道ニ向テ全十分合戰準備ヲ令シテ
 中甲板ヲ定メケル石炭ヲ炭庫ニ積殘余ノ計約三噸ヲ海中
 ニ棄却スルコト原速十五哩七時五分合戰準備整備セ

図10・33 5月27日最初の警急無電が「三笠」に届いた時の記録

時間	艦名	電文内容
五時	嚴島	敵第一艦隊見
五時五分	清洲	敵艦隊東水道ヲ通過セリ十九ノ如シ
六時	嚴島	敵艦隊ヲ南東北落度全東無電ヲ受テ十分
六時五分	嚴島	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七時	嚴島	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七時五分	嚴島	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十一時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十一時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十二時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十二時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十三時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十三時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十四時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十四時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十五時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十五時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十六時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十六時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十七時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十七時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十八時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十八時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十九時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
十九時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十一分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十二時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十二時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十三時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十三時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十四時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十四時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十五時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十五時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十六時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十六時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十七分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十八時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十八時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十九時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
二十九時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十一時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十一時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十二時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十二時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十三時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十三時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十四時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十四時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十五時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十五時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十六時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十六時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十七時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十七時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十八時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十八時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十九時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
三十九時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十一時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十一時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十二時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十二時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十三時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十三時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十四時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十四時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十五時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十五時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十六時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十六時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十七時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十七時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十八時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十八時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十九時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
四十九時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十一時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十一時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十二時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十二時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十三時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十三時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十四時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十四時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十五時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十五時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十六時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十六時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十七時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十七時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十八時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十八時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十九時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
五十九時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十一時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十一時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十二時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十二時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十三時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十三時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十四時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十四時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十五時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十五時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十六時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十六時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十七時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十七時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十八時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十八時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十九時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
六十九時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十一時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十一時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十二時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十二時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十三時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十三時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十四時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十四時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十五時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十五時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十六時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十六時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十七時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十七時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十八時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十八時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十九時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
七十九時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十一時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十一時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十二時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十二時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十三時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十三時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十四時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十四時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十五時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十五時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十六時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十六時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十七時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十七時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十八時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十八時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十九時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
八十九時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十一時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十一時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十二時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十二時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十三時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十三時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十四時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十四時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十五時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十五時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十六時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十六時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十七時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十七時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十八時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十八時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十九時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
九十九時五分	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス
一百時	和泉	敵艦隊十五隻以上目撃ス

図10・34 明治38年5月27日午前「三笠」が感受した無線電信

時	刻	受信機	受信機	信	文
午前	四四五	信濃丸	旗	敵艦隊ヲ、煤煙見。	
同	四五〇	右	同	敵ノ第一艦隊見。敵艦隊100。	
同	五〇五	島三	笠	敵ノ第二艦隊見。	
同	五五五	秋津洲	同	對テ東水道ヲ通過シトスルモノ、如レ	
同	六〇七	島	同	敵艦隊午前五時北轉二十三度、十六分至百十八度、分	
同	六四五	信濃丸	同	敵艦隊十五時以上離ス	
同	七二四	島	同	第五艦隊降参ニ向フ	
同	七三〇	同	右	敵艦隊十一時以上、シムナチヲ、先頭後部諸艦、夏	
同	八〇〇	和	同	第三艦隊(第一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百)	
同	八三〇	笠	同	第三艦隊(第一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百)	
同	八三五	和	同	第三艦隊(第一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百)	
同	八五〇	笠	同	第三艦隊(第一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百)	
同	九五〇	和	同	第三艦隊(第一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百)	
同	一〇〇五	島	三	敵ハ東水道ヲ通過シトスルモノ、如レ	
同	一〇一七	右	同	第三艦隊(第一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百)	

五月二十七日拂曉、對馬海峽、敵機降参ニ從事申テ、假使巡洋艦隊(信濃丸カ、二〇三)地盤(三十三)至三時、敵艦隊(二十八)ニ於テ、敵ノ増援艦隊ノ北行スルヲ發見スルヤ、直ニ無線電信ニ依リテ、敵ノ全艦隊ニ傳ヘ、次テ巡洋艦和泉モ亦之ヲ發見シ、總ニス敵艦隊ニ隣接シテ其ノ行動ヲ監視シ、時々期々詳細ノ敵情ヲ報告ス、東郷聯合艦隊司令長官ハ、當時機海將ニ在リ、四面圍氣深クシテ、腹蓋五連以外ニ及ハサルモ、之ニ依リテ總ニス敵情ヲ知悉シ、未ダ之ト會セサルニ、既ニ其ノ隊形、所在並ニ進航方向ヲ詳ニセリ、當時我カ艦隊諸艦ノ間ニ交換シタル主要ノ信文ハ即チ左ノ如ク、

図10・35 軍令部が纏めた日本海海戦主要無電

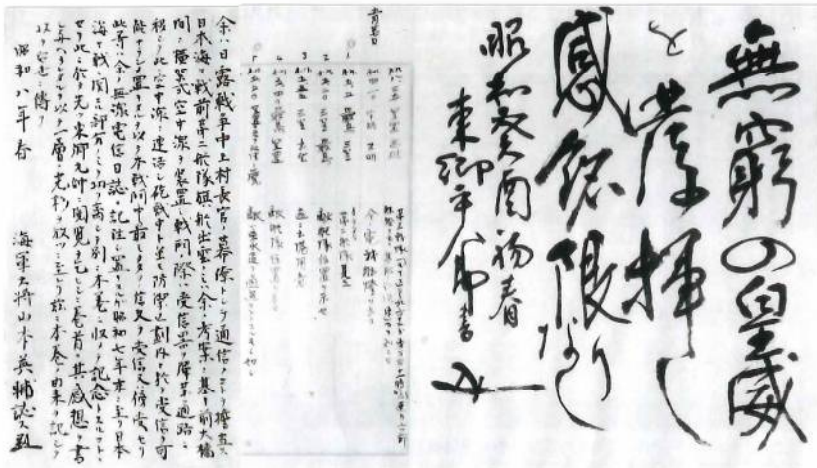


図10・36 山本英輔が「出雲」艦内で受信した無電記録の一部 (表装され東郷元帥の揮毫を受けて記念艦三笠に寄贈された)

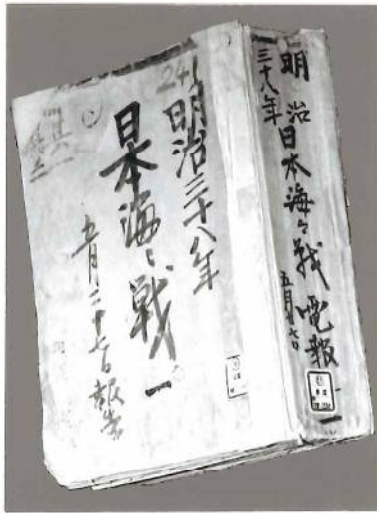


図10・37 軍令部が無電望楼から
受けた報告を纏めた冊子

十・五

「信濃丸」以上の活躍をした
「和泉」の決死の觸接航行

◎ 「信濃丸」が見失ったバルチック艦隊を再発見した「和泉」、

艦隊を再発見した「和泉」、
執念の追跡¹

「信濃丸」がバルチック艦隊を見失つてからの追跡と的確な敵位置の判断・報告は、第六戦隊に属する三等巡洋艦「和泉」の功績であり、戦後に「信濃丸」とともに表彰を受けたのは当然であった。

「和泉」の航跡を理解するためには、「信濃丸」が敵艦隊を発見した時点における日本側の各艦の位置と状況

を見ておく必要がある。図10・26を参考にしつつ、概観しておく。

バルチック艦隊と激突すべき聯合艦隊の主要戦力は第一戦隊で、東郷平八郎や聯合艦隊幕僚が集まっていた。

それは、旗艦「三笠」、敷島「富士」「朝日」の四戦艦と、「春日」「日進」の二隻の新鋭一等巡洋艦からなっており、鎮海湾に待機していた。

この第一戦隊と並んで主要戦力としたのが第二戦隊で、「出雲」「吾妻」「常磐」「八雲」「浅間」「磐手」の六隻の一等巡洋艦からなっていた。

第二戦隊の司令官は有名な島村速雄で、その属する第二艦隊の司令長官は上村彦之丞であった。上村は「出雲」に座乗し、無電開発と応用に貢献した山本英輔は上村に従っていた。島村が乗っていたのは「磐手」だった。

この他に第一第二戦隊を補助する第四戦隊があり、それは「浪速」「高千穂」の二等巡洋艦と「明石」「對馬」の三等巡洋艦からなっていた。

これにさらに夜襲用などの駆逐艦隊や水雷艇隊が属

していた。

これらはいずれも鎮海湾の入口近くに待機して、バルチック艦隊が発見されれば直ちに攻撃できるように準備していたわけである。

それ以外の戦隊は各海域に分散して待機したり遊弋したりしていたが、重要な對馬には「嚴島」「鎮遠」「松島」「橋立」の四隻の二等巡洋艦からなる第五戦隊がおり、主として浅茅湾に待機していたようである。

この艦隊が受信した警報を對岸にいる第一戦隊「三笠」に中継したのである。

對馬と鎮海湾の間は第一警戒線でも分かるようにきわめて重要な関所であり、このあたりに「扶桑」「高雄」「筑紫」「鳥海」「摩耶」「宇治」という旧型の小型軍艦を集めた第七戦隊が遊弋していた。

ただし「宇治」は五島列島付近におり、「扶桑」は對馬北端におり、ある程度はらけて警戒遊弋していたようである。

一方、二等巡洋艦「笠置」「千歳」、三等巡洋艦「音羽」「新高」からなる第三戦隊は、第四警戒線のあたり

を遊弋しており、「佐渡丸」誤報事件の際の的確な指摘や「信濃丸」の警急信号の確実な中継で貢献した。

この戦隊の戦時日誌は多くの正確な資料が有つて貴重である。

以上の他に「須磨」「千代田」「秋津洲」「和泉」という小型の三等巡洋艦からなる第六戦隊があつたが、これは一個所には集まつておらず、「秋津洲」は第四警戒線のJ E地点、「須磨」と「千代田」は對馬の南端部近くを遊弋して警戒に当たり、本項の主人公である「和泉」は五島列島の北端あたりにいた。

附属特務艦隊の仮装巡洋艦群が第六と第四警戒線のあたりに展開して必死で索敵航行していたことは、何度も記した通りである。図に「信濃丸」の他に「佐渡丸」「滿洲丸」「八幡丸」「アメリカ丸」などの名が見える。

*

さて、「和泉」の航跡を辿ることにしよう。

資料は図10・38に写真を示した和泉戦時日誌である。

二十七日濃霧アリ波浪高シ風向南西カ三乃至四
 午前四時四十分信濃丸ヨリ敵艦隊ヲ見
 煙ヲシキキ見エ電アリ次ヲ四時五十二分
 二。三地点敵艦隊見エ同五時二十七分敵
 ハ東水道ヲ通過セントスルモ如シ艦
 接レ本艦ニ北緯三十三度二十分東経百
 二十九度五十三分位置ヨリ敵艦為
 西北西ニ針路ヲ定メテ進航シ午六
 時北緯三十三度二十分東経百二十八度
 四十分位置ニ達シ北ニ交針又六時四
 十分東経百二十八度五十分北緯三十三
 度三十分附近ニ於テ敵艦隊先頭ヲ右
 舷艦首ニ後方部隊ヲ為シ高敵ヲ行動
 首ニ認メ合戦準備ヲ為シ高敵ヲ行動
 注意シ再後ノ波ヲ決セントス時ニ七時
 冷信濃丸ヨリ濃霧ヲ為シ敵艦隊ヲ見エ
 煙アリ次ヲ六時三十分信濃丸次ヲ以テ敵
 ト報告ヲ維持セラル可クナル境遇ナリシ

図10・38 和泉戦時日誌
 (バルチック艦隊発見時の記録)

また艦影を図10・39に示した。主マスト頂上に無電アンテナ用のガーフが見える。

「和泉」は日清戦争のためにチリから購入したイギリス製の軍艦で、三等巡洋艦に類別されていたが、当時の三等巡洋艦というのは、大きさは三〇〇〇トンでし

がなく、後の駆逐艦より小さかった。攻撃力も防護力も大きなものではなく、嵐に耐える力も少ない。主として哨戒索敵に用いられたのは当然のことである。



図10・39 バルチック艦隊に食い下がって正確な通報を三笠に送り続けた「和泉」
 (マスト頂上に無電アンテナ用ガーフが見える)

属する第六戦隊の司令官は東郷正路少将で旗艦「須磨」に乗っており、参謀には吉田清風少佐（のち中将）

・筑土次郎大尉（のち少将）がいた。

ほぼ独立して哨戒に当たっていた「和泉」の責任者・艦長は石田一郎大佐（のち少将）で、冷静沈着な軍人だったらしい。

実は五月八日までは池上小次郎大佐が艦長だったが、病気のため横須賀鎮守府付けとなり、換わって「千早」艦長だった石田が「和泉」の艦長となった。着任したのは五月十四日とされているので、まさに直前の交替であった。

戦時日誌担当や無電担当ははっきりしないが、石田艦長の勇敢で緻密な個性が大きく影響していたようである。

石田一郎艦長は文久二年十一月に生まれ、海兵を出て日清戦争では水雷艇長として活躍、日露戦争開始時には通報艦「千早」の艦長として出征。

のち「和泉」の艦長となって活躍した。

戦後は舞鶴水雷団長、佐世保水雷団長などを歴任し、退役時は少将。

昭和九年一月没。

さて、戦時日誌に見る「和泉」の航跡だが、五月に入ってから浅茅湾で炭水を補給しつつ、主として對馬の近海を遊弋して警戒に当たっていたようである。五月二十七日までの様子を日録風に記す。

○明治三十八年五月四日

山陰近くで商船を臨検した。

この時、マストで見張っていた兵卒が落下して死亡するという事故が起こった。

○明治三十八年五月八日

艦長の池上小次郎大佐が重い病気になり、横須賀鎮守府付きとなって療養することになった。

○明治三十八年五月十一日

早朝、豆酸崎で艦砲射撃の訓練。

○明治三十八年五月十二日

夜中に訓練を行った。またこの日、ウラジオのロシア艦隊が出撃した疑い有りとの報があった。

○明治三十八年五月十三日

見島の北西でイギリス商船を臨検した。

○明治三十八年五月十四日

病氣療養の池上大佐に代わって、「千早」(第二艦隊の通報艦)の艦長だった石田一郎大佐が本艦艦長として着任した。

人間の運命は分からないもので、この突然の人事異動によって、通報艦という地味な仕事をしてきた石田大佐が、異動直後に敵艦隊発見追跡という大手柄を立てることになった。

○明治三十八年五月十七日

射撃訓練をおこなった。

(訓練以外の時はすべて對馬近海の哨戒である)

○明治三十八年五月十九日

陸上で小銃射撃訓練をおこなった。

○明治三十八年五月二十二日

早朝、對馬と山陰の間で臨検をなした。

○明治三十八年五月二十三日

前日と同じ海域で早朝に臨検した。

午後炭水補給をしたが、敵艦隊が近づいたとの情報を受けた。これは前述した森格からの通報が伝達されたものらしい。

○明治三十八年五月二十五日

この日、またロシア艦隊についての情報がもたらされ、いよいよ決戦が近づいたと感じられた。

○明治三十八年五月二十六日

この日は天候が悪く波浪は高かった。

日本海海戦の前日だが、それまで對馬の周辺海域の哨戒が主任務だった「秋津洲」と「和泉」に対して、朝九時に第六戦隊の旗艦「須磨」から次のような重要な命令が下された。

図10・25の海域哨戒の図を見ながらお読み頂きたい。

「秋津洲」は直ちにJ・E地点に向かえ。

「和泉」はJ・U地点に至り、命あるまでその地点附近において南方を警戒せよ。

なお第三戦隊はJ・I地点に配置される筈である。

海図ですぐに分かるように、J・U地点は對馬よりかなり南方で第四警戒線の五島列島よりであり、翌日バルチック艦隊が通過した航路に近い。

「和泉」は九時十五分には出港して目的地に向かったが、この日は悪天候だったため、夜間の哨戒は無理で、十八時四十分には近くの神ノ浦に避泊した。

神ノ浦は、五島列島北端の宇久島の南西部にある小さな港である。

◎ 「信濃丸」が見失ったバルチツク艦隊を再発見した「和泉」、執念の追跡2

◇明治三十八年五月二十七日（一九〇五年）

さて、いよいよ日本海海戦の当日、明治三十八年五月二十七日になった。

この日も濛気があり波浪が高かったが、風はさほどではなかったらしい。

「和泉」は早朝四時三分には抜錨して神ノ浦を出て、命令されたJU附近へと向かった。

そしてその途中、四時四十七分に、「信濃丸」からの最初の無電「敵艦隊ラシキ煤煙見ユ（ネネネネネ）」を傍受した。

さらにその数分後に「信濃丸」からの次の無電「敵

の第二艦隊見ユ 地点二〇三（タタタタタ）」を受信した。

この時の「和泉」の緊張はただならぬものがあつたであろう。

「和泉」はなおも直進したが、二〇三地点は命令されたJU地点に比較的近いので、この無電によって航路を変更する必要は無かつたと考えられる。

このあと五時二十七分になって「信濃丸」からの「敵ハ對州東水道ヲ通過セントスルモノノ如シ（ヒヒヒヒヒ）」を受電した。

「和泉」の無電機が「信濃丸」の発信電波をすべて明瞭に受信していたと分かる記録である。

ここからは有名な「和泉」の活躍になるが、後に「和泉」が軍令部に提出した詳細な航跡図が残されているので、それを分かりやすく書き直した図10・40をご覧ください。

図に書き込まれた説明文も詳細だが文字が小さくて読みにくいので、図中にアルファベットの記号をつけて、本文中に記述した。

航跡図と以下の記述とを合わせて見て頂きたい。

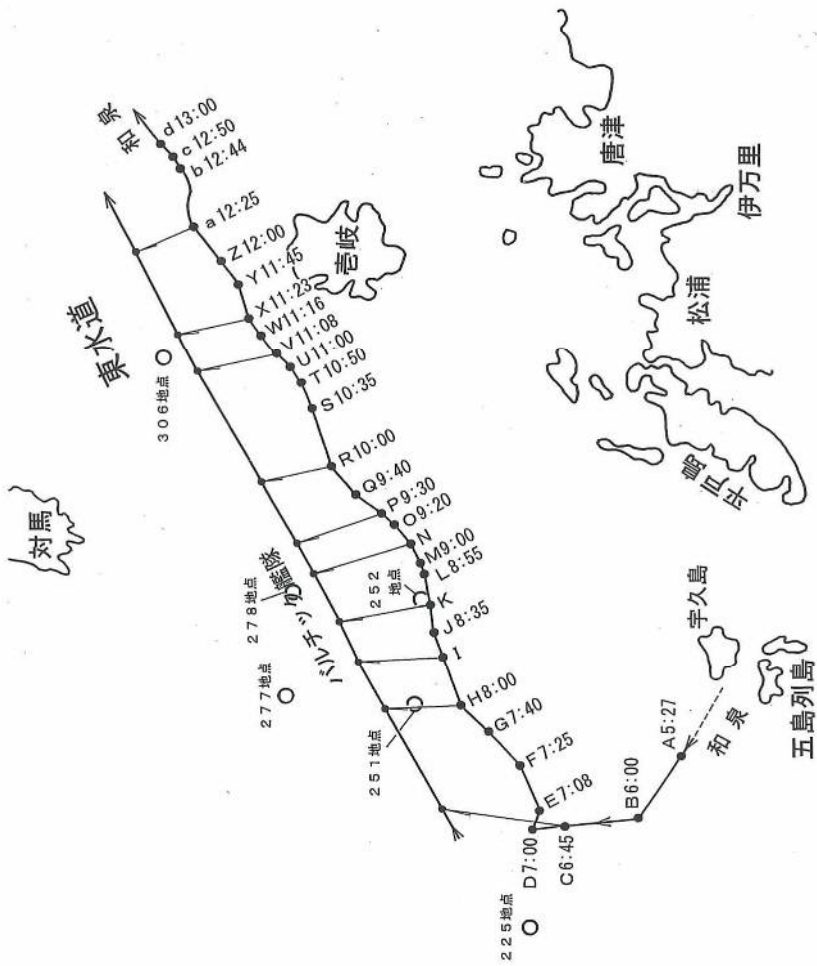


図10・40 哨艦「和泉」バルチック艦隊触接追尾時の航跡図(原図に忠実に製図)

() 内は筆者の補足説明である。

*

A 五時二十七分

信濃丸電、敵ハ對州東水道ヲ通過スルモノノ如シ
(前述のもの)

B 六時

(記述なしだが、この地点で航路を少し変更した
ことが図からわかる。この変更はおそらく、「信
濃丸」からの無電によって敵艦隊位置を推理し
た結果であろう)

C 六時四十五分

敵艦隊煤煙ヲ認ム

(敵位置の推定が正しかったようで、このC地点
で煤煙を認めた。図の矢印の方角である)

D 七時〇分

本艦発電、敵ハ午前七時二二五地点ニアリ針路北
東五隻以上見ユ

(これが「和泉」としての最初の無電発信だった。

二二五とは図の左よりの丸印である。このあた

E 七時〇八分

七時八分信濃丸発電、濛氣アリ見失フ

(「和泉」が「信濃丸」の無電の全てを明確に把握
していたと分かるが、この無電傍受によって、
その時点で敵艦隊を認めているのは自艦しか無
いと分かり、犠牲を覚悟で敵艦隊の航路に沿っ
て進み、情報を「三笠」に送り続けることを決
意したと言われる。敵艦隊と併走しようと針路
を変えたことがわかる)

F 七時二十五分

本艦発電敵艦隊十一隻以上「ゼム」型先頭後尾二
病院船二隻地点二二五

(この時点になると十一隻の敵艦を認めて報告し
ている。「信濃丸」が敵艦隊を見失ったので、い
まや目視しつつ追跡しているのは「和泉」のみ
になり、決死の覚悟で食い下がっていた)

G 七時四十分

須磨ヨリ電、豆殿埼ニ来レ

〔須磨〕は「和泉」が属する第六戦隊の旗艦で、

この日の早朝は對馬南端の豆殿埼附近を遊弋警戒していたらしい。そのためバルチック艦隊の接近を知って艦隊の統合を図ろうとしたのである。しかし「和泉」は自艦の立場をよく認識していたので、独自の判断をして命令とは別の行動を取り、敵艦隊に食い下がり続けた)

H
八時〇分

七時五十三分本艦発電、敵ハ二七七地点針路北東
微東速力十二浬

八時五分嚴島ヨリ電、敵艦隊ト觸接ヲ保テ

(二七七地点は書き間違いで、実際には二二七または二五一地点だったらしい。敵の針路と速度という重要情報を報告している。八時五分の「嚴島」からの命令は「和泉」の行動の追認だが、第六戦隊が所属する第三艦隊全体の旗艦である「嚴島」が現状を把握して現在の「和泉」の行動を認める命令を発したのである)

I
八時三十五分
(位置は図で判明するが時間や記事はない)

本艦発電、「ジエムチウグ」單獨ニテ前進ス針路東
二五一地点

〔ジエムチウグ〕はバルチック艦隊の主力ではなく巡洋艦隊に属する三〇〇〇トン級の巡洋艦で、これだけが別の針路を取ったらしいと判断している)

K
(位置は図で判明するが時間や記事はない。二

五二地点である)

L
八時五十五分

八時五十三分本艦発電、敵艦隊二七七地点ノ南東
ニアリ針路東北東

(後の図と見比べて、極めて正確に敵位置と針路を把握していたと判明する無電発信である。なお発電の時間が分単位で記されていることに注意。綿密に記録を取っていたことが分かる)

M
九時〇分

(記事なし)

N
(位置は図で判明するが時間や記事はない)

O
九時二十分

嚴島発電、敵ノ兵力如何

(第三艦隊旗艦「嚴島」は聯合艦隊旗艦「三笠」

との連絡を務めていたので、これは「三笠」に知らせるための質問だったであろう。

P 九時三十分

本艦発電、九時半敵ハ二七八地点の南方ニアリ針路北東微東我レ二五二地点ノ東方

(後の検討でこの無電もかなり正確だったと分かる。この頃から對馬附近を遊弋していた第三戦隊旗艦「笠置」からの無電が入り始めるが、それが「和泉」の報告と微妙にずれしており、「三笠」の参謀秋山眞之らは困惑したらしい。「和泉」の情報では「笠置」も敵艦隊を監視する筈なのにならぬ。「見えない」と報告したからである。ぎりぎり「和泉」が正しいと判明したと言われる。)

Q 九時四十分

須磨ヨリ発電、我レ三〇六地点ニ向フ
(「和泉」が属する第六戦隊の旗艦「須磨」が事態を把握して合流しようとしていたことが分かる)

R 十時〇分

九時五十三分本艦発電、敵ノ兵力戦艦五、一等巡洋艦〇二等巡洋艦三隻、駆逐艦〇水雷艇〇其他ノ

艦船八隻以上ハアリ総数二十二隻以上濛氣ノ爲メ判明セス

(かなり詳細だが、この少し後で、さらに驚くほど詳細な索敵報告を打電している)

S 十時三十五分

(記事なし)

T 十時五十分

十時五十一分本艦発電、敵ノ兵力右翼列「ボロヂノ」型四隻「オスラービヤ」「シソイウエリーキー」「ナワリン」「アドミラルナヒーモフ」左翼列「アドミラルセニヤーウイン」型三隻「ニコライ一世」「オレーグ」「アウローラ」ノ順序ナリ「ジエムチウグ」型前衛後続部隊假裝巡洋艦

(十一時近くに発信されたこの無電が、「和泉」のみならず全ての通報の中でもっとも詳細な敵情報告であり、「三笠」の参謀は大助かりだったであろう。なおロシア艦隊の艦船名やトン数について、付録17を参照されたい)

U 十一時〇分

(記事なし。この時点から十二時過ぎまでで壱岐のすぐ傍(北西)を通過した)

V 十一時八分

第三共國丸避難

(民間の船は実情が分からないので航行しており、それらを退避させるのも索敵艦の仕事だった)

W 十一時十六分

嚴島發電敵ノ主力ハ右翼ナリヤ

(これは、「三笠」からの質問を「嚴島」が中継したのであろう。「信濃丸」以後の一連の無電の往来を見ると、「三笠」と密接に連絡していた「嚴島」の首脳部は、現状を正確に把握していたとは思われない)

X 十一時二十三分

本艦發電、左様右翼ノ先頭ト思フ

(直ちに的確な返答をしている。敵情視察に自信を持っていたと分かる)

Y 十一時四十五分

本艦發電、午前十一時半先頭艦三〇六地点ノ北東ニアリ針路北東微東

Z 十二時〇分

(記事なし)

a 十二時二十五分

本艦發電敵艦隊正午若宮島ノ北十二湮針路北東微東

(これは重要な情報であった。「和泉」からの通報とは違う通報が別の艦からあり、「三笠」の参謀室は混乱していたが、それは各艦が自艦位置を正確には把握していなかったからである。若宮島は寺岐の北端の小さな島で、この島名が明示されたことよって、「三笠」首脳にも位置の確定ができたのである)

b 十二時四十四分

土陽丸ヲ避難セシム

(前掲参照)

c 十二時五十分

鹿児島丸ヲ避難セシム

d 十三時〇分

(記事なし)

*

図10・40に記した時点(記号)はこれで最後だが、「和泉」の報告航跡図にはまだ先があり、夜の八時二十分

までの位置が示されている。

しかし一時以後の航跡は蛇行したり円弧を描いたり
で複雑であり、描きにくいので図40では省略した。

以下は、原図と戦時日誌の双方を元にして、「和泉」
の活動を大まかに記す。

◎「信濃丸」が見失ったバルチック

艦隊を再発見した「和泉」、

執念の追跡3

e 十四時十分

(記事なし。ロシア艦隊が砲撃を開始したのが十
四時七分、日本側が砲撃を開始したのが同十分
とされているので、これはまさに日露主力が激
突した時間であった。この時「和泉」は、ロシ
ア艦隊を追って、沖ノ島の南西五裡ていどの位
置に達していたようである。すなわち主戦場の
やや南方至近距離の海域である)

f 十四時二十分

(記事なし。ただし航跡図では十分から二十分ま

での間、円弧を描きつつ南東に向かいながら、
砲撃をしていたと分かる。位置からいって、ロ
シア艦隊の後部や遁走を計る艦船を攻撃したの
であろう)

g 十四時四十八分

本艦発電(須磨へ)其隊ノ位置及ヒ針路ヲ示サレタ
シ

(第六戦隊の旗艦「須磨」との合流を目指してい
たと分かるが、航跡は大きな円弧を描いて東か
ら北西へと向かっている。そして砲撃を再開し
ている。おそらく逃走を図る残敵を阻止しよう
としていたのであろう)

h 十四時五十五分

須磨ヨリ我レ戦闘地ノ西ニアリ適宜ノ運動ヲ爲セ
(「須磨」からの返信無電によって、沖ノ島を挟ん
で「三笠」ら主力の反対側に「須磨」がいたと
分かった。航跡図によって、砲撃を続けたと分
かる)

i 十五時十八分

三時十八分須磨ヨリ我レ沖ノ島ノ北西十裡ニアリ

針路南南東

(この無電で「須磨」の位置が明確となり、「和泉」は再度円弧を描いて「須磨」への接近を計った)

j 十五時四十五分

和泉列二入ル

(ようやく所属の第六戦隊に合流したと分かる。

この時点前後の「和泉」は西から東へ一直線に航行していた。戦時日誌には次のように記されている)

十五時四十六分、沖ノ島の西北西五浬で第六戦隊に合し、「須磨」「千代田」「秋津洲」「和泉」の順に並び、十六時四十分から敵に射撃を開始。十九時十分、射撃を止む。

k 十六時〇分

(記事なし。以下同様)

l 十六時三十分

(針路を北に変えて、日本側主力艦隊からの逃走を図る残敵を追う航跡となったことが判明する)

m 十六時三十二分

(砲撃を続けた。針路は西から東へ向いている)

n 十六時四十五分

o 十七時〇分

(東へ向かいつつ砲撃を再開)

(いったん砲撃を休止。敵艦隊の主力は艦列を乱しつつ沖ノ島の北へ向かっており、「和泉」らもそれを追っていた)

p 十七時十分

(東北東に向かいつつ砲撃を開始)

q 十七時十五分

(砲撃を一旦休止し北へ向かう)

r 十七時三十三分

(北方へ向かっていたが、ここで急反転して南西に向かい、また暫くして北北西に向かった。残敵を各方面で発見したからであろう)

s 十八時〇分

(ここでまた針路を九〇度変えて南西に向かいつつ砲撃を開始した)

t 十八時十三分

(いったん砲撃を中止し、針路を北へと向けた)

u 十八時二十五分

(北へ向かいつつ砲撃を再開。この海域は夕刻に敵艦隊の主力が列を乱しながら航行していた場

所で、手負いの敵艦があちこちにいたのである
う)

v 十八時三十五分

(この時点で砲撃を中止し、その後円を描くように時計回りに一周)

x 十八時五十分

(この時点で針路を北へ変えて、砲撃を再開した)

y 十九時〇分

(砲撃を続けつつ針路を北北東から北北西に変化)

z 十九時十分

(この時点で砲撃を中止し、以後この日は砲撃はしなかったことは、先の戦時日誌の通りである)

α 十九時五十分

(砲撃を中止してからも北方へ逃げた敵艦を捜して針路を北北西にとって進んだ)

β 二十時二十分

(この時点で針路を北北西から真北に近く変えたようである。位置は對馬の北端部から東へ三〇哩ほどである。ウラジオ方面に逃げようとする敵敵を追ったのである)

(十六時四十分の敵艦隊の位置として、v w xの

あたりが地図で示されており、その周辺に「コレア型(運送船)」「カムチャツカ(工作船)」「ボロゾノ型(戦艦)」などの敵艦名が記されている。これらを追撃していたことが分かる。

*

日本海海戦の解説は、そのほとんどが聯合艦隊の主力である第一第二戦隊を中心に書かれているので、索敵を担った「信濃丸」や「和泉」の航跡を基準とした解説は珍しいと考え、やや詳しく記した。

「和泉」の戦時日誌には、大海戦の翌日や翌々日の行動も記されているので、簡単に引用しておく。

◇明治三十八年五月二十八日(一九〇五年)

四時三十分、艦首に鬱陵島を見た。

無電で敵艦発見の報がいくつか傍受された。

八時五十五分、敵艦四隻と駆逐艦一隻を発見した。

九時十分、敵艦は無電妨害をした。

第六戦隊(「和泉」が属する戦隊)は第五戦隊(「嚴島」が率いる戦隊)とともに敵を追跡し左翼を包囲し

て砲撃した（至近距離なので百発百中だった）。

右翼は第一第二戦隊が包囲し砲撃を加えた。

十一時十四分、敵艦隊は降伏した。

一時四十分、降伏艦隊の近くに漂泊した。

十五時四十五分、「三笠」から「嚴島」へ、第五第六戦隊は尾崎（對馬の母港）に戻って對馬海峡の警備をせよ——との命令が下ったので、帰途についた。

十八時三十分、西北西に煤煙が見えたとの通報があり、「和泉」らはこれに向かった。

十九時十三分に敵を見つけた。第四戦隊が交戦していた。

二十一時十五分、駆逐艦が近づいたが暗号によって味方であると判明した。

◇明治三十八年五月二十九日（一九〇五年）

六時、東方に煤煙を認め、追尾のため第六戦隊が向かったが、七時五十分、味方であると判明した。

その後各種の措置をおこない、竹敷に入港した。

この三日間において「和泉」での戦死者は五名、重軽傷は六名であった。

各種の損害があったが、無電関係ではアンテナ切断

の事故があった。

しかし無電機そのものは故障することなく使命を全うしたようである。

十・六

旗艦「三笠」渾身の無線電信

◎敵艦隊見ユタタタ・・を受電

してからの「三笠」の行動

五月二十七日の早朝に「信濃丸」が敵艦隊を発見して打電してからの無電のやり取りは前節で説明した。若干の混乱は有ったものの、数時間の後には実際にバルチック艦隊が接近したと「三笠」参謀が確信するに至っている。

無電の内容については既述したので、本節ではまず、「三笠」を中心とした日本の聯合艦隊主力がどのような行動を執ったかを記す。

タタタ・・の無電を受けてから出撃するまでの様子を、「三笠」の戦時日誌から引用する。

海上濛氣アリ 展望約六哩 浪高ク艦ノ動揺稍大ナリ

午前五時五分 嚴島ヨリ敵第二艦隊見ユノ無線電信ニ接シ直ニ至急點火、出動準備ヲ爲ス

五時三十分 前後甲板ニ積載シアリシ餘備石炭ヲ中下甲板ニ移シ艦載水雷艇及小蒸氣ハ臺中丸ニ依托ス

六時五分 抜錨 出艦 加徳水道ヲ經テ彎外ニ向フ 兼テ加徳水道ニ假泊セシ第一、第二、

第四戦隊及附屬驅逐隊、水雷艇隊ノ全部ハ共ニ出動ス

六時十五分 原速十二哩

六時二十分 合戦準備 中部甲板ノ石炭ヲ炭庫ニ入レ残餘ノ一部ヲ海中ニ投棄ス

七時五分 合戦準備 整備、次テ戦闘部署ニ就カシメ各要具ヲ備ヘ各砲ノ火管ヲ試ス

七時三十五分 原速十五哩

七時四十分 右悉皆整備セルヲ以テ開散休憩

セシム

(中略)

九時三十九分 對馬三島燈臺ヲ南々西一ノ四

西約十哩ニ見テ南東一ノ二南ニ變針 沖ノ島ノ

北方SU特定地點ニ向フ

(以下略)

緊張が伝わってくる記述である。

無電を受信すると直ちに出勤の準備をし、加徳水道で待機していた主力や附属艦隊の全てと「三笠」が合流し、湾外に向かったことがわかる。

また、東水道に向かっているとの電文によって、九時過ぎには、對馬と老岐の間を北上した海域にある沖ノ島の近くにまで進んだと分かる。

SU地点とは図10・25における右幹線で第二警戒線を過ぎた北東の三八六地点である。

さて、急遽合戦準備をしていた朝六時過ぎに、「三笠」で指揮を執る聯合艦隊司令長官・東郷平八郎は、軍令部に「これから出撃する」という電報を有線で送った。

電文の案は参謀たちが作成し、とくに最後の有名な一句は秋山眞之が案を出したと言われている。

この電文の発信端局は「臺中丸」の艦上で、陸地における最初の中継所は、図10・11の地図にある巨濟島北端の松眞浦里局だったであろう。

軍令部で受信したその電文は幸いにも保存されており、図10・41に写真を示した。

また後に巨濟島に建てられた記念の石碑を図10・42に示した。

(これは戦後韓国人によって毀されたとされる。写真は破壊された後のものである)

電文を活字化すれば次の通りである。

敵艦隊見ユトノ警報ニ接シ聯合艦隊ハ直ニ出勤
之ヲ撃沈滅セントス本日天気晴朗ナレ共波高シ

これは当然暗号で打たれたものの復元であるが、暗号電文は後に示す。

タタタ・・が「敵艦隊見ユ」と訳されていることに着目されたい。より厳密には「敵ノ第二艦隊見ユ」であるが、これは当然のこととして略されている。



図10・42 巨済島に建てられた記念碑

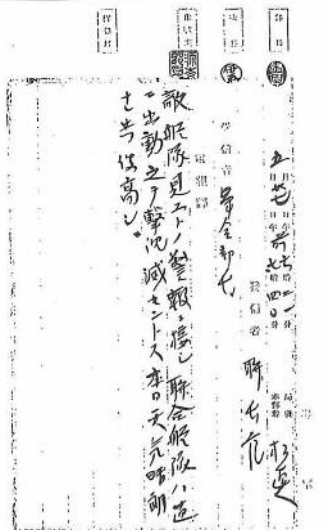


図10・41 有名な出撃の報告電文(軍令部受信紙)

よく「敵艦見ユ」とされるが、これが間違いであることは前に述べた。

中に「撃沈滅」という聞き慣れない文章があるが、これの原文は「撃滅」であったと考えられる。

暗号表の中に「撃滅」は無かったので、「撃沈」と「滅ス」をつないだのであろう。

後の引用ではほとんどが「撃滅」としてある。一旦東京に戻った東郷司令長官が天皇陛下に「誓って撃滅いたします」と奉答したとされているので、参謀はわざわざこの言葉を使ったのであろう。

何日か前の「佐渡丸」誤報事件の時にも似た電文を一旦は打ったであろうから、「三笠」参謀としては下案作りの予習が出来ていたと考えられる。

最後の「本日天気晴朗ナレ共波高シ」は、秋山真之が部下の参謀の案に付加したと言われている。

同日の日本の天気予報が「天気晴朗なれども波高かるべし」だったので、早朝にそれを確認したとされている。

これは大変な名文で、早朝に敵艦隊を発見したと聯合艦隊の決意と作戦を左右する波浪や視界を示しており、短い文章の中に多くの情報が込められている。

この電文に感激して日露海戦の研究を始めた人も多
いとされる。

◎「三笠」が把握した 「和泉」からの情報

「信濃丸」からの通報の届き方は必ずしも充分なもの
とは言えなかったのだが、「和泉」からの通報も、「三
笠」を困惑させるものが有ったらしい。

なぜなら、他の艦からの通報を矛盾していたからで
ある。

その代表的な部分を、「三笠」の戦時日誌から抜萃し
てみる。

まず十時より前の無電を示す。

◇〇八〇〇 和泉↓三笠

「二二七地点ニアリテ北東微東ニ進行 速力十二浬」

◇〇八三〇 笠置↓三笠

「第三戦隊二五一地点ニ在テ速力十浬、針路北東微

北」

◇〇八三五 和泉↓三笠

「ゼムチューグ單獨ニテ前進、針路東二五一地点」

◇〇八五〇 笠置↓三笠

「未夕敵ハ觸接ヲ保タス我二五一地点」

◇〇九五五 和泉↓三笠

「敵ノ兵力戦艦五・・・總數二十二隻以上見ユ・・」

先に記した「和泉」の航跡図の説明記号で言えば、
HとJとRに相当している。Rにもこれにも地点記号
が見えないが、位置の報告は義務づけられていたから、
何らかの形で報告されていたと考えられる。

二二七の一〇浬北が二五一なので、この時間帯に「和
泉」は二二七から二五一の附近で敵艦隊を目撃してい
たことになる。

ところが第三戦隊旗艦の「笠置」からの通報では、
同じ時間帯に同じ海域で敵艦隊を発見していないとさ
れている。

第三戦隊は「信濃丸」の早朝の発見の際は、その警
急信号を的確に把握して第三艦隊旗艦の「嚴島」に知
らせている。

この食い違いは、「三笠」参謀を悩ませたであろう。

なお「和泉」は「嚴島」を旗艦とする第三艦隊麾下の第六戦隊に所属していたが、これと違う報告を送った「笠置」は、「三笠」を中心とする第一艦隊に属して索敵に当たっていた第三戦隊の旗艦であった。

つまり「和泉」にとつては上官に当たる艦であり、間違いの指摘はしにくかつたであろう。

第三艦隊旗艦の「嚴島」は索敵に責任を持つ立場でかつ「三笠」と頻繁に連絡していたが、記録を見ると、敵位置や針路の正確な把握が出来ずにいたようである。

次に、午前十時から十二時までの「三笠」への無電連絡の様子を示す。

◇一〇二〇 嚴島↓三笠

「我午前十時三〇五地點ニ在リテ針路北東微北、敵ノ主力ヲ後方約五海里ニ保ツ」

◇一〇四〇 嚴島↓三笠

「敵ハ二八〇地點ニ在リテ針路東北東」

◇一〇五〇 和泉↓三笠

「敵ノ兵力十五隻「ポロヂノ」型四隻・・・・」

◇一一一五 笠置↓三笠

「敵ハ我艦隊ノ原位置ヨリ南東七海里ニ在テ吾三〇七地點」

◇一一四〇 和泉↓三笠

「午前十一時三十分先頭艦三〇六地點ノ北東ノ針路北東微東」

「和泉」からの報告は前掲TとYに相当しており、かなり正確に「三笠」に届いていたと分かる。

「嚴島」からの報告はこの時刻になってやっと敵艦隊と自艦の位置が入るようになった。

「笠置」の位置報告と最後にある「和泉」からの報告とでは、位置がかなりずれており、十二時近くになつても「三笠」の参謀室ではどちらが正しいのか分からず、焦燥したようである。

敵艦位置についての無電連絡の最後に、十二時からしばらくの間の「三笠」受電を記す。

◇〇〇〇二 嚴島↓三笠

(和泉からの報告Tとほぼ同じ内容なので、この時

刻になって和泉の報告が正しいと分かり、中継したのである。

◇○○二五 和泉↓三笠

「敵艦隊正午若宮島ノ北十二海里、針路北東微東」

◇○○三〇 笠置↓三笠

「敵艦隊三〇七地點針路北東、展望五海里」

◇○○四〇 嚴島↓三笠

「敵艦隊北東に變針、三〇七地點」

◇○○一一五 嚴島↓三笠

「敵ハ三〇八地點ニ在テ針路北々東」

◇○○一三〇 和泉↓三笠

「敵艦隊三三七地點北東ニアリ針路北東」

二番目の通報は前の a に相当するが、正確に届いていたことが分かる。

「三笠」の記録には、この無電によって敵艦隊の位置を知った——とある。

地点番号だけでは本当にそうかどうか確認不可能だが、若宮島という現実の島が「和泉」に見えたとの情報は、「和泉」の位置と敵艦隊の位置が現実の地勢によって確認されたことを意味しており、この時点で「三

笠」はやつと確信を持ったと考えられる。

おそらく「笠置」も「嚴島」もこの無電を傍受することによって、自艦位置を訂正したのである。

無電の終わりの三通にある三〇七、三〇八、三三七は、地図上では近い海域であり、どの艦からの通報もほぼ同じになってきたと判明する。

そして、これらの通報を元に航路を定めた聯合艦隊主力は、一時十五分に第三艦隊を認め、一時二十八分に第三艦隊で索敵に従事していた第五と第六艦隊を認めた。

「和泉」は別行動をとっており、第六艦隊に合流したのは四時近くなので、確認はされなかったようである。そして一時三十九分に「三笠」は南西方向に敵艦隊を発見した。

一時五十三分に「三笠」艦上に有名な Z 旗があがり、「皇國ノ興廢コノ一戦ニアリ各員一層奮勵努力セヨ」——と伝達された。

(旗旒信号については付録 23 参照)

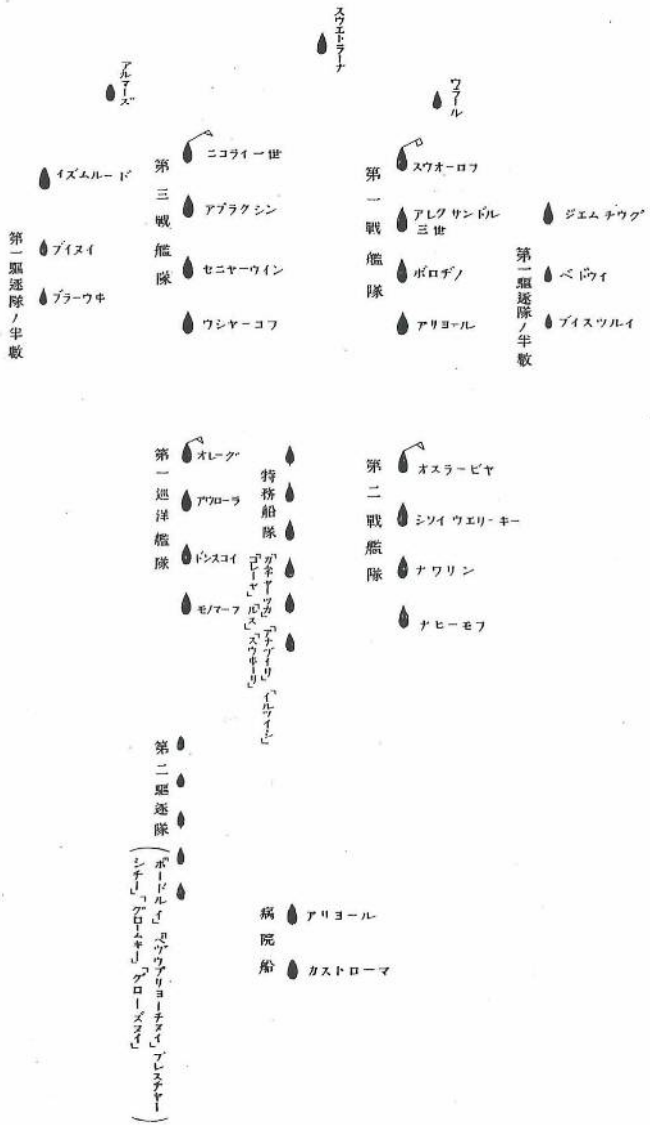


図10・43 五島列島の西約50哩の地点におけるバルチック艦隊の航行序列図

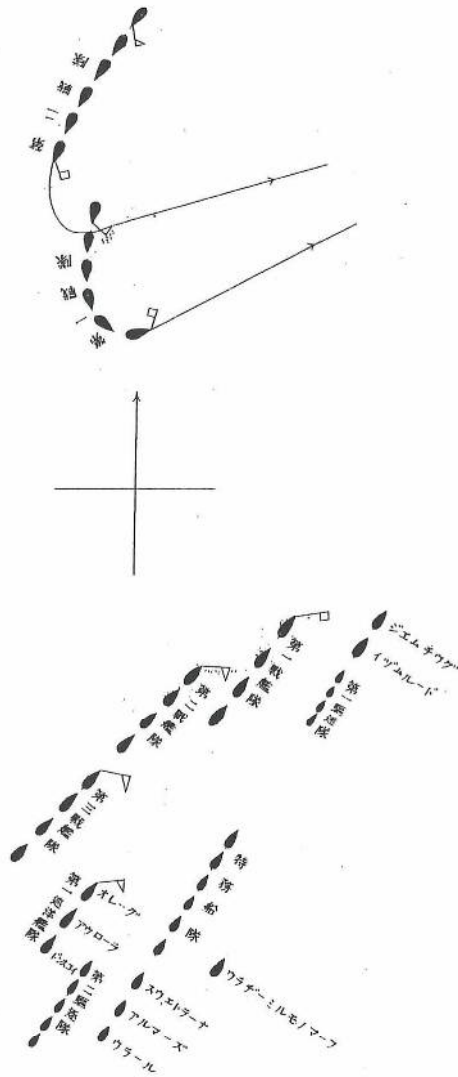


図10・44 明治38年5月27日午後2時8分、砲撃直前における両艦隊の推定陣形図

その間「三笠」率いる第一第二戦隊は、敵を逃さないためのやや複雑な航跡をとり、至近距離になってから丁字戦法のための、危険を冒しての敵前大回頭をおこない、二時七分に敵艦隊からの発砲があり、二時十分日本側からの猛砲撃が始まり、大海戦が開始された。

場所は沖ノ島の北西一〇海里ほどの海域で、彼我の距離はほぼ六千メートルだったとされる。

地点番号でいうと、この最初の砲撃戦の場所は、三八五と三六四の間くらいである。

図10・43に、五島列島の西を通過中のバルチック艦隊の配列を示した。

「和泉」がよく敵情を把握していたと分かる図である。

また、図10・44に、敵前大回頭をなした時の彼我の陣形を示した。いずれも軍令部編の海戦史による。

ぎりぎりの時点での危険を顧みない敵前大回頭は、黄海海戦で丁字戦法が奏功しなかった教訓を活かしたもので、基本は丁字戦法なのだが、何年か前に、日本海海戦で丁字戦法が使われたか否かの議論がなされたことがあった。

これについては、付録39に示したような、聯合艦隊参謀(後の資料では秋山眞之とされている)による、戦捷直後の新聞記事が明らかにしている。

そこには昔から日本水軍にあった丁字戦法を用いたこと、および偶然的の効果で第一第二戦隊による乙字戦法が成立したこと、が明らかにされている。

東郷司令長官直属の参謀が責任を持って語った記事であるから、丁字戦法が用いられたことに、疑問の余地は無い。

◎索敵報告が食い違った問題についての懐旧談

開始された砲撃戦とその後の追撃戦については、多くの日露戦史に書かれているので、無電に重きを置く本書では簡単に触れるだけしておく。

ここでは、「和泉」からの報告と「笠置」や「厳島」からの報告が食い違って、「三笠」の参謀が悩んだ問題について、当時の「三笠」参謀の一人だった清河純一

大尉（のち中将）の追憶談を、少し長くなるが、引用しておく。

きわめて有意義で貴重な追憶である。

清河純一は明治十一年に大阪に生まれ、日露戦争の前は軍令部で財部彪（後の海軍大臣）の下で海軍信号／暗号の作成に従事し、日露戦争の後には国連海軍代表・海軍大学校長・舞鶴要港部司令官などの要職を歴任し、昭和六年に退役して、昭和十年没した。

大変理知的で教理に強い軍人だったらしい。

参謀室には信号や暗号に強い士官が必要だが、清河は日露海戦で海軍が使用したそれらの作成の実務者であり、熟知していたので、選ばれたのである。

聯合艦隊の四人の参謀の中ではもっとも若く、加藤友三郎や秋山眞之の下で働いていた。

以下の追憶談は、退役翌年の昭和七年になされた海軍通信学校での講演会の速記録からの引用である。

（海軍の信號書の歴史を述べ、日露戦争で使用された『第五版信號書』の中の二〇三地点などの地点記号は自分が中心となって策定したもの

であると述べたのち）

あと暫らく時間を頂戴いたしましたして、日本海海戦當時三笠司令部の後任参謀として、最も苦心いたしました事で、今日でも尚研究しなければならんと考へて居る事を申し上げます。

それは信號と限定した事ではなく、敵情通信に関する事であります。日本海海戦五月二十七日の朝、「二〇三」地點に敵發見の警報を受けて、我艦隊は直ちに出て征きましたが、海峡には二三日前から哨戒に出て居るものがありました、當時は片岡長官の率ゆる第三艦隊の一部、出羽司令官の率ゆる第四戦隊、其の他種々の艦が哨戒に従事して居りました。此等の艦が敵艦隊を追躡しつゝ其の位置を報告して参ります。所が廿五、廿六日は天氣があまり良くなかつたので、各艦の位置が正確ではありません、しかし已むを得ず、その正確でなかつた自艦の圖上位置を基礎として、敵の位置を報告するのでありますから、三笠司令部の方で見ますと各報告が一致しない事になります。司令部で見て居りました敵情報告は大體三つで、第三艦隊長官の

報告、出羽司令官（笠置）の報告と和泉の報告でありましたが、此等の報告を圖に入れて見ますと、約五哩位の間隔の平行線の様なものが出来まして、敵が果してどの線を北上して来るのか、何れの線に會する如く我は針路速力を定めてよいのか非常に困りました。合戦圖で御覽の通り、我艦隊は一時非常に東の方に進み、それから西方に引返へして居る航跡があります、その西方に引返へした頃は、司令部は相應に緊張の状態でありまして、ひよつとすると敵は我より北の方に脱けてしまつて居るかも知れぬと謂ふ心配もありました、何しても皇國の興廢實に此一戦にありと謂ふ刹那でありますから、私は加藤參謀長、秋山先任參謀等から「つまりどこだ」と問いつめられた様な目に逢ひました。その騒ぎの最中に、思はぬ方向に卒然濛氣の裡から出羽中將旗艦の笠置が見えました、笠置から方位に依る敵艦隊の位置は、一時間程前の報告がありました、倅而笠置を目の前に見て、その笠置のどの方向に二列縦陣であつた敵の大艦隊が居るのか、彼我餘程近い居る事文は慥

かであるが、はつきりした事は判らない、我我は十二隻の單縦陣で殆んど戦闘速力で駛つて居るのでありますから、氣が氣でない、私は笠置を見た瞬間に、圖上で笠置は此の位置である、笠置と敵艦隊との關係が一時間前と變りなければ、敵は實地で、あの方位の濛氣のなかで、こゝう謂ふ方向に進んで居る筈と指示する事が出来なかつたのであります。圖上と實地とを直ちに聯絡をつける事が出来なかつたのであります。後日の辯解を申せば、指示の出来る筈はありません。笠置の示して居る圖上位置は、二三日前からの出動と天氣の悪るかつた事で、實際位置と違つて居たのでありますから、私はその時、あの方位と指示の出来る筈はなし、假に指示し得たとしても、それは間違つて居らなければならぬのであります、兎に角彼の當時國運を賭して戦ふ重大事に非常に困惑した苦き經驗であります。普通の航海に於て、圖上のこの岬は實物に於て、あの鼻にあたると指示するのと同じ様な事でありますが、圖上に於て、色々の報告が錯綜し、一方自隊の速力が早くて、しかも針

路が時々變はる様な場合には非常に困難な事になります。學問的に申しますれば、大戦術運動から戦術運動に聯絡する瞬間であります。大艦隊となり、高速力となりますと、この瞬間即ち圖上から實物の艦隊を相手とする運動に移る時が極めて重要で（・・・中略）。

餘談であります、これも大切であると思いましたが、當日和泉の報告が、内容も整頓して居り、どうも和泉の報告を基礎にした方が、よい様に思いましたが、何分にも第三艦隊長官（旗艦嚴島）が、觸接部隊中の最高指揮官でありましたから、我主力艦隊は始めのうちは嚴島の報告に重きを置いて行動したのであります。

戦闘後、和泉に居りました同期生の樺山大尉に、この事を話しますと、自分も嚴島や笠置の報告は位置が違つて居る、和泉の位置が正しいのであると思ふたが、第三艦隊長官の報告が違つて居るとは、発信が出来なかつたと謂ふことであります、和泉の報告の正しいのは、後で判つた事ですが、當然の事であります。和泉は廿六日夜風波が激しかつたので、一時宇

久島に假泊して居た所に、敵發見の警報が來たから、直ぐに錨を揚げて出て征くと、敵艦隊に逢ひ、爾後觸接して居たのでありますから、艦位は極めて正確の筈であります。

私の意見は、か様な場合、即ち報告が一致せず、自分の位置が正しくて、他艦の位置が確かに誤つて居ると謂ふ確實なる根據ある場合には、自分の報告が正しいのだと謂ふ方がよいと思ひます。

（後略）

当日の「三笠」參謀たちの様子や、第一第二艦隊の航跡が東西に蛇行していた理由がじつによく判る思出談と反省である。

「和泉」の正しさが「三笠」に判つた時点については明確には記されていないが、若宮島との關係が打電された時に推理されたのではないだろうか。

この中に、清河と同期で「和泉」に乗っていた樺山大尉の話が出てきて、これも極めて興味深い、これは海兵で同期（二十六期）の樺山可也（後少将）の事であろう。

樺山可也は当時「和泉」の砲術長をしており、艦長を囲む同艦要人の一人だった。大正時代には聯合艦隊参謀長を務めたこともあったらしい。

十・七

捷報

無電機の損傷と戦後の反省

◎捷報

当時の世界を驚かせた日本海海戦の勝利だが、その捷報の最初は、「三笠」から「大河内望楼」を経由して軍令部に送られた電報であった。

「大河内望楼」は對馬の北部西側にあった無電望楼で、大海戦の現場に近かったためと、施設が充実していたためであろうが、出撃後の「三笠」からの軍令部への報告の多くはここが起点となっている。

望楼の位置は図9・43に示してある。その歴史につ

いては第九章に詳しく記してある。

この最初の捷報の電文の受信紙が残されているので、図10・45に示した。

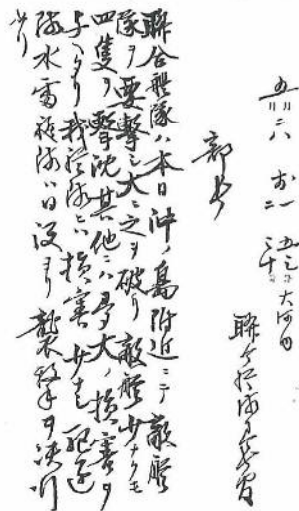


図10・45 日本海海戦最初の戦捷報告 (大河内望楼中継)

「三笠」がこの電文を発したのは二十七日深夜だと考えられるが、電文には、五月二十八日の早朝、午前一時五十三分に「大河内望楼」から発信されて、午前二時三十分には軍令部に到着したと記録されている。

中継のたびに照合しながら送っていた当時の有線通信としては、非常に早く届いている。

「三笠」から「大河内望楼」までの連絡であるが、むろん無線でも届く距離ではあるが、他の電文の記録から推定して、通報艦の「龍田」が望楼までの連絡を担当していたらしい。「龍田」と「大河内」の連絡が無電だったのか信号だったのかは不明である。

記念すべき電文なので、活字にしておく。

部長
聯合艦隊司令長官

聯合艦隊八本日沖ノ島附近ニテ敵艦隊ヲ要撃シ
大ニ之ヲ破リ敵艦少ナクモ四隻ヲ撃沈其他二ハ
多大ノ損害ヲ与ヘタリ我艦隊ニハ損害少ナシ駆
逐隊水雷艇隊ハ日没ヨリ襲撃ヲ決行セリ

民間人からの情報などによって、激戦がなされているらしいとの情報は伝わっていたようだが、大本営から正式にマスコミに戦捷が伝えられたのは、五月二十九日になってからであった。

その時の配布資料が残されているので、写真を図10・46に示しておいた。
充分な情報が入ってから発表したことが判る。

これが翌日の新聞に大きく出て日本中が沸き立ったのだが、よく読むと、冒頭にある出撃の報告の文章が少し変である。

「敵艦隊見ユ」が「敵艦見ユ」

「撃沈滅」が「撃滅」

「天気」が「天候」

のように変化している。

この中で明らかに間違っているのが「敵艦見ユ」で、これは作戦上は「敵艦隊見ユ」でなければならぬ。より厳密には「敵ノ第二艦隊見ユ」である。

一般向けなので騒ぐほどの問題ではないが、作戦上の意味はまったく違っていることは、前述の通りである。

この大本営発表が新聞に大きく出たため、「敵艦見ユ」が一般的になってしまったと考えられる。

ただし戦史に詳しい専門家の本では、正しく「敵艦隊見ユ」とされている事が多い。

次に、この大海戦を「日本海海戦」と呼称することを決めた電文を示す。

図10・47がそれである。

大海報第百拾壹號

五月二十七日未だ繼續中ナル日本海海戦ニ関シ聯合艦隊司令長官東郷平八郎ノ報告左ノ如シ

其一 五月二十七日午前八時

敵艦見ユリ發見被レ接シ聯合艦隊ハ直ニ出動之ヲ擊滅セントス本日午後晴明ナレドモ波高シ

其二 五月二十七日夜著電

聯合艦隊ハ本日沖ノ島附近ニ於テ敵艦隊ヲ數撃シ大ニ之ヲ破リ敵艦少クモ四隻ヲ撃沈シ其他ニ多ク大損害ヲ蒙リクワリ我艦隊ニハ損害少ナレモ逐次隊水雷艇隊ハ日没ヨリ甚ク撃テ決行セリ

其三 五月二十九日午前著電

聯合艦隊ノ主力ハ二十七日未だ敵艦ニ對シテ追撃ヲ續行シ二十日、リヤンコールド山附近ニ於テ敵艦「ニコライエ」(戦艦)「アリオン」(戦艦)「セニヤール」(装甲海防艦)「アラキレン」(装甲海防艦)及「イッムル」(巡洋艦)ヨリ成ル一隊ヲ會シテ之ヲ攻撃セシム「イッムル」ハ合離シテ逃去セシカ他ノ四艦ハ須臾ミテ降伏セリ我艦隊ニハ損害ナシ
 捕虜ノ多ク依リ二十七日ノ戦果ニ於テ沈没シタル敵艦ハ「ホロチ」(戦艦)「アレキサンダー」(戦艦)「セムネー」(巡洋艦)外三隻ヲト去リ
 捕虜海軍少將レボガト以下約二千

(備考)

右ノ外本戦開始以來聯合艦隊司令長官直率以下ノ指揮官又ハ主將ノ報告ニ係リ敵ノ損害左ノ如シ

「アドミラル」(巡洋艦八五二四ト)	撃沈
「ドニトリ」(トランスコー) (巡洋艦六二〇ト)	撃沈
「ウズビー」(ヒーロー) (巡洋艦五五九ト)	捕獲
「スクエトラ」(巡洋艦三七七ト)	撃沈
「パトリック」(ウニヤーク) (砲台軍艦四二六ト)	撃沈
「カムチャツカ」(特務艦七五〇七ト)	撃沈
「イルチツ」(特務艦七五〇七ト)	撃沈
大形特務艦(船名未ト詳)	捕獲
「駆逐艦」	撃沈
「駆逐艦」	捕獲
即チ敵ノ損害ナリ艦種ニ區別スルハ左ノ如シ	

戦艦	二隻	捕獲	四隻
装甲海防艦	一隻	二隻	三隻
巡洋艦	五隻	二隻	五隻
特務艦	二隻	一隻	三隻
駆逐艦	三隻	一隻	四隻
尚ホ捕虜ノ陳述ニル沈没艦三隻又ハ以上ノ中ナルヤ又ハ以外			
捕虜ハ聯合艦隊主力部隊ニ於テ収容セル二千ノ外尚ホ			
二千以上			

明治三十八年五月十九日

大本營海軍幕僚

図10・46 大海報第111号 (日本海海戦の最初の一般向け発表)

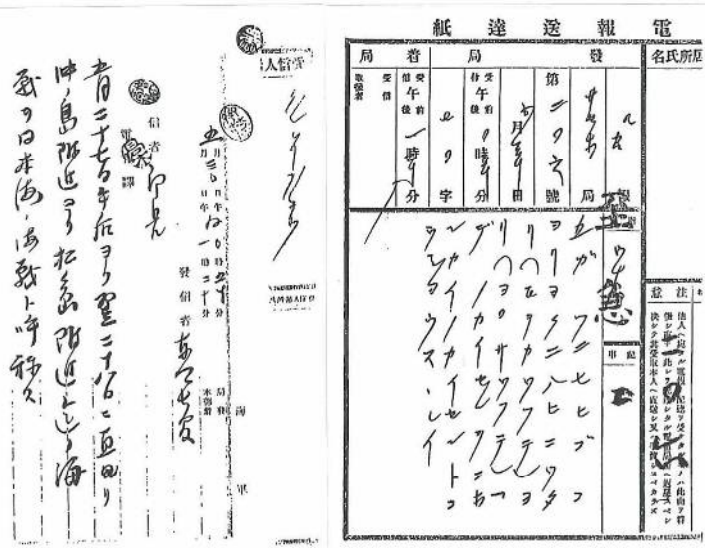


図10・47「日本海海戦」と呼ぶことを定めた電文

例によって活字化しておく。

五月二十七日午後ヨリ二十八日に亘リ沖ノ島附近ヨリ松島附近迄ノ海戦ヲ日本海ノ海戦ト呼称ス

五月三十日に佐世保経由で聯合艦隊から軍令部宛てに送られたこの電文によって、「日本海ノ海戦」という呼び方が決められたが、使っているうちに「ノ」が略されたようである。

この日にはすでに戦勝が決定的だったので、暗号は簡単なもので、二個所にしか使われていないが、これは付録24の三字符丁のリストによってすぐに判る。

- (モヲカ) ↓ 「沖ノ島」
 - (ヨマサ) ↓ 「松島(鬱陵島)」
 - (ワフテ) ↓ 「附近」
- ・・・である。

この電文送信から、海戦の呼称は聯合艦隊司令長官が定める権限を持っていたと分かる。

◎無電機の損傷

「三笠」など主要艦が日本海海戦に備える大改造をなした時、無線電信機についても損傷への備えを充実させたことは前述した。

無電室を前部右舷寄りと後部左舷よりの二個所に設け、アンテナも二本張り、双方の無電室ともに、送信受信とも複装とした。

つまり送受ともに二組四台を備えたことになる。

しかし、それにもかかわらず、「三笠」の無電が使用不可能に陥った時間帯があった。

その説明のために、「三笠戦時日誌」に記されている無電関連の信号を抜萃してみる。

図10・48である。

決戦を目前にした二十七日午後〇時七分には、

無線電信機収メの令アルモ日没ニ至ラバ令ナク

シテ再ビ備フ可シ

——という信号が後続艦に伝えられている。

六倍號命令 二十七日、分	時分 養艦 受艦	六、五。中 旗艦 經大成功、折	六、五。各艦 旗艦 通跡ノ進ノ	中略	一一三。旗艦 戰隊 本日午後陸位置信號ノ受時ト合、 後。七 旗艦 各艦 無線電信機収メ令ヲ自及至令レテ、備可シ	中略	七一二。本艦 戰隊 午後五時十分至陸東北東ニ候分、分陸ノ東ニ東 七二。本艦 戰隊 其艦 無線電信機ノ取、所ナリ	七二。本艦 戰隊 本艦 無線電信機ノ其艦 無線電信機ノ知セ	三、八、分	四三。教島 本艦 艦中ノ電沈没船 戰艦 其艦 無線電信機ノ知セ	中略	七四七。教島 本艦 南見、煙見上	七五二。本艦 戰隊 無線電信機修理ノ止艦ニ候、本艦 無線電信機ノ修理ヲ	七五三。本艦 戰隊 戰隊 煙ヲ立、増セ	七五六。本艦 戰隊 本艦 煙ヲ立、南見	八一。本艦 戰隊 本艦 無線電信機ノ修理ノ進、	八二五。本艦 戰隊 本艦 無線電信機ノ修理ノ進、	八三九。本艦 戰隊 本艦 無線電信機ノ修理ノ進、
-----------------	----------	-----------------	-----------------	----	--	----	--	-------------------------------	-------	---------------------------------	----	------------------	-------------------------------------	---------------------	---------------------	-------------------------	--------------------------	--------------------------

図10・48 無電機故障に関する「三笠」の信号命令

砲撃戦が始まる直前には、アンテナは収納し無電機は甲板下に退避させることになっていたが、これは砲撃によって大切な無電機が破損することを防ぐためであり、また味方の爆風によってアンテナが切れてしまいう心配があったからである。

この信号は、日没後は言われなくとも退避した無電機を復活させよ——という意味である。

大決戦が続いたが、夜の七時二十分になって「三笠」は、すぐ後ろに続いていた「敷島」に対して、次の信号を送った。たぶん燈火手旗であろう。

其ノ艦ノ無線電信機ヲ取り附ケヨ

「敷島」の無電機を復活させよ——との指示である。

十分後の七時三十分に、重要な命令を下した。

本艦無線電信機キカズ其ノ艦ニテ受け軽便燈ニ

テ知ラセ

つまり、旗艦「三笠」の無電機が（前後双方ともに）使用不能になってしまったので、「敷島」が受信してその内容を（夜間で旗旗は見えないので）燈火信号で「三

笠」に伝えよ——という命令である。

フォールトトレラントの思想で、送受ともに計二組四台もの機械を設備したにもかかわらず、この時間帯にはどれも使用不能になってしまい、「敷島」が代理を務めることになったのだ。

このあと、「敷島」から「三笠」あてに、無電傍受結果が数多く知らされるようになる。

この後でも、「三笠」は「敷島」あてに同様主旨の命令を送っている（七時五十分）。

無線電信機修理ヲナス其艦本艦ニ代リ発受信シ
手旗信号ニテ通信セヨ

（この手旗とは旗の代わりに両手にランプを持つ燈火手旗である）

では、なぜ四台すべてが使えなくなったのかというと、それはアンテナの切断が最大の原因であった。

アンテナも二組張ってあったが、固定するマストは前後に二本しかないため、一組は後部マストと艦尾の間に張り、もう一組は前後のマストの間に張ってあった。

つまり後部マストは二組のアンテナの端が固定され

ていたわけだが、この後部マスト（主マスト）の中央部が敵砲弾によって破損したため、両アンテナが同時に落下して使用不能になってしまったのだ。

やがて八時二十五分になると、命がけの修理によって臨時にアンテナが張られ、無電の一部が修復した。そこで次の信号が「三笠」から「敷島」へ送られている。

吾レ無線電信機復旧セリ

以上が、日本海海戦において「三笠」無電機が使用不能となり、やがて復旧した顛末である。

七時ごろから八時半までのほぼ一時間半の間、「敷島」の無電機が代理を務めたのである。

このアンテナ破損およびその他の無電機関係の損傷については、「三笠戦時日誌」の水雷の部に詳しく記されているので、その部分を図10・49に示した。

（電気を用いる無電は、訓練と同じく報告書でも水雷の部に入っていた）

この日誌によって、アンテナ切断の様子やそれ以外

の損傷もよく分かる。主要部分を抜萃しておく。

◎二時廿二分敵弾右舷兵員便所ヲ貫通潜水器室附近ヲ破壊セシトキ前部無線電信垂直線引入口円突ヲ破壊シ其内部垂直線ヲ切断ス同時ニ激動ノ爲メ引入口隔縁用「エボナイト」板二枚三十珊感應縮線用「エボナイト」覆壳枚破損セリ

◎二時參拾分同垂直線ノ仮修理ヲ行ヒ通信ヲ続行ス

◎午後參時「メイントップマスト」敵弾ノ爲メ切断サレシ時其激動ニヨリ后檣探海燈硝子一枚破損セシガ午後七時予備ノモノヲ備ヘ探海燈使用ニ差支ナカラシメタリ此時檣頂墜落シ耐風用無線電信垂直線及無線電線用硝子破損ス即チ前檣「ガーフ」ニ一條ノ垂直線ヲ掲ゲントセシモ「ハリヤード」切断セラレ已ナク一時通信中止「ハリヤード」ヲ新ニ導キ予備垂直線ヲ掲ゲ午後七時半通信旧ニ復セリ

水雷ト部

午後六時五分敵弾前部「セカイ」ヲ撃シ。命中シ破片甚
マ前橋右舷揮油燈電路ニ折斷機操洋燈使用自働管
制御元機機ニ至ル電話管電路一ヶ所前司令路ヲ前
前部右舷砲台ニ至ル電話管電路一ヶ所同時切斷セシ
テ「前」剛機操右舷揮油燈電路ニ三ヶ所共ニ夜中行動
ヲ起シ前應急修理ヲ施シ電燈使用ニ差支ユカラズ
前橋管制器電路ハ二十八日午中應急修理ヲ施シ
二時廿五分敵弾右舷應急便所ヲ貫通海水蒸室附近ヲ
破壊セシ前部無線電燈並直線入口内受ヲ破壊シ其
内部並直線ヲ切斷ス同時激動ヲ為シ入口隔扉閉ス
キト扱ニ扱ニ扱ニ扱ニ扱ニ扱ニ扱ニ扱ニ扱ニ扱ニ扱ニ扱ニ扱
セリ二時叁分至同並直線、扱修理ヲ行ヒ通信ヲ続行ス
二時五十分至敵弾機官事務室、今中ノ機操室
ト同事務室同ノ電燈管電路ヲ切斷シ全電鐘及ヒ
押知破損セリ

午後六時「メイ」ト「マス」ト敵弾ニ為テ切斷セシ時其激動
ニシテ右橋機操油燈硝子一枚破損セガ午儀七時半硝子備
ノヲ備ハ揮油燈使用ニ差支ユカラズ此時補備履履シ耐ル
用無線電信並直線及無線電線用硝子破損ス即チ前橋ガ
二条ノ並直線ヲ扱ントセシモ「マロ」切斷セシ「巴」時通
信中ノ「マロ」ヲ新ノ導メ子備並直線ヲ扱テ午後七時半
通信ニ復セリ

補索及折斷概況

昨日海城中軍ノ補索業務ハ「アール」ト「スミス」ト折損
際於テ左置「アール」ト「スミス」折斷際於テ左置ニ着「アール」
ト「スミス」ト折斷於テ左置ニ着
「アール」ト「スミス」ト其左舷側折中央ヲ約四分一ノ折ト折斷ニ繞
ラレテ「アール」ト「スミス」ト上左側「アール」ト「スミス」ト
存カズ見張員ト右部補索手ト「アール」ト「スミス」ト及「アール」
ト「スミス」ト續着以テ折斷「アール」ト「スミス」ト其ト「アール」
ト「スミス」ト及「アール」ト「スミス」ト及「アール」ト「スミス」ト
及無線電信「アール」ト「スミス」ト約三分一、高サ「アール」ト「スミス」ト
右折断サレ「アール」ト「スミス」ト浴ヲ斜メ「アール」ト「スミス」ト
塔附近ニ墜落ト折斷ニシテ「アール」ト「スミス」ト及「アール」ト「スミス」ト
居ト依而全補索手ヲ以テ「アール」ト「スミス」ト切リ免「アール」ト「スミス」
上ノ手置ニ被テ打テ「アール」ト「スミス」ト令テ左置輕砲員ト部ト共著

図10・49 無電機故障に関する「三笠」の報告書

先に記した「敷島」との連絡記録とは、破損復旧の時間が一時間ずれているが、これは先の記録が正しいであろう。

この抜萃は、破損の様子を知る上で貴重である。

前部無線電信機室の近くを敵弾が貫通したとき、垂直線（アンテナ）を無電室に導入するための絶縁された入口が破損し、同時に三十センチの小型の方のインダクションコイルの絶縁体も破損したことが分かる。これは十分弱で修理されたい。部分的な破損だったとはいえ、大変な速さであり、無電担当者の必死の働きが伝わってくる。

後部のマストが被弾したためのアンテナの破損については、前期の「敷島」との連絡においては、午後七時過ぎに破損修復などがなされたと判断される。

しかしこの時間帯は、砲撃戦は小規模なものになっていた筈なので、不思議に思われるのだが、この「水雷の部」の戦時日誌によって、時間のずれの理由が明確になる。

すなわち、後部マストの被弾は午後三時ごろだったのだが、その影響でマストの上部が落下してアンテナ

が使用不能になったのは七時過ぎだったのである。

また、復旧は前部マストのガーフを利用して（たぶん前部マストと艦首の間に）張り直すつもりだったが、ハリヤードと呼ばれるロープ（アンテナをマストに上下する装備と考えられる）が破断されてしまったために、修復に時間がかかったという事なのであろう。

前後の無電機の使用状況だが、この日誌によると、戦闘中は主に後部の無電機を使用しており、後部マスト（主マスト）の切断によって両方のアンテナが破損した後は、無事だった前部のマストに新たにアンテナを張って前部無電機を使用することによって、無電を復旧させたようである。

前部の無電機の小型（三十センチ）インダクションコイルの絶縁は破損したが、大型（五十センチ）は無事であり、使用は可能だったらしい。

アンテナを張り直すのが大変で多少の時間はかかったが、前部後部の両方に、しかもそれぞれ複数の送受信機を装備してあった効果は、確かにあがっていたことになる。

インダクションコイルが一台だけだったり、無電室

図10・52に示した。

図10・51の左は後部マストの被弾を詳しく図解したもののだが、アンテナの様子も明確に分かる。

後部無電機用のアンテナは後部（主）マストの頂上のガーフから艦尾に向けて張られており、前部無電機用のアンテナはその後部マストの頂上のすぐ下の部分から前部マストに向けて張られていると分かる。

図10・51の右は、マストを拡大して破断箇所を明示したもので、Aが敵十三インチ砲弾によって破砕された場所、ここはたまたま、黄海海戦で砲弾が命中した箇所とほぼ同じである。

Bは六インチ砲弾による折損で、その他の損傷はAの個所から折れて上部が落下した際の折損である。

図10・52は、これらマストの破損状態がよく写っている写真である。『極秘明治三十七八年海戦史』の付録にある写真集から戸高一成氏が引用したものらしい。後部マストの上部が完全に消失している様子が分かる。

前部マストの途中から艦首に向けて数条のロープが張られているが、ここに前部無電機用に臨時に張られ

てアンテナが有ったのか、それとももっと上から張ったのかは不明である。

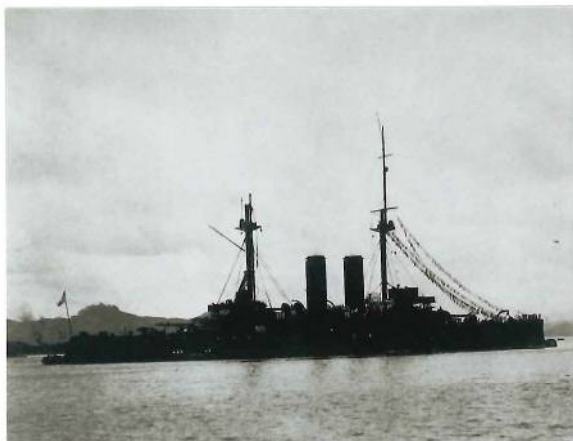


図10・52 日本海海戦でマストを折損した「三笠」

◎戦後の無電関連の反省と表彰

かくして、日本海海戦は日本海軍の大勝利に終わり、その戦いぶりは世界各国の要人たちを驚かせ、世界中の海軍士官を注目させたのだが、海軍の軍人たちは反省も忘れなかった。

図10・53は、「三笠」艦長の伊地知彦次郎が、戦時日誌の無電機の個所に書いているアンテナの張り方の改良案である（活字化戦時日誌には略されている）。

敵弾からの防護や他のワイヤーとの接触事故を防ぐための案なのだが、この案だと、もともと多くの電波を送受する管の垂直部分が鉄板で蔽われてしまうので、効率はとても悪くなるであろう。

しかし伊地知艦長は電波の素人であり、木村駿吉たちですらアンテナの原理は理解できていなかった時代だから、やむを得ない。

ここにこの図を出したのは、素人であっても、いろいろな案を出して、より良い無電機を作ろうと必死になつていた事を知っていただくためである。

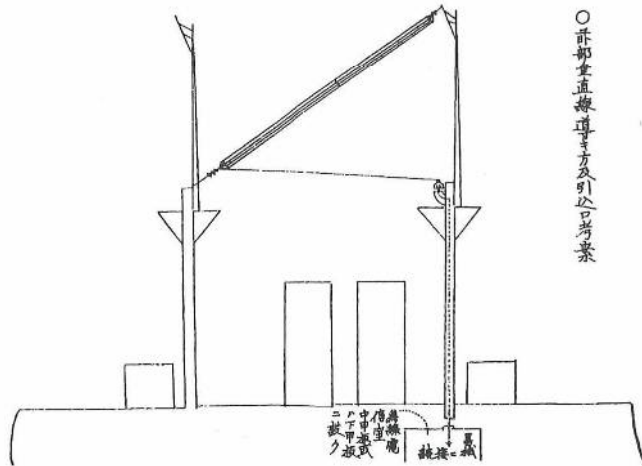


図10・53 伊地知三笠艦長のアンテナ改良案

伊地知彦次郎艦長は、じつに細かな所まで気を配る人物で、海戦と戦後処理が一段落した六月十日の全兵

士への訓示の中で、無線電信機に触れ、また無電送受を担当した窪田兵曹を表彰している。

(図10・54参照)

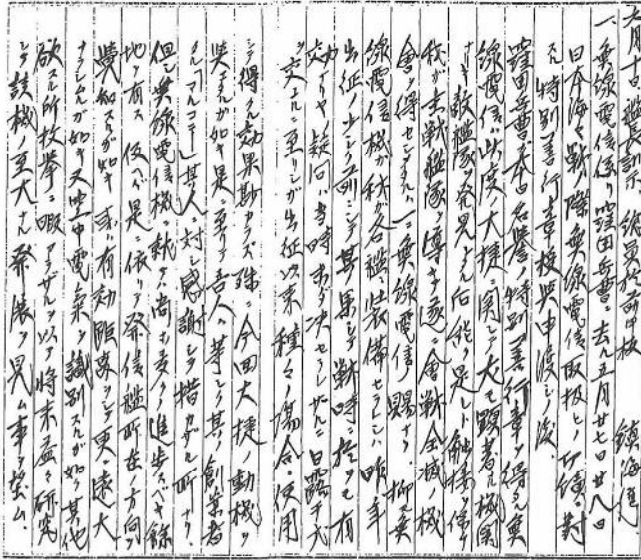


図10・54 「三笠」艦長による無電担当窪田兵曹表彰

窪田新助は明治三十五年の後半、一等水兵だった時代に第四回下士卒無電訓練を受けた人物で、当時は「吾妻」に乗っていたらしい。篤実な性格だったのである。

この訓示記録は興味深い文章なので、戦時日誌から引用しておく。

六月十日、艦長訓示、総員於前甲板 鎮海灣
無線電信係り窪田兵曹ニ去ル五月廿七日廿八日
日本海々戦ノ際無線電信取扱ヒノ功績ニ對スル
特別善行章授與申渡シノ後、

窪田兵曹ガ本日名譽ノ特別善行章ヲ得タル無線
電信ハ此度ノ大捷ニ関シテ尤モ顯著ナル機関ナ
リキ敵艦隊ヲ発見シタル后能ク是レト触接ヲ保
子我ガ主戦艦隊ヲ導キテ遂ニ會戰全滅ノ機會ヲ
得セシメタルハ一ニ無線電信ノ賜ナリ、抑モ無
線電信機ガ我ガ各艦ニ裝備セラレシハ昨年出征
ノ少シク前ニシテ其ノ果シテ戦時ニ於テモ有効
ナリヤノ疑問ハ當時未ダ決セラレザルニ日露干
戈ヲ交ユルニ至リシガ出征以來種々ノ場合ニ使
用シテ得タル効果勲力ラズ殊ニ今回大捷ノ動機

ヲ與エタルガ如キ是ニ至リテ吾人ハ等シク其ノ
創案者タル「マルコニー」其人ニ對シ感謝シテ
措力ザル所ナリ、但シ無線電信機ニ就テハ尚ホ
多クノ進歩スベキ餘地ヲ有ス、仮ヘバ是ニ依リ
テ発信艦所在ノ方向ヲ覺知スルガ如キ或ハ有効
距離ヲシテ更ニ遠大ナラシムルガ如キ又空中電
氣ヲ識別スルガ如ク其他欲スル所枚擧ニ暇アラ
ザルヲ以テ將來益々研究シテ該機ノ至大ナル發
展ヲ見ム事ヲ望ム、

無線電信の効用を實に良く理解し、さらにその改良
点を指摘している。

流石は「三笠」艦長だと感心する。

窪田兵曹の表彰は、伊地知彦次郎艦長による表彰ら
しいが、このような善行章はこれだけだったらしいの
で、いかに伊地知艦長が「新兵器」の無線電信に感心
していたかが分かる。

さて、最初に敵第二艦隊を発見し、警急信号タタ
・・・によって通報した「信濃丸」と、その後の航跡を
精密正確に把握して報告した「和泉」に対して、聯合

艦隊司令官東郷平八郎名で、感状が贈られた。

六月二十日の日付である。

その写真を図10・55に示した。

◎軽率だった報道機関と海軍の心配

六月に入ると「三笠」は鎮海湾と佐世保の間を往復
しつつ戦後処理や訓練を続けていたが、六月十三日の
日付で、聯合艦隊参謀長が大本営幕僚宛に、報道機関
が間違った戦勝報告を大きく書いていることを憂慮す
る電文を送った。

すぐに浮ついた記事を書くマスメディアの悪風は明
治時代からだと分かるが、日本側（とくに陸軍）には
戦争継続の力が残っていない事と、それに関連して講
和の困難さをよく認識していた聯合艦隊首脳は、この
浮ついた新聞報道に怒りを覚えたらしい。

図10・56に全文を示したが、かなり長い電文で文字
も読みにくいので、これも活字化しておこう。

感狀

假裝巡洋艦信濃丸

明治三十八年五月中敵艦隊ノ北上ニ對シ連日連夜ノ哨戒勤務ニ服シ同月廿七日拂曉早クモ敵艦隊ヲ發見シ其確實迅速ナル警報ハ聯合艦隊ノ作戰ヲ利セシコト少ナカラス其功績大ナリトス仍テ茲ニ感狀ヲ授與スルモノナリ

明治三十八年六月廿日

聯合艦隊司令長官東郷平八郎

感狀

軍艦和泉

明治三十八年五月廿七日午前早ク敵艦隊ト觸接シ爾後敵ノ砲火等ニ屈セズ敵ヲ監視シテ陸軍運送船等ヲ擡護シタルノミナラズ詳カニ時々敵情ヲ觀察報告シ聯合艦隊ノ作戰ヲ利セシモノナラズ其功績大ナリトス仍テ茲ニ感狀ヲ授與スルモノナリ

明治三十八年六月廿日

聯合艦隊司令長官東郷平八郎

図10・55 ハルツカ艦隊を探索し警急無電で報告した「信濃丸」と「和泉」への感狀

海軍大臣

七月三日

受領者 加藤 洋 佐 謀 長

送附者 加藤 洋 佐 謀 長

日本海軍隊ノ戦況付封函状上等三行ヲ
 我隊隊將校下士官等ノ談話トシテ記載シ
 了ルモノガアラサレモ是等ハ唯一班ヲ聞キテ
 全豹ヲ敷衍サレシモノトシテ専横トモ
 違ハサルモノナレバ隊ノ將校下士官等ハ
 強ク當長官ノ公報進達カハ違ハズ況ニ
 何等通信談話ヲ禁止シテハ昨今ニ至リ

諸般
 本軍艦ヲ新開紙ノ顯ハタル我艦隊ノ記
 事ハ全軍艦進達ニシテ其艦乗員ノ口ヨリ出
 デタルニ非ルコトニ報告ニ未ダモ多シ又敵側
 ノ報告及ビ捕虜ノ談話等モ大ニ事實ト
 異リ現ニ捕虜ヲ調問スルニ或ハ「スズーロ」
 「アロロ」等ト誤リ又「アロロ」等ト誤リ
 「アレキアデー」等ト誤ル等限難ニテ更ニ一談セズ
 之ニ當リ激氣爆爛ト敵陣ノ潰乱シタルヲ
 彼等自身ニ於テモ我況ノ觀察ハ甚トヨリ
 同型艦ノ識別困難ナリトシテ誤認スルケラン
 又々馬尼刺ニ出入シテト傍ヘシハ敵艦

「ジエムチウ」ノ撃沈ニ就テハ島村身ニ於テ隊司
 令官ヲ始メ艦手艇長等固ク之ヲ確認シ
 居ラレモ當時砲ニド同時ニ一擲ヲ失ヒ沈没
 レタル「オスター」ビヤフ見テ激氣爆爛ノ内ニ之ヲ
 「ジエムチウ」ニ誤認サレタルニ非ルカノ疑アリ鬼
 角ノ當長官ヨリノ公報書最ハ我艦隊諸
 員ガ見テ事實ト確認シテ其ヲ綜合シテ
 報告サレタル次第ナレバ右様御前素知アラ
 シコトナク望ム

図10・56 加藤参謀長による謬った新聞報道についての幕僚への注意書

六月一三日

発信者 聯合艦隊参謀長
受信者 (大本営海軍部) 幕僚

日本海海戦ノ戦況ニ付新聞紙上等ニ於テ我艦隊
將校下士卒等ノ談話トシテ記載サレアルモノ少
カラザルトモ是等ハ唯、一斑ヲ聞キテ全豹ニ敷
衍サレタルモノノ如ク一トシテ事實ト違ハザル
モノナシ艦隊ノ將校下士卒等ニハ豫テ當長官ノ
公報進達サルル迄ハ戦況ニ付キ通信談話ヲ禁止
シアレバ昨今ニ至リ諸艦ヨリ新聞紙ニ顯ハレタ
ル我艦隊ノ記事ハ全ク捏造ニシテ其艦乗員ノ口
ヨリ出デタルニ非ルコトニ報告シ来ルモノ多シ
又敵側ノ報告及ビ捕虜ノ談話等モ大ニ事實ト異
リ現ニ捕虜ヲ調問スルニ或ハ「スウォーロフ」
ヲ「ポロチノ」ト誤マリ又ハ「ポロチノ」ヲ「イ
ムペラートル、アレキサンダー」三世ト誤ル等
混雜シテ更ニ一致セズ之レ當日濛氣煤烟ト敵陣
ノ潰乱シタルタメ彼等自身ニ於テモ戦況ノ觀察
ハ素トヨリ同型間ノ識別困難ナリシニ原因スル
ナラン又タ馬尼刺ニ逃入シタリト傳ヘラルル敵
艦「ジエムチウグ」ノ撃沈ニ就テハ島村第二艦

隊司令官ヲ始メ艦手艦長等固ク之ヲ確認シ居ラ
ルルトモ當時殆ンド同時ニ一櫓ヲ失ヒ沈没シタ
ル「オスラービヤ」ヲ見テ濛氣煤烟ノ内ニ之ヲ
「ジエムチウグ」ニ誤認サレタルニ非ルカノ疑
アリ兎ニ角、當長官ヨリノ公報ハ我艦隊諸員ガ
見テ事實ト確認シタル所ヲ綜合シテ報告サレタ
ル次第ナレバ右様御承知アランコトヲ望ム

いかにも加藤友三郎らしいきめ細かな話であるが、
この時期の新聞や雑誌には、驚くほど戦略眼の無い記
事が躍っていた。

戦争をもっともつと続けるという現実離れのした主
張や、平和回復をお望みになられた明治天皇への抗議
までが書かれていた。

このような日本社会の風潮をたしなめるためもあつ
たのであろう、聯合艦隊首脳を代表する形で、某参謀
(後の資料では秋山眞之とされている。前にも少し触
れた)のかなり詳しい海戦経緯を解説する談話が、新
聞に掲載された。

付録39は、明治三十八年七月の一日と二日に大阪朝

日に掲載された文章である。

さして長くはないので、お読み頂きたい。

この中には、瀬戸内水軍の戦法を元にした丁字戦法や乙字戦法が用いられたことが図面によって説明されており、また七段に区分された迎撃を用意していたが用いられたのは三・四・五のみであったことが説明されている。

図の一部を図10・57に掲示した。丁字戦法と乙字戦法の解説図である。秋山眞之自らの図が元になっていると考えられる。

これらは後に多くの書籍その他に引用再録されて有名になった。

また注目すべきは、日本側の勝利の理由を強調しているが、決してロシア側を下に見てはおらず、その優秀性を認める文章になっている。

ロシアを馬鹿にする新聞雑誌の風潮に冷水を浴びせられた形である。

ロシアを必要以上に刺激すると講和で日本側が不利になることを知っている軍首脳と、知らずに浮かれているマスコミとの違いである。

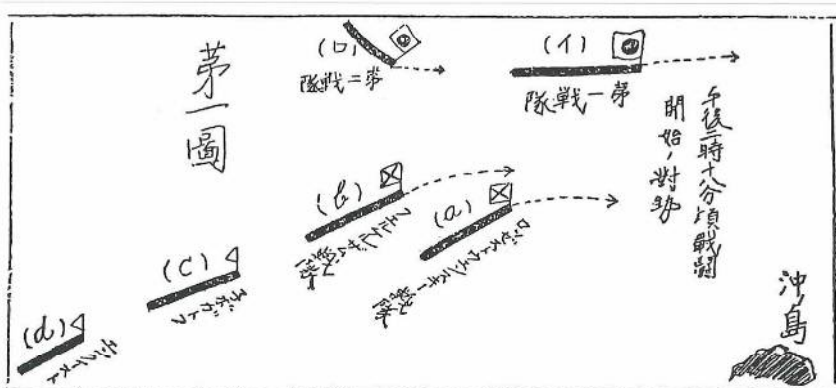


図10・57 秋山眞之による日本海海戦の解説図 (a)丁字戦法
(明治38年7月1日、2日新聞掲載)

◎山本英輔の活躍

無電開発の一翼を担っていた山本英輔は、第二艦隊の参謀であり、戦時中も無電の活用で大きな活躍をした。

海戦の中断時期には電波の到達問題について精密な実験をなして膨大な資料を作成したことは前記したが、

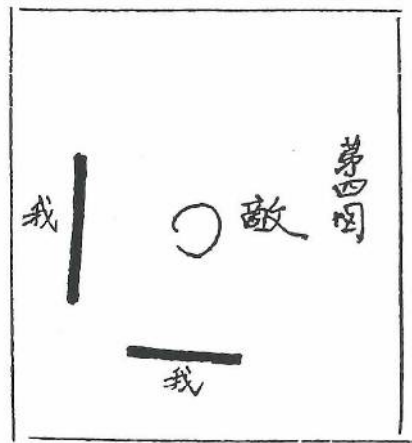


図10・57 (b) 乙字戦法

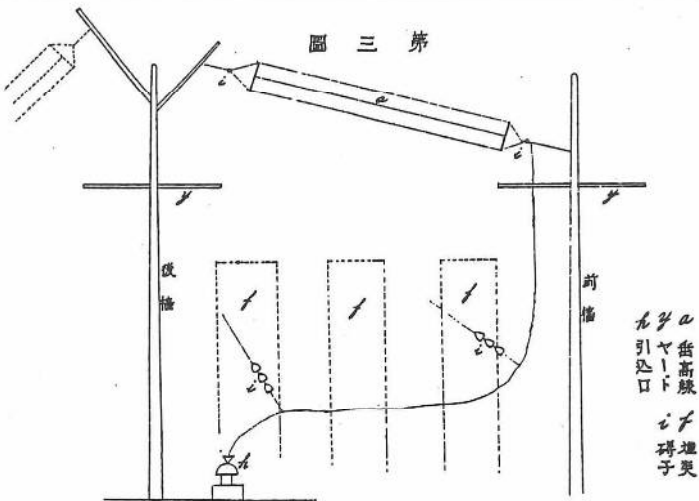


図10・58 山本英輔が「出雲」に張ったアンテナ形状

日本海海戦においては、図 10・58 にあるような、横臥式のアンテナを張って、砲撃中でも邪魔にならないような中央部に無電受信機を設置して、数多くの無電交信を傍受して記録した。

このアンテナの張り方は、山本英輔としては、砲撃中もアンテナを張ったままにできるように——と考えた結果だったらしいが、後のアンテナ理論から見れば、これは逆 L 型であり、非常に電波効率の良い形状である。

山本は多くの実験を繰り返すことによって、直感的に逆 L 型にたどり着いたらしい。

このようなアンテナと受信機によって得られた記録は、戦後東郷平八郎の書を頂いて表装し、「三笠」が記念艦になった時に寄贈された。現在も横須賀の「三笠」に大切に保存されている。

その中の記録の一部は、付録 38 にも利用してある。

山本英輔は、電波の到達距離の精密測定を試みていた時、夜間になると信じられないほど遠距離まで届く現象を発見した。

これに注目した海軍は、戦後数年たった明治四十二

年に、図 10・59 のような訓令「無線電信ニ於ケル夜間遠距離到達現象調査ノ件」を出して、電波の性質を調べようとした。

面白いのは、この文書の直前の文書で、山本が発見した夜間遠距離到達現象のことを「山本現象」と呼んでいることである。

図の文章を要約する。

艦政本部立案、海軍大臣より第一艦隊司令官宛

無電の夜間遠距離到達現象を聯合して調査するため、麾下の一艦に、次の発信をさせよ。明治四十二年三月二十日。

(一) 期間は明治四十二年四月十五日より一年間。

(二) 毎晩十一時から「トシ」なる符号を十五分間、

発電機を電源として発信する。

(三) 単式放電の場合には間隔三センチ以内とし、複式放電の場合には火花数九個のものは間隔三ミリ以内とし、複式で火花数六個のものは間隔五ミリとせよ。

(四) 無電機を装備する望楼および当直のいる各艦船は、発信予定時刻の十分前から十分後まで受信

秘寫

號一第紙界案起

明治四十一年三月六日起案 三月廿一日發

提議 艦政本部長 弁 第一節

大臣 次官 參事官 會計課

軍務局長 局員 經理局長 局員 軍令部長 次長 第二班

明治四十一年三月二十日 大臣

官房機密一四八號 海軍

無線電信ニ於ケル夜間遠距離到達現象調査ニ付

左、要領ニ從ヒ無線電信ニ於ケル夜間遠距離到達現象、聯合調査ヲ行フニ付キ、麾下ノ一艦ヲシテ發信ヲ行ハシムコト

一、本試験ハ四十二年四月十五日ヨリ始メテ年間ニ涉リテ施行ノコト

一、本試験ハ發信艦ヲシテ毎夜十時ヨリ特種區別符(Three-Digit)ニテ十五分間發電機ヲ源電トシテ送信ヲ行ハシムコト

一、該發信艦ニテ單式發信機ヲ備フルハ三艘以内、複式發信機ニテ大汽、總個數九個、モリ、各球間三耗以内若シ火花ノ個數六個ナラハ各球間五耗

以內ノ火花ヲ以テ發信ス可シ

四、受信所ニ於テハ時表、手齊ヲ與ヒ難キ虞、アルヲ以テ無線電信ヲ備フル各艦種及番直ヲ有ル各艦船ハ毎夜第二項時刻、十分前ヨリ十分後ニ至ル時、特ニ受信ニ注意スルコト

五、送信艦及受信所ハ該時刻ニ於ケル發信或受信状態(艦體火花、狀態)氣壓、溫度、天候ヲ一週間宛取纏(軍務局ニ送付スルコト)

六、受信所ニ於テ指定時刻以外午後十時ヨリ午前三時、間ニ於テ他ノ通信ヲ傍受スルコトアルハ合ワザラ報告スルコト

右訓令ス

官房機密一四八號ニ各鎮長官、各要港部司令官、第一艦隊司令長官、第三艦隊司令官、宛練習艦隊司令官

無線電信ニ於ケル夜間遠距離到達現象調査ニ付

別紙、通リ第一艦隊司令長官(訓令候條)以上心得ヘシ

右訓令ス (別紙 葉添)

海軍 大臣 軍 (終)

図10・59 山本現象の調査命令(明治42年3月)

せよ。

(五) 送信艦および受信所は、電圧電流火花の状態や気圧温度天候を記録し、一週間ごとに軍務局に送付せよ。

(六) 受信所において指定時刻以外の午後十時から午前三時までの間に他の通信を傍受した場合にはこれも報告せよ。

大変興味深い訓令だが、その結果については未見である。

ただ、夜間遠距離の通信が電離層反射であることは、海外の文献に載るようになって来たし、日本国内でも軍以外で研究は始まったので、重要性は減じたと考えられる。

電離層反射の問題以外で興味深いのは、送信機の火花放電についての指示によって、この時代（明治四十二年）には、送信機の火花放電回路に、単式と複式の二種があり、複式がさらに二種に分かれていたと判断することである。

木村駿吉の著書によると、日露戦時には複式は製造しなかったようなので、戦後に複式を製造してみた

のであろう。



図10・60 第二艦隊の旗艦「出雲」

どうやら、参考のためにマルコーニ社から輸入した無電機が複式になっていたので、日本でも試みたのだと考えられる。

最後に、山本英輔が参謀として活躍した第二艦隊の旗艦「出雲」の艦影を図10・60に示す。

図10・58でも分かるように三本煙突で、約一万トン
の一等巡洋艦である。

旗艦なので無電機は二組積載していた。

山本はその無電機を自在に操って、電波伝搬の研究から大量の無電連絡の傍受まで、活躍したのである。

木村駿吉の栄光と
戦後の事柄

◎木村駿吉の栄光

日本海海戦の捷報を聞いたとき、木村駿吉は無電工場の床にへたり込んだと述懐している。

駿吉は大変なスタミナの持ち主だったが、外波内蔵吉はじめ関係した将校のすべてが出征したため、無電機製造の責任はすべて自分一人の肩にかかっており、それだけでも大変だったであろうが、その他に現北方領土から台湾の南端まで、据付工事や修理で出掛けたし、さらにイギリス経由での多くの文献を読破整

理して文書にして提出して作戦の資料とするなど、デスクワークにも奮闘していた。

だから、戦捷を聞いてへたり込んだのも無理はない。

木村駿吉が戦時中に文書として纏めて教育本部が印刷出版した冊子類は、以下の七冊が知られている。

「無線電信ニ感應スル空中電氣ノ印象及ヒ其ノ他ニ關スル意見」

「無線電信ニ關スル諸研究及意見」

「軍用同調無線電信機ノ進歩」

「東航敵艦隊ニ装備セル無線電信ノ効力ニ關スル報告」

「無線電信ニ關スル報告」

「無線電信機ヲ以テ送信スル勢力ヲ増加セシムル研究」

「無線電信之理論實驗及實地——明治三十八年

末ニ至ル研究ノ概要——」

最後の一冊は戦争直後の印刷だが、戦時中とその直

前の技術開発の状況（軍機とされていた事柄）が極めて具体的に記されているので、当時の日本海軍無電機

の技術内容を知るには絶好の資料となっている。

その一部は前述してある。

さらに木村駿吉は、寸暇を割いて、欧米の無電機開発の状況を子細に記した本を書いた。

明治三十八年九月に内田老鶴圃から出版された、五百頁を超える大部な書物、

『世界之無線電信』

——がそれである。

これは軍機となっている海軍における無電機開発の内容は書かれていないが、当時の木村駿吉がどのような知識を持っていたかが分かる貴重な文献である。

この本の原稿は日本海海戦の直前に完成したようで、駿吉はこれを第二戦隊司令官の島村速雄少将に送って、序文を請うた。

島村速雄は後に元帥にまで上り詰めた大変な秀才で、日露戦争の前半は「三笠」に乗って聯合艦隊の参謀長を務めていた。

つまり秋山眞之の上司であったが、秋山の並外れた才能を認めて、作戦立案は万事秋山に任せていたらし

い。

後半の日本海海戦時には、第二戦隊の旗艦「磐手」（一等巡洋艦）に乗って、司令官を務めていた。

だから、この種の本の序文執筆には適任だったが、駿吉はこの軍人の家族を知っていて、親しみを憶えていたので依頼したようである。

では、日本海海戦の直前に書かれ、数日後に届いたと考えられる島村元帥の序文（礼状）を引用しよう。

書簡そのものの写真は付録10にあるので見て頂くとして、以下はその活字化である。

（改行箇所も原文のままとした）

「世界之無線電信」御稿

本御送付二預り候處時節

柄且つは御出版御急きの

事と察し、緩々拝讀の

餘暇を得ざるは遺憾

の至二候へ共其処此処と

拾ひ讀みいたし候許りにても

渺なからざる興味を覚へ

申候電信の戦争に至
大なる影響を及ぼし
候事ハ疾く人の知る所ニ
有之今回の戦役ニ於ても
大山元帥が南滿洲
一面ニ蛛の網の如く張ら
れたる電信電話線を
とふして日夕諸方面
よりの情報を得られぬ
拾萬の大軍を指揮して
古今未曾有の大勝
利を獲られつゝ有之候
ことは誰も想像いたし
得ることゝ存候へ共
東郷大将が海上ニ於て
目ニ睹る事の出来能
ハざる電波を驅て數
十隻の鱒艦を手足
の如くに指揮せられ居
り候事は一寸世人の想
像の及ひかね候事かと

存候昨年數ヶ月の間
旅順に封鎖之節などハ
大将は大抵常ニ同地より
數十里の海面に在られ
たるも旅順港外ニ配置
されたる我哨艦より無線
電信ニより日夕敵の情
報を受けられ其一小端
船の港口出入の事ニ至る
まで殆ど親く目撃せられたるが
如くニ承知せられるのみなら
ず攻圍軍日々の通報の
如きも大連灣碇泊の
中継艦を経て矢張り
電波のお陰に依り断へす
承知せられ之に従ひ我艦隊の行
動も機を失せず等しく
亦電波を介して指図
せられたりと申次第ニ有之
且つ此無線電信は陸
上電信線に依る通信の如

くにひとり発信者と受信者との間のみ二通し候にてハ無之電信器械を備へ居候各艦へも皆同時ニ知れ渡り候事なれば各艦とも新聞号外の類を待たず時々刻々新らしく且つ活きたる情報を即坐ニ承知いたし得る次第二候へ者長日月の間困難なる封鎖勤務ニ於て全軍に些少の倦怠の気味をも生ぜずして相濟みしは主として無線電信の賜物と相感申候他年若し当時各艦より発せる無線電信の單二一日分のミにても一読いたし候者趣味津津たるを覺へ可申と存候而て我海軍の無線電信をして右の如くニ

有効ならしめたることは貴下多年御尽力の功多きニ居候事と只管敬服いたし居候惟ふに本邦に於ても無線電信の事を研究せる人士數からさるへしと存候へ共時局の必要ニ迫られ専心一意學理と實驗とを併わせ貴下ほど充分ニ此事を研究せる士は恐らくハ復た他ニ有之間敷而て今其人ニ依りて斯學の好著述世ニ出候事ハ誠ニ科學界の至幸にして定めて非常の歡迎を受けられ候事と今より確信いたし居候殊ニ貴下御序文中に於て此最も新らしき科學の發明に係る巧緻の機械を最も古

くより伝来せる大和魄を以て
今はのきわ込泰然として

使用せる軍艦吉野無線

電信係下士卒の忠烈

なる事績を紹介せられたる

事は唯ひとり小生が肅然として

当時の事を回想し亡友

佐伯大佐も定めて地下二

満足いたし候ハんと察して

最も会心の点二有之候のみ

ならず此事蹟たるや科

學の進歩が教育の注意

二依り決して我大和魂に些少

の影響だも与ふるもの二あら

ざることを證明いたし候もの

にて識者の擧て満足感謝

すへき事と存候抑も無

學なる小生か如きものは

日夜無線電信の恩沢

に預りながら其原理の如き

ハ今に了解二苦み却て

他の感想二馳せ開戦以

来我四千餘萬の同

胞が各其分二應して

義勇公二奉しつゝある

至誠天二通し一種靈妙

にして物質界の電波二對

比せる正氣の波動を起し

出征軍隊と後援國民との間二

互に相感應して斯く都合

克く戦局を進めつゝある二

あらずや而て其氣の凝るや

恰も電氣の結んで雷電

となれるか如く或ハ奮激死二

赴くの決死隊となり或ハ從

容死二就く吉野電信係

の如きものとなり壮烈鬼

神を泣かしむる幾多忠

勇の士を現ハしつゝある二

あらずやなどの觀念

を起し候事二有之候餘事

ハ扱措き貴著述二對し

序文御求ニ預リ候處

こは甚た小生のがらに

なき大役ニ御坐候間平に

御ことわり申上候代りに

若し此俗文中記載いたし

候事柄にして何等乎の

お役に相立ち候ものも

有之候ならハ御随意ニ

御使用可被下候先は

他に先ち貴著拝讀

の光榮を得候事の御

礼且つハ昨年来度々の

御懇書并ニ珍う敷外国

新聞紙御惠贈に對し

何等御挨拶も不申上りし

不埒の御詫を兼ね

右迄申述度時下不順

の候益御自愛斯學

の御研究を重ねられ

遠からず貴著標題ニ

二字を加へ世界無[○]比[○]

の無線電信を我

海軍に貢獻せられん

こと切望の至に御坐候

敬具

明治三十八年五月二十五日夜

時々刻々「波爾的艦隊見ユ」

との無線電信を待ちつゝ

軍艦警手電燈の下

に於て

島村速雄

木村駿吉先生

案下

流石は海軍きつての大秀才といわれた島村元帥の書簡である。

この書簡そのものは、後に海軍館が原宿に出来た時、無電機の模型とともに飾られた。

海軍館の入口は正面玄関だが、そのすぐ向かって左に出口があり、出口近くの廊下のような場所に展示さ

れていた。

秋山眞之からの書簡も同様に飾られていた。

次に、海戦が一段落した後、先任参謀・秋山眞之から木村駿吉宛てに送られた礼状を示そう。

図10・61がそれである。

独特の達筆で読みにくいので、活字にしておく。

改行は現物のとおりにしてある。

拝呈

日本海之大捷

眞二御同慶至

極今次の決戦

固より皇軍の

必勝ハ期居候もの

の斯迄とは乍我

豫想不仕是れ

一ツニハ天佑神

助の然ラシムル次第

トハ存候得共無

我無心なる武器

の効能も亦頗る

著敷就中

無線電信機の

武功抜群なり

しニ就ては小生等

の深く貴下ニ感謝

する所ニ御座候

由來戰略的兵器

として無線電信

機の効力偉大

なるハ皆人の認知

せる處旅順の難

鎖之レガ爲ニ遂行

被致對州海峽の

哨戒監視之れあ

りてこそ成立致し

たる次第ニて彼の五

月廿七日朝敵艦隊

見ユトノ信濃丸の

電信を感受たる

我々の歡喜譬フ

ルニ物無く即ち此
警報の達したる
午前五時八皇軍
大捷の決定したる
千金の一刻とも
可申尔後彼
我合戦の結果は
自然の兵理ニ
基ケル當然の成敗
ニテ左程珍奇のも
のニも無之乎と愚
信致候蓋し開戦
以来煩砲水雷の如
き腕力的武器の効
力も亦卓絶致居た
るニハ相違無之候得共
適當の時機ニ適當
の地点ニ之ヲ指導スル
を得たるもの全ク無
線電信の機能と
称ゆるの外無之如

何なる堅艦速艇
ニても聲啞ニては
何の働も出来申
間敷若夫レ我々
司令部員か此海
戦ニ於て奉公の應
分を盡シ得タリトセ
ハ其用ヒシ武器は
無線電信機ト鉛
筆トニ脚機^{コンパス}ニテ
是れ特ニ貴下ニ対し
茲ニ深厚の謝意を
表スル所以ニ御座候乍
然武器の能力ニ対
スル我々活用者の欲
望ハ中々ニ際限無
御座候無線電信機ニ
も未だ改良進歩の
余地多く有之様相
覚尙又貴下の御工
夫を煩度点も不

の初結と初結
 身も美能中
 言流言流流
 玉の珠群
 心之能今も小生も
 の心、美之の心耐
 うる以て心也
 由承我始の心也

心之能今も小生も
 心之能今も小生も
 心之能今も小生も
 心之能今も小生も
 心之能今も小生も
 心之能今も小生も
 心之能今も小生も
 心之能今も小生も

夫の如くは彼の如
 月七日の朝、臨行、既
 又、この流、深心、の
 毫、流、を、感、受、したる
 我、この、歎、を、感、ず、
 る、物、を、う、可、か、然
 愛、親、の、道、——、た、ら
 年、亦、亦、め、の、皇、年、

本、婚、の、決、意、——、に、
 今、一、刻、の、
 万、年、——、公、徳、彼
 終、合、成、に、法、を、と
 事、生、自、然、の、無、理、に
 基、た、ん、者、先、の、成、敗
 二、言、於、此、路、亦、あり、と
 及、こ、こ、は、三、乎、と、云、

後世に是の常環
 一系を煥然と盡すのみ
 一腕力の内巻つ初
 わり亦年倍流るに
 子にハ左遷を之に指す
 遠き方の極に遠き
 の地と之より指導之
 を増たるとも金々金

後世の極端と
 縁ゆり外を之に以
 何なる空體に逐
 たりは新年一運に之を
 何と流し公年一
 万葉の義史の後
 司金部、冬に其
 致に於る事公一感

念を盡し得たりとせ
ハ其用ヒシ次第と
重なる様ト銘
事トニ飾様ト
是を然と考下と對し
落し得るの耐意を
表す所以と成す
先或器の能力と對

之類と用者との
實中との際限を
明し其後電信等
と其及良進等
其化多しと考下
是亦又考下の意を
又之類と成す
尤も其化の得る層の

福と名望可了
 志は只此の道
 之河婦 是止
 之河婦 是止
 一平 七也
 六月十日
 北極能三益
 亦如真之

不打破天孫
 千代

少二付他日得拜眉を

縷々要望可申

述今日ハ唯々今日迄

之謝辞呈上仕

度不取敢勿々

一筆如此候

敬具

六月十日

於旗艦三笠

秋山眞之

木村駿吉様

虎皮下

この書簡も前述のように海軍館に有ったようだが、同じ内容の書簡を掛け軸に表装したものが、現在の横須賀の記念艦「三笠」に収蔵されている。

これは、「三笠」が記念艦として保存されることが決定した時に、展示用として同じ文面の書を晩年の秋山眞之が改めて書いたものらしい。

文章は全く同じだが、改行位置や書き直しの様子が、木村駿吉が受け取った手紙とは違っている。

秋山眞之の名文は有名だが、この書状の文章もじつに名文であり、読むと感激する。

秋山が比較的早くに没したとき、郷里に銅像が建てられたが、そこに「知謀如湧」という東郷平八郎の揮毫が彫られた。

また、晩年に秋山は、

「一息を入れて見おろす上り坂」

——という句をつくっており絵葉書になっているが、明治の天才戦略家が必死になって坂道を登り、日本を守り抜いて一息ついた心境がよく表現されている。

司馬遼太郎の『坂の上の雲』も、これに触発されて付けられた題名なのであろう。

そしてその心境は、木村駿吉も同様だったであろう。

図10・62に、前述の書と絵葉書を示す。

また図10・63に、名将・島村速雄の肖像写真を示す。

木村駿吉はその後、凱旋した軍の要人たちの来訪を無電工場で迎えるなどして晴れがましい舞台に立ち、またある祝宴で東郷平八郎に紹介されて握手を賜ったとされている。



図10・62 右:秋山眞之晩年の句、左:没後銅像への東郷元帥の揮毫



図10・63 島村速雄元帥

後述するように、勲三等の叙賜もあったし高等官二等の勅任官にもなった。

未亡人の思出談では、無線電信の歌が出来て芸者衆が唄ったそうである。

明治三十七年十二月十日から明治三十八年十月十六日まで木村駿吉の指揮で横須賀工廠造兵部無電工場に製造した三六式無電機の数は、記録によると二八〇台であった。

三六式が制式化されてからの総数は、たぶん、四〇〇台に達したであろう。

当時の世界の無電技術水準から見ると、大変な数であった。

恵まれない技術環境の中で、よくぞやったと思う。

◎戦後の事柄

日本海海戦ののち、木村駿吉の身に起こった事柄を、アトランダムに記しておく。

図10・64は、海戦で捕獲したロシアの「インペラートル・ニコライ一世」号である。

これは修理のうえ日本海軍に移籍されて、「壹岐」という名の二等戦艦となった。

この時、無電機はテレフンケン製から日本製に変更した。他の捕獲軍艦も同様な措置をしたようである。

どうやらこの改修の時木村駿吉は、この艦の無電機を子細に調査したらしい。

その結果として、送信機と受信機が分離せずに置か

れているので、送信電力が受信機に入ってコヒーラがすぐに壊れてしまっただろう・・・と判断している。駿吉は、ロシア側が無電連絡をほとんど活用しなかった理由を、この非分離による破損と考えたようである。



図10・64 捕獲したインペラートル・ニコライ一世
(改装されて日本海軍所属となった「壹岐」)

(無電機のために随行してきたドイツの技術者たちが途中で降りてしまった理由として、ロシア兵のモラルの悪さが言われているが、ドイツで設計した無電機が船舶用ではなく、とても壊れやすかった事も理由の一つだったのだろう)

ただ、自尊心の高い駿吉も感心したものに、ドイツ製の波長測定器があつた。

LC回路の共振を利用するものだったが、日本側ではここまで気づかず、制作していなかったので、感心したのである。

大正期に入って交流回路の理論と技術が発達してからは、当たり前のことになったが、明治三十八年ごろには、最先端の技術だったのであろう。

駿吉はすぐにその原理を理解し、同じようなものを製造して、海軍に登録した。

性能は似たようなものだったらしい。

この測定器によって、日本の無線の波長も分かるようになった。

前にも記したが、大型艦では大体六〇〇メートルくらいだったらしい。

同年八月十八日付けで、木村駿吉の意見が横須賀海軍工廠長名義で提出された。

内容は、新たに無線電信委員会を作る必要があること、および、米国等への視察の必要性である。

いかにも木村駿吉らしい提言である。

文章は図10・65に示した。

図10・66と67は、前述した海戦直後の駿吉の出版物である。

『世界の無線電信』は一般向けの書物であるのに対して、『無線電信之理論實驗及實地』は、日露戦争で使用された日本の無電機を木村駿吉が開発した経緯が、技術的な豊富なデータを駆使して説明されている専門書である。

したがって、当時の無電機の技術的側面を理解するために必読の書物と言える。

当時の陸海軍はじめ政府要人たちは、形の上では勝利したものの、ロシアと講和条約を結ぶことの重要性と困難性を熟知しており、苦心惨憺していた。

第二十五號 帝國海軍無線電信制定ノ爲メ委員會設置竝ニ米國海軍無線電信所視察等ニ關スル水村海

軍技師ノ意見(三十八年八月十八日横須賀海軍工廠長海軍少將伊東義五郎提出)

帝國海軍無線電信ハ明治三十六年末ヨリ三十七年ノ初ニ營リ出師準備ノ際ニ於テ改良セラレテ直ニ之ヲ採用シタルモノニシテ爾來艦船望樓ニ裝備セラレタルモノ百有餘箇所ノ多キニ及ヒレト雖モ戰役二箇年間ノ經驗ニ徴シ或ハ又戰後ノ海軍計畫ニ對シ或ハ又無線電信ノ世界ノ進歩ニ應ジテ機械ノ改造規定ノ新設セラルヘキ事項少シトセス抑無線電信ノ事タル各國何レモ海軍ヲ以テ主班トナレ其ノ制式ニ至リテハ技術上ノ能不能ヲ考究シ作戦計畫ト對應シテ軍令部ニ於テ之ヲ査定シ技術者ハ該査定ヲ目的トシテ試驗研究ニ從事スヘキモノナルカ故ニ戰役中ノ經驗ノ印象尙新鮮ナル際ニ於テ委員會ヲ設置シ横須賀鎮守府司令長官ノ指揮ノ下ニ機械、建築、裝備等ノ技術工藝ニ關スルモノ、外苟モ帝國海軍無線電信ニ附隨スル諸他ノ問題ニ就テ調査研究セレメフレンコトヲ申請ス

該委員會ヲ組織スルニ當リテハ戰役中親シク無線電信ノ應用ニ關係シタル左ノ諸員ヲ以テ委員ニ任セラレンコトヲ希望ス

- 軍令部參謀 一名 戰役中ノ望樓監督官 一名 戰役中ノ出征艦隊參謀 一名
- 戰役中ノ出征艦隊將校 一名 横須賀造兵部々員 二名
- 其ノ他必要ノ係員若干名

戰役中出征下士 二名

准士官、技手、下士若干名ヲ委員附トス

無線電信ノ如キ戦近ノ發明ニシテ其ノ進歩ノ速ナルモノニ在リテハ我カ海軍ニ於テモ各國ニ於ル改良ニ伴ヒテ絶エス調査研究スル所アフシメ數年ヲ隔ル毎ニ改定委員會ヲ組織シ以テ我カ海軍ノ重要兵器ノ整備ヲ保持シ同時ニ之ヲレテ各國海軍ノ水準線ヨリ低下セレメサランコト合セテ茲ニ申請スルモノナリ

図10・65 水村駿吉による、日露戰役後の無線研究のあり方に関する進言の中の新無線調査委員會設立の提案

無線電信 之 理論實驗及實地

明治三十八年未至ノ研究ノ概要
海軍技師 木村駿吉述

海軍教育本部

明治三十九年二月

目次

§ 1.	紙本範圍に於ける研究の感説……………	3
§ 2.	此等研究に依て到達せんとしたる目的と理想……………	7
§ 3.	目的を達するに必要なりと豫想したる條件……………	9
§ 4.	現波管の動作は蓄積作用に依るものならず……………	13
§ 5.	連結式送信装置は單極の電波を發生するものならず……………	18
§ 6.	二種基本電波を利用するに就て三箇の問題を生ず……………	20
§ 7.	電波の波徑及び之を變更する方法……………	22
§ 8.	波徑測定法の進歩……………	27
§ 9.	火花の抵抗……………	32
§ 10.	火花長と放電々數……………	36
§ 11.	送信勢力を増加せしむる諸種の計畫……………	41
§ 12.	空中線の架装法……………	46
§ 13.	二箇以上の空中線と電波の會合現象……………	50
§ 14.	空中電氣の妨害……………	56
§ 15.	増幅……………	60
§ 16.	非常遠距離傳達の現象……………	66
§ 17.	送信空中線より轉射するパワー……………	69
§ 18.	送信に關する諸量の實用公式……………	74
§ 19.	受信に關する諸量の實用公式……………	78
§ 20.	送信機電の電源に對する各種の負擔……………	85
§ 21.	空中線の形狀並に其の効力の比較……………	89
§ 22.	送信装置の種別並に其の勢力の比較……………	96
§ 23.	各種送信装置に於ける空中線の電壓並に電流……………	99
§ 24.	受信装置の種別並に其の感度の比較……………	104
§ 25.	研究すべき同調曲線に五種の區別あり……………	109
§ 26.	遠距離通信と共振なる同調は兩立するものに非ず……………	115
§ 27.	無線電信の軌跡は不可避事實として之を利用せざるべからず……………	121

図10・67 無線電信之理論實驗及實地
(明治39年2月/海軍教育本部)

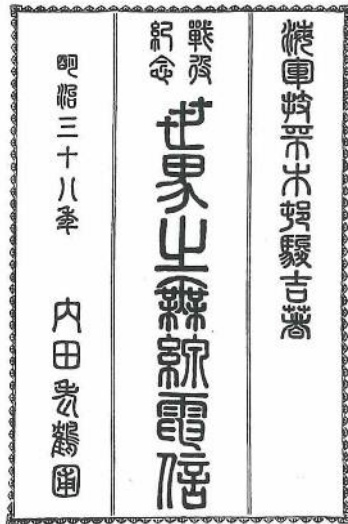
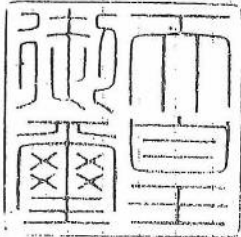


図10・66 世界之無線電信
(明治38年9月/内田老鶴園)

版明治三十八年九月五日亞米利
 加合衆國「ホーウマ」(ニエー、ハム
 プシヨ州)ニ於テ朕カ全權委員ト
 露西亞國全權委員ノ記名請印シ
 タル講和條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ
 公布セシム

睦仁



内閣

明治三十八年十月十六日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太郎
 外務大臣 伯爵 松岡 洋右

日本國皇帝陛下及全露西亞國皇帝陛下
 ハ兩國及其ノ人民ニ平和ノ幸福ヲ回復
 セムコトヲ欲シ講和條約ヲ締結スルコ
 トニ決定シ之カ為ニ日本國皇帝陛下ハ
 外務大臣 從三位 勳一等 男爵 小村 壽太郎
 閣下及亞米利加合衆國駐劄特命全權公
 使 從三位 勳一等 高平 小五郎 閣下ヲ全露
 西亞國皇帝陛下ハ「アレクサンダー、オヴ、ゼ、コム、ミ
 ツチ、オヴ、ミニスター、オヴ、ゼ、エム、バイ、ア、オヴ、ロ、レ、ア、セ、ク、レ」
 タリ、オヴ、ス、ラ、ト、セル、ジ、ウ、キ、ツ、テ、閣下及亞米利
 加合衆國駐劄特命全權大使「マ、ス、ター、オヴ、ゼ、イ
 ム、ビ、リ、ア、ル、ミ、ルト、オヴ、ロ、レ、ア、男爵、イ、マ、ヒ、ロ、セ、ン」閣下ヲ
 各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權
 委員ハ互ニ其ノ委任状ヲ示シ其ノ良好
 妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條款ヲ協議
 決定セリ

内閣

第一條

日本國皇帝陛下ト全露西亞國皇帝陛下
 トノ間及兩國並兩國臣民ノ間ニ將來平

図10・68 日露講和條約冒頭部分

日本側の譲歩はギリギリの所でやむを得ないことだったが、マスメディアは弱気だ弱気だと大合唱し、政府を困らせた。

世界における日本の地位が理解出来ず、戦略眼が欠落していたのである。

結果として九月五日に調印され、十月十六日に公布された講和条約の冒頭部分を図10・68に示した。

この講和が成立した理由は多数あるが、木村駿吉の無電機もその一つであった。

駿吉自身は何も語っていないが……。

講和が成立した直後の旗艦「三笠」に大災厄が見舞った。

九月十一日、佐世保に凱旋して碇泊していた「三笠」に大爆発が起こり、沈没し、多くの死者が出たのだ。

実に衝撃的な事件だった。

この爆沈の原因については、海軍内に調査委員会が出来て調査されたが、公式的には、「不明」という結論が官報に発表された。

実際には、規律のゆるんだ下士卒たちが、弾薬庫の傍でローソクを立ててアルコールを飲んでおり、その

ローソクの火がアルコールに引火して広がり、火薬を爆発させたものだったらしい。

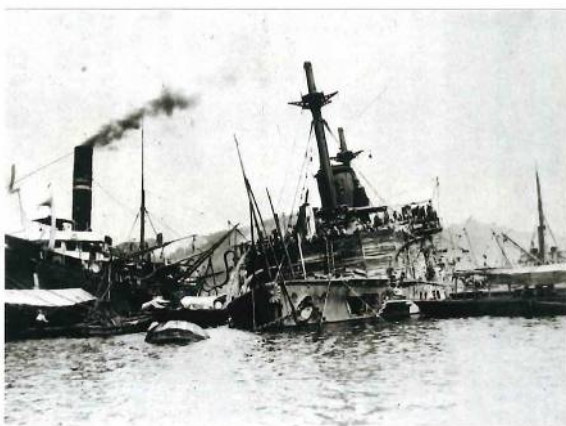


図10・69 佐世保で爆沈した「三笠」浮揚作業
(明治38年9月11日、艦内爆発により爆沈)

海軍も薄々その事に気づいてはいたが、責任追及によって犠牲者をこれ以上出さないように、配慮したのであろう。

しかし伊地知彦次郎艦長が受けた衝撃は大変なもので、自決を図ったが果たさず、上官同僚から説得されて役職に戻ったものの、早死にした。

大変な部下思いの艦長だっただけに、本人も周囲も無念だったであろう。

この事件は秋山眞之の宗教観にも影響したと伝えられるが、あまりうがった見方は出来ない。

図10・69は爆沈した「三笠」の浮揚作業の写真である。

この頃の木村駿吉は時の人であり、いろんな新聞記事があり、中には無責任な記事もある。

図10・70は明治三十八年十二月二日の読売新聞朝刊の記事だが、木村駿吉が近く工学博士の学位を授与されると書かれている。

しかし実際には、工学博士は授与されずに終わった。

有名人ともなれば、嫉妬による誹謗記事が出るのは世の常だが、木村駿吉も同様で、工学博士論文はデッドコピーであるとか、無線電話の成功は他人の成果を盗んだのだとか、日本海海戦の無電機はドイツ技術を盗んだのだとか、無責任な新聞記事や雑誌記事が掲載

された。

●學位授與
無線電信の研究者として有名なる海軍技師木村駿吉氏の此程論文を提出し博士會に於て審議中なりしが近々工学博士の學位を授與せらるべしと云ふ

図10・70 工学博士學位授與の新聞記事

工学博士問題では、海軍と開発競争をしていた通信省や京都大学が激しい競争意識を持ったらしい。

(なお駿吉は、東北大時代にも理学博士論文を提出して失敗したことは前述した。アメリカの博士學位は得たが、日本では理学博士も工学博士も取得に失敗したのである。筆者の率直な意見では、論文の質よりも、極端なまでの根回し下手が失敗の原因だった可能性が高い)

無線電話問題では、駿吉の部下で性格の合わない人物が通信省と結びついていたらしい。

ドイツ技術問題は、ドイツの学者の負け惜しみだと

言われている。ドイツ製の無電機が日本海海戦でほとんど役に立たなかつたことへの負け惜しみである。

図10・71は、木村駿吉と直接の関係は無いが、当時の日本海軍の先見性を示す意味で掲示した。

日露戦争の前半において、日本側は大切な軍艦を何隻も失うという惨事を経験した。

この時海軍大臣の山本權兵衛は、即座に対策を講じたが、その中の重要な項目に、潜水艇の採用があつた。大形の軍艦を何隻も製造したり購入したりするのは時間がかかるし経済状態が許さない。

そこで安価に出来る潜水艇に目をつけて、ただちにアメリカに発注して購入し、潜水艇部隊を作つて大形軍艦の損失を埋め合わせようとしたのである。

当時は潜水艇など役に立つかどうかどうかも分からず、技術も未熟な時代だったが、後に極めて重要な軍艦であることがわかり、その重要性は現在も同様である。

このことから、山本權兵衛の先見性の鋭さは見事であつたと思う。

図の上は明治三十七年五月二十三日に桂総理に宛てた文書である。

また下は、その企画が実つて潜水艇隊が出来ることになり、明治三十八年十二月十一日に公布された、我國初の「潜水艇條例」である。

なお木村駿吉は、戦前の欧米視察の際、発明家が考へた潜水艇を見学したが、あまり良い印象は持たなかつたらしい。

図10・72は、この時代の木村駿吉の肖像写真である。おそらく、無電機開発の功績で受章した際の記念写真であろう。

明治三十八年の木村駿吉は三十九歳であり、秋の誕生日で満四十歳であつた。

現在ではまだ若造の年齢だったが、明治期における軍人は、三十歳で多くの兵士を統率していた。

露國ニ對シテ戰ヲ宣ハシテ未月ヲ
 連戰連勝以テ此間帝國海軍ハ
 艦ヲ握有スルニ至リ而シテ全權
 艦ハ港内ニ宿留シ浦島ノ艦ヲ
 不替水ニテ僅ニ其ノ餘ヲ留メ
 ノ情勢ヲ見ルニ及ヘリ我艦隊ノ
 作戦ハ一見動ルニ及ヘリ我艦隊ノ
 關艦一隻ヲ知ルニ及ヘリ我艦隊ノ
 水雷一隻ヲ知ルニ及ヘリ我艦隊ノ
 洋艦一隻ヲ知ルニ及ヘリ我艦隊ノ
 中略

クモ前記ノ隻數ヲ下ル可キルヲ
 ム現ニヤ如上ノ理由アルニ於テ
 連ニ之ヲ遂行シ以テ彼我ノ對勢
 ヲ維持スルコト極メテ緊要ナル事
 屬シ大臣ノ切ニ焦慮スル所ナ
 依テ茲ニ本大臣ハ臨時軍事費ノ
 支出トシテ裝甲巡洋艦ヲ製造
 且裝甲巡洋艦ヲ製造スルニ及
 間ニ於テ洋艦ヲ建造スルニ及
 紙要ナル機械ヲ添付シテ製造
 後略

勅令第二百六十一號
 第一條 鎮守府及要港部ニハ必要ニ應
 シ潜水艇隊ヲ置ク
 第二條 潜水艇隊ハ潜水艇二隻以上ヲ以テ編
 制ス
 第三條 潜水艇隊ニ左ノ職員ヲ置ク
 司令
 機關長
 前項ノ外必要ニ應シ潜水艇隊附トシ
 テ將校同相當官及下士卒ヲ置クコト
 ヲ得
 第三條 司令ハ所屬長官ノ命ヲ兼ケ潛
 水艇隊ヲ指揮シ部下ヲ董督訓練シ軍
 紀風紀ヲ維持シ兵備ヲ監理シ及隊務
 ヲ掌理ス
 第四條 司令ハ第二條ニ掲クル職員ヲ
 部下ノ潜水艇ニ分掌セシムルコトヲ
 得又教育訓練上必要ト認ムルトキハ
 部下ノ甲潜水艇ノ乗員ヲ臨時乙潜水

図10・71 上は山本權兵衛海軍大臣による巡洋艦・潜水艇などの緊急造船の懇望文／下は最初の潜水艇條例
 (上は明治37年5月23日桂總理宛／下は明治38年12月11日公布)



図10・72 木村駿吉
(無電機開発の功績で受章
した頃と考えられる)

十・九

代表的な暗号電文と戦後の日録

◎代表的な暗号電文

ここで、無電の警急信号以外の重要な暗号電文をいくつか記しておく。

これらのあるものは海底ケーブルと陸上ケーブルで送られたし、またあるものは無電のやり取りを傍受した無電望楼から東京の軍令部に有線で送られたものである。

傍受無電を東京に送った望楼の代表格は大河内望楼だったが、他の望楼もあった。

ここでは、取り上げた暗号電文の符丁の意味を示しておく。
 三字符丁の詳しい一覧は付録24にある。また二字符丁は付録25にある。それ以外の符丁は付録26～28にある。

電報送達紙		電報送達紙		電報送達紙	
局	着	局	着	局	着
東京	午後1時	東京	午後1時	東京	午後1時
東京	午後1時	東京	午後1時	東京	午後1時
東京	午後1時	東京	午後1時	東京	午後1時
東京	午後1時	東京	午後1時	東京	午後1時

至急

東京 午後1時

東京 午後1時

東京 午後1時

東京 午後1時

図10・73 出撃報告の暗号文 (軍令部受信紙)

図10・73は、図10・41に地の文を示した出撃報告電文の暗号文である。両図を見比べて頂きたい。

次のように三字符丁が使われている。

(アテヨ) ↓ 「敵」

(イカヌ) ↓ 「艦隊」

(ノレツ) ↓ 「聯合艦隊」

(ヲハイ) ↓ 「ハ」

(ヨシス) ↓ 「出動」

(ワケフ) ↓ 「撃沈」

(ウメル) ↓ 「滅」

見比べると、図10・41は忠実な翻訳で、後にそれがやや変形されて一般に流布したことが分かる。



図10・74 最初の戦捷報告の暗号文
(軍令部受信紙)

次に、大河内望楼が中継して軍令部に電送した最初の捷報である図10・45の暗号文を図10・74に示す。

これは、艦隊から望楼まで無電で電送したと考えられ、まだ海戦中だったので、敵に解読されないよう、三字符丁が多く使われている。

(ノレツ) ↓ 「聯合艦隊」

(モヲカ) ↓ 「沖ノ島」

(イテク) ↓ 「敵艦隊」

(セヲイ) ↓ 「ヲ」

(ナヨメ) ↓ 「要撃」

(イテラ) ↓ 「敵艦」

(セスホ) ↓ 「少クモ」

(イヲ〇) ↓ 「四」(数字符丁)

(チセテ) ↓ 「隻」

(ワケフ) ↓ 「撃沈」

(タワモ) ↓ 「我艦隊」

(リソシ) ↓ 「損害」

(セスヘ) ↓ 「少シ」

(エクメ) ↓ 「駆逐隊」

(シスロ) ↓ 「水雷艇隊」

(ヲハイ) ↓ 「ハ」

(ネシル) ↓ 「襲撃」

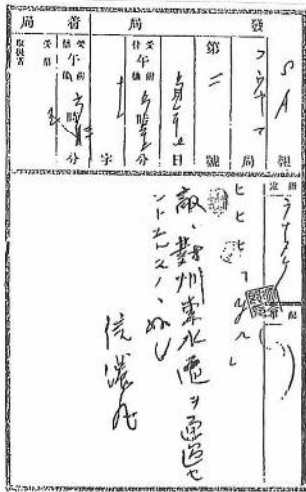


図10・75 暗号電文例1
(一字連送)

図10・75は、二十七日の早朝、「信濃丸」がタタタ・
 ・を打ったあと、敵艦隊は対馬の東水道を通過するら
 しいと判断して打電した一字連送の警急信号を、対馬
 南端部の神山望楼が傍受して軍令部に知らせた電文で
 ある。同一用紙に暗号と訳文の双方が記されている。
 前に詳しく記したように、一字連送は「ヒヒヒ」「
 エ」である。

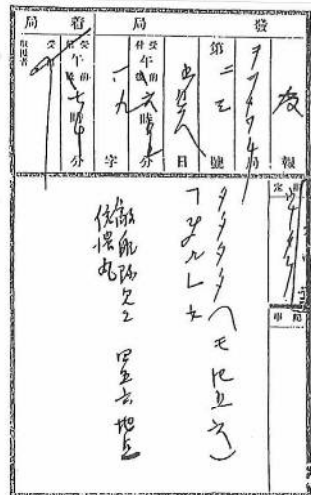


図10・76 暗号電文例2
(一字連送と海域数字)

図10・76は、大海戦の翌朝、「信濃丸」が山陰地方の
 海域で残敵を発見した通報（その後の調査で錯覚だと
 判明したらしい）を、大河内望楼が傍受して軍令部に
 送った電文である。

タタタタ (モヒヒヒ) エ
 ————という暗号である。
 二十七日の早朝にバルチック艦隊を発見した際も、
 この電文の四五六を二〇三に変えただけのものだった
 であろう。これに時間が入っていたかも知れないが。
 なおこの電文を二十七日早朝のものと混同している

記事が時々見られるが、日付も場所もまったく異なっている。

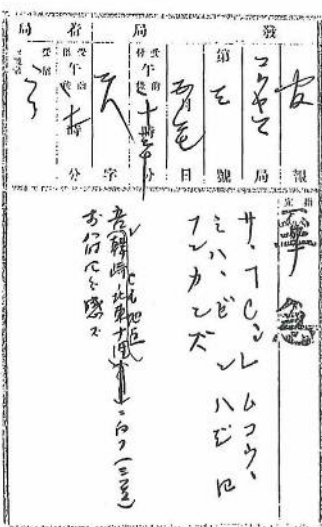


図70・77 暗号電文例3
(海域アルファベット)

図10・77は、アルファベットの海域符号が使用された例である。

神山望楼で傍受した結果の報告なので、曖昧な所があるが、「三等」がC I地点を指示している様子が分かる。C I地点とは対馬の北で、図10・25の右上に記されている。

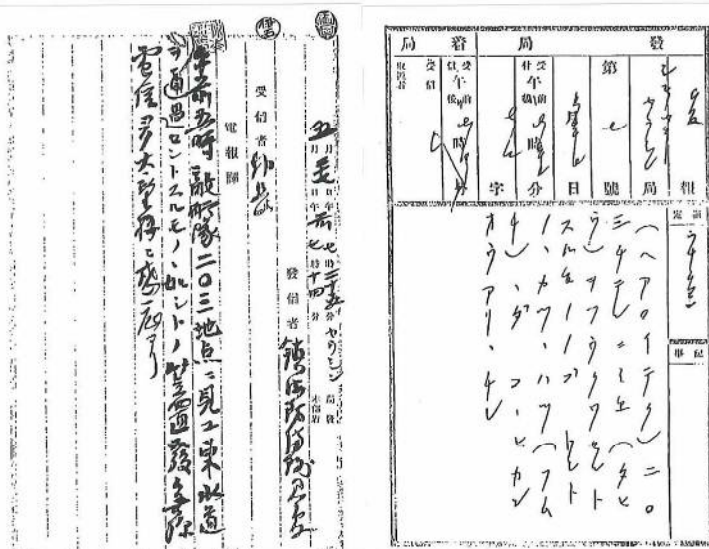


図10・78 暗号電文例4
(時間表示)

図10・78は、時間を示す符丁が使用されている例である。

冒頭の(ヘア〇)は付録27にあるように、午前五時を表す三字符丁である。

これは、「信濃丸」の緊急信号を「笠置」が中継した無電を、巨済島に設置された多太望楼が傍受した内容で、聯合艦隊根拠地の鎮海湾の留守部隊が軍令部に通報した電文である。

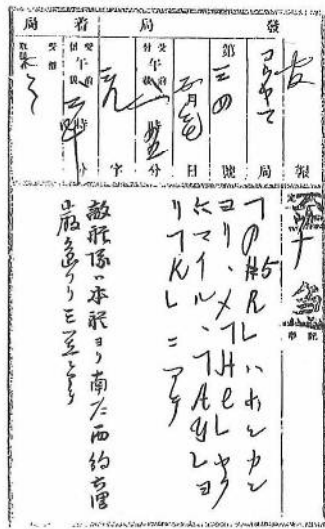


図10・79 暗号電文例5 (方位表示)

図10・79は、方位を示す符丁が使われた例である。「敵艦」が「三笠」に敵艦隊位置を報告した無電を神

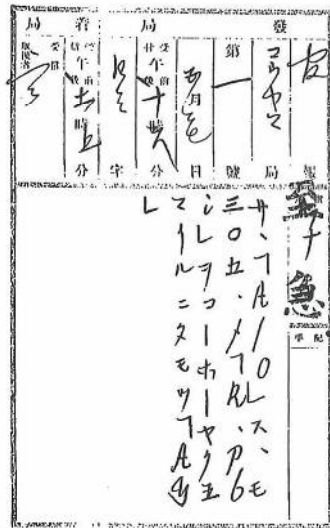


図10・80 暗号電文例6 (時間と方位表示)

山望楼が傍受して軍令部に送った電文で、メ「He」が使われている。

付録26をご覧頂きたいが、メは「」の中が方位符丁であることを示し、Heは南一ノ二西を意味する。

次の図10・80は、時間と方位の双方が使われている例で、「嚴島」が現在位置と針路を報告した無電を、神山望楼が傍受して軍令部に送ったものである。

「A10」ス
 ——とあるが、「」は付録27にあるように午前一時を示し、スは付録30にあるように「」が時間符であることを示している。

メ「R」
 ——とあるが、メはこれが方位符であることを示し、Rは北東微北を表している。

同時に地点を示すモと地点数字三〇五も使われている。

RのあとのP6iは敵艦隊の主力を意味するらしい。

図10・81は、数字符が使われている例として示した。地の文は左側を読めば明確だが、「信濃丸」が発見し

図10・81 暗号電文例7 (数值表示)

た後の敵艦隊の位置や航路と日本艦隊の様子を、鎮海湾奥に待機していた特務艦隊旗艦が巨済島松眞浦里の陸上電信局を経由して軍令部に送った電文で、飛び交う無電を鎮海湾で傍受して得た情報を軍令部に送ったのであろう。

メ(イタ〇) ↓十五(隻数)

(イセ〇) ↓十三(速度)

これらの数字符については付録28に一覧がある。

◎記念の資料

明治期の日本海軍では、電気技術が必要とする兵器の習得は「水雷術練習所」でなされていた。

当時は水雷がもつとも電気技術を多く用いる兵器だったからである。

したがって電気に関連する教育施設も先生もそこに集まっていた。

だから必然的に、無電技術の訓練も「水雷術練習所」でなされたのである。

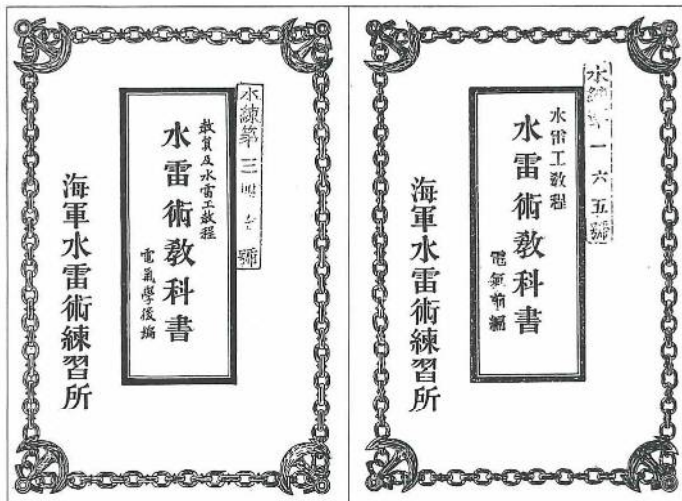


図10・82 日露戦役前後に使用された水雷術練習所の電気・通信学教科書

日露戦争の前後にここでなされた電気技術についての講義に使われた教科書が残されているので、その書

影を図10・82に示した。



図10・83 バルチック艦隊発見時の信濃丸
(山高五郎画)

明治三十八年五月二十七日夜明け前の「信濃丸」によるバルチック艦隊（敵第二艦隊）発見の様子は、一種の国民叙事詩になった日露戦争物語の一つのハイラ

イトであり、語り継がれているが、この時の「信濃丸」の艦影を絵画に描いた画家がいる。

山高五郎といって、船の研究者であり、資料を発表すると同時に船の絵画も多く描いた。

その中でも特に有名なのが、「信濃丸」による敵艦隊発見の模様である。

横須賀の記念艦「三笠」ほかに、似た絵がいくつか残されているが、図10・83に掲示したのは、昭和十七年に氏が出版した『日の丸船隊史話』に飾られたものである。

船舶史研究の専門家だけあって、じつにリアルに描かれている。

「三笠」が記念艦として保存されることが決まったとき、多くの展示品が準備されたが、その中に、東郷元帥の揮毫の入った「三笠」の写真があった。

図10・84に示した。

日露戦役時の聯合艦隊司令長官として山本権兵衛海軍大臣が東郷平八郎を推輓したとき、その理由をお聞きなられた明治天皇に対して大臣は、「運が良い男で



図10・84 「三笠」と東郷元帥の揮毫



図10・85 東郷平八郎元帥

すから」とお答えしたという伝説がある。

たしかに東郷元帥は運の良い軍人だったが、むしろ運と度胸だけでは司令長官は務まらない。

海軍戦術から国際法にいたるまで、豊富な知識を持つており、理系的な感覚も有していた。

部下の才能を見抜く眼力も持っていた。

じつに希有な軍人だったといえる。

東郷平八郎にせよ秋山眞之にせよ、また陸軍の兒玉源太郎にせよ、日本をロシアの侵略から救うために高

天原の神が地上に遣わした人材だったとさえ思える。東郷元帥の代表的な肖像写真を図10・85に示した。

◎日本海海戦以後の日録

日本海海戦の直前から直後にかけての事項のうち、これまで記さなかった明治三十八年末までの事柄について、日録形式で列記しておく。

◇明治三十八年五月二十七日（一九〇五年）

この運命の日、仮装巡洋艦「臺中丸」が送った東京海軍省への電報数は一五二通だった。

◇明治三十八年五月二十八日（一九〇五年）

翌日に「臺中丸」から東京に送られた電報数は二七五通だった。

◇明治三十八年五月二十九日（一九〇五年）

さらにその翌日に「臺中丸」が送った電報数は一四

四通だった。

有線で「臺中丸」が三日間に送った電報数合計は五七一通で、その平均字数は一通あたり六二字であった。相当な量の通信が仮根拠地と軍司令部の間でなされていたことが分かる。

◇明治三十八年六月二十五日（一九〇五年）

三月九日に米国に発注していた二次電池が五電器入りで九〇個納入された。

到着は日本海海戦の後だが、必死で輸入していたことがわかる。

なおこの時代における国産の二次電池の性能や生産態勢は、残念ながら米国にはかなわなかった。

それを知った島津源蔵が負けじ魂を發揮し、必死で新方式の二次電池を開発したのはその後のことである。

◇明治三十八年六月二十八日（一九〇五年）

第三艦隊司令長官が、北遣艦隊や樺太方面望楼に使用するための「一字連送無線電信略符号」を定めた。

これは付録33にある。

樺太の占領は対露講和のために極めて重要であった。

◇明治三十八年七月四日（一九〇五年）

三等巡洋艦「對馬」が朝鮮海峽哨戒中に蔚山港付近で無電を打とうとしたとき、開閉器の発火事故が発生した。

開閉器は一無電機に複数用意されていたが、それは故障が多いためであった。

◇明治三十八年七月十五日（一九〇五年）

「宗谷望楼」の無電機が不調なため、第三艦隊の松下芳蔵大尉の派遣が決まった。同大尉は三〇哩を八〇哩に改善し、八月十五日に帰艦した。

木村駿吉は、「八丈島」と「吾妻山」の無電所と二等戦艦「扶桑」との間で「艦橋低減試験」を実施し、マストを低くすれば必ず到達距離が減ることを実証した。アンテナ高のみで全てが決まるわけではないが、それが極めて重要であることは、現在でも同じである。

◇明治三十八年七月二十一日（一九〇五年）

下士卒第十一回無電訓練が開始された。
まだ戦時であり、新しい無電要員を養成するための

訓練が続いていた。

◇明治三十八年八月一日（一九〇五年）

九月末から始まる第十二回下士卒無電訓練生二三名の水雷術練習所への入所の上申。

◇明治三十八年八月三日（一九〇五年）

横須賀工廠で二次電池五電器入り一二個の製造を開始した。完成は明治三十九年三月九日とされているので、国産化には相当な時間がかかったと分かる。

◇明治三十八年八月十日（一九〇五年）

水雷練習所長の中村静嘉大佐が、六月からなされていた凧による通信距離増大の実験結果を教育本部長に報告した。

◇明治三十八年八月三十一日（一九〇五年）

横須賀工廠において一等戦艦「朝日」の無電機の全てを修理した。このような修理は各艦でなされていたようである。

◇明治三十八年八月（一九〇五年）

この月、木村浩吉が佐世保鎮守府付となった。
日英同盟拡張協約が調印された。

◇明治三十八年九月五日（一九〇五年）

日露講和條約調印。

これについてのマスコミの短絡的反応については、
いろいろな書物に書かれているので略す。

◇明治三十八年九月七日（一九〇五年）

十一月の第十三回下士卒無電訓練計画の教育本部へ
の水雷術練習所からの上申。

次から次へと無電担当を訓練していたと分かる。

◇明治三十八年九月十一日（一九〇五年）

前述の木村駿吉『世界の無線電信』出版。

◇明治三十八年九月二十七日（一九〇五年）

第十二回下士卒無電訓練開始。

◇明治三十八年九月（一九〇五年）

第二艦隊の一等巡洋艦「八雲」の無線電信主任・田

村丕顯大尉（子爵）が、横臥式アンテナの実験で有望
な成果を得て報告した。

九月の初旬、第六駆逐隊司令・久保田彦七中佐が、
樺太方面で行動中の駆逐艦「潮」「神風」「初霜」で無
電実験をおこない、五〇哩の成績を得た。これは駆逐
艦としては極めて優れた性能だった。

この月、松代松之助の後継者として電気試験所で無
線を担当していた佐伯美津留が、長距離無電の結果を
電信協会雑誌の九月号十月号に発表した。戦争が終結
して実験が可能となったのであろう。なおこの雑誌は
通信工学関係の学会誌の前身である。

◇明治三十八年十月十六日（一九〇五年）

日露講和條約批准公布。

同じ日、東京の大本営電信所に三六式無電機を設置
して通信を開始した。しかしこれは二ヶ月で廃止とな
った。無電施設は海岸近くの高所に設けた方が有利だ
ったからであろう。

◇明治三十八年十月十九日（一九〇五年）

老岐崎他四望楼を廃止した。

望楼は維持が大変であり、次第に減り、代わりに艦船による哨戒が中心となつていった。

ただ、後の大東亜戦争時に、明治の望楼と似た位置に潜水艦探知の施設をかなり作つたらしい。

◇明治三十八年十月（一九〇五年）

松代松之助が逓信省を退官し、日本電氣に役員として勤務することとなった。

松代松之助は三六式には関与していないが、その直前の三四式への貢献は大きなものが有つたし、日本における無電研究のパイオニアであった。

後に木村駿吉は松代を称揚している。

佐伯美津留が長距離無電の報告を電氣学会雑誌十月号に発表した。これは日本最古の電氣関係学会誌である。

◇明治三十八年十一月九日（一九〇五年）

第十三回下士卒無電訓練開始。

◇明治三十八年十一月十日（一九〇五年）

松代松之助『現時の無線電信』を刊行。

外国および電氣試験所関係の実験が中心であるが、写真と図面が豊富であり、有用である。いかにも有能な技術者が書いたという本である。

◇明治三十八年十二月十二日（一九〇五年）

「海軍艦船條例」の中改正があつた。これによつて、艦船種が、軍艦・駆逐艦・水雷艇・潜水艇・運送船・病院船・工作船・雑役船に分けられた。

また同時に「駆逐艦條例」「潜水艇條例」が制定された。

大湊に要港部が設置された。大湊水雷団の昇格である。

◇明治三十八年十二月二十日（一九〇五年）

聯合艦隊が解かれ、翌日解散式がなされた。

この時の解散の辞は、秋山眞之が下書したとされるが、米大統領が感心したと言われ英訳もされて有名である。

またこの日、東郷平八郎は軍令部長兼海軍将官會議議員となり、海軍武功調査委員長となった。

◇明治三十八年十二月（一九〇五年）

この月、木村浩吉は呉水雷団長となった。

外波内藏吉は三等巡洋艦「明石」の艦長となった。

松代松之助は通信技師兼東京郵便電信学校教授となった。

日露戦争のクライマックス、日本海海戦のあったこの明治三十八年だが、寝食を忘れて無電機製造と設置に邁進した木村駿吉の家庭には、じつは厳しい現実があった。

駿吉には子供がたくさんいたが、そのうち男子は二人で、一人は早世したので、成長したのは阿蒙と言う息子だけだった。

阿蒙はフランス・キリスト教系の学校である暁星中学に通っていたが、あるフランス人教師が反日演説をしたのに反発して抗議したため学校側から危険な生徒とされ、駿吉が弁明したが認められなかった。

そこでこの年十五歳で退学し、戦勝後の十七歳の時

に単身ペルーに渡り、後アメリカに渡った。

外国で大変な苦勞をした末病氣になり、二十四歳で帰国したが、半年後に病没した。

（氣の毒なことだったが、駿吉に似て、自説を曲げない性格だったようである）

この不幸によって木村駿吉家には男子がいなくなつた。

夫人は養子を望んだが、駿吉は若い頃に自分が養子になって苦勞して元に戻ってしまった経験が有るので氣乗りせず、結局は三女多賀子の三男忠直氏を戸籍上の家督相続者とした。

忠直氏は比較的早くに亡くなられたが、その夫人やお子さんが木村駿吉の現在の御遺族という立場である。なお多賀子の夫（忠直の父）は櫻井忠武といって海軍機関学校を首席で卒業した海軍機関中将で、かつ、『肉弾』で知られる櫻井忠温陸軍少将の弟である。

